

第1章

事業概要

内閣府青年国際交流事業の概要
2024年度国際社会青年育成事業概要

1. 内閣府青年国際交流事業の概要

内閣府の青年国際交流事業は、昭和34年(1959年)に、上皇上皇后両陛下の御成婚を記念して青年海外派遣事業が開始され、以来、65年余にわたり実施されている。

日本と諸外国の青年との交流を通じ、青年相互の理解と友好を促進し、青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神を養い、国際協力の実践力を向上させることにより、国際社会で指導性を発揮し、社会貢献活動へ寄与する青年を育成することを目的として、各事業を実施している。

2. 2024年度国際社会青年育成事業概要

国際社会青年育成事業は、昭和34年(1959年)に上皇上皇后両陛下の御成婚記念事業として開始した「青年海外派遣事業」と、昭和37年(1962年)開始の「外国青年招へい事業」について、天皇皇后両陛下の御成婚を記念し、平成6年(1994年)に「国際青年育成交流事業」として改組したものを、令和元年(2019年)のお代替わりを契機に更に発展させたものである。令和6年度の本事業では、世界的な社会課題の解決に貢献する青年を育成するため、テーマに関連した取組を進める2か国それぞれに日本青年を約10日間派遣して、ディスカッション、施設訪問、ホームステイ等を行った。日本青年は、帰国後に、派遣先を含む4か国から招へいた外国青年と3日間の国際青年交流会議に参加し、テーマに沿ったディスカッションや文化交流等の活動を通じて、相互理解と友好を深めた。

(1) テーマ及び交流対象国

総括テーマ:気候変動

小テーマ及び交流国:

テーマⅠ【再生可能エネルギー】モロッコ、スペイン

テーマⅡ【水と防災】ドミニカ共和国、ジャマイカ

※下線付の2か国に日本青年を派遣

(2) 日本青年外国派遣

①派遣国及び人数

派遣国	人数
モロッコ	参加青年 11 名、団長、副団長各 1 名
ドミニカ共和国	参加青年 12 名、団長、副団長各 1 名
	合計 27 名

②日程

期間	活動
令和6年7月3日(水)～6日(土)(4日間)	事前研修(合宿形式)
令和6年7月14日(日)、8月3日(土)(2日間)	事前研修(オンライン形式)
令和6年9月7日(土)、8日(日)(各1日間)	オンラインプレ会議(テーマ別)
令和6年9月19日(木)、20日(金)(2日間)	出発前研修
令和6年9月21日(土)～30日(月)(10日間)	海外派遣
令和6年10月1日(火)～3日(木)(3日間)	国際青年交流会議
令和6年10月4日(金)～5日(土)(2日間)	帰国後研修
令和7年2月8日(土)	オンライン事業報告会

③派遣国における活動

小テーマの関連施設訪問、派遣国の青年等とのディスカッションを通じた交流、文化交流、ホームステイ、政府機関等への表敬訪問等

(3) 外国青年招へい

①招へい国及び人数

テーマ	招へい国	人数
Ⅰ 再生可能エネルギー	モロッコ	8名（リーダー 1名含む）
	スペイン	8名（リーダー 1名含む）
Ⅱ 水と防災	ドミニカ共和国	8名（リーダー 1名含む）
	ジャマイカ	8名（リーダー 1名含む）
		合計 32名

②招へい期間

令和6年(2024年)9月25日～10月5日の11日間

※日程内容は以下国際青年交流会議に記載。

③日本における活動

- ・地方プログラム：
愛知県（モロッコ、スペイン）、又は沖縄県（ドミニカ共和国、ジャマイカ）にて、地元青年との交流、ディスカッション、課題別視察、ホームステイ等
- ・国際青年交流会議：
日本青年とのディスカッション、文化交流レセプション等
- ・東京プログラム：振り返り、都内視察、修了式

(4) 国際青年交流会議

①概要・目的

国際社会青年育成事業においては、事業の効果的な実施に資することを目的として、日本青年海外派遣及び外国青年招へいの参加青年が一堂に会する「国際青年交流会議」を毎年1回開催している。

今年度の会議においては、総括テーマ「気候変動」の下、日本及び各国の青年が、2分野の小テーマ「再生可能エネルギー」及び「水と防災」に分かれて議論を行った上で、参加青年からテーマに関する議論の成果を発表し、もって国際社会に生きる青年の育成を図るものである。

②日程

月日	プログラム内容	
9月25日（水）	外国参加青年来日	外国参加青年オリエンテーション
9月26日（木）～30日（月）	地方プログラム	【モロッコ・スペイン】：愛知県 【ドミニカ共和国・ジャマイカ】：沖縄県
10月1日（火）	東京プログラム 国際青年交流会議	午前 オリエンテーション テーマ別訪問及び講義 【再生可能エネルギー】資源エネルギー庁 【水と防災】気象庁 午後 テーマ別視察及び講義 【再生可能エネルギー】積水化学工業株式会社（東京国際クルーズターミナル）、イベルドローラ・リニューアブルズ・ジャパン株式会社 【水と防災】東京都水道歴史館 午後 テーマ別ディスカッション
10月2日（水）		午前 テーマ別ディスカッション 午後 テーマ別ディスカッション、文化交流レセプション
10月3日（木）		午前 テーマ別ディスカッション 午後 成果発表会、評価会
10月4日（金）		午前 振り返り、都内視察 午後 都内視察、修了式、歓送会
10月5日（土）	外国参加青年帰国	

③小テーマ別ディスカッショングループの編成

テーマⅠ【再生可能エネルギー】

ファシリテーター 1 名

日本青年（モロッコ派遣団）11名、モロッコ青年 8 名、スペイン青年 8 名

テーマⅡ【水と防災】

ファシリテーター 1 名

日本青年（ドミニカ共和国派遣団）12名、ドミニカ共和国青年 8 名、ジャマイカ青年 8 名

第2章

事前研修及びオンラインプレ会議

事前研修

オンラインプレ会議について

テーマⅠ

再生可能エネルギー

テーマⅡ

水と防災

事前研修

2024年度 日本青年外国派遣

選考試験に合格した24名の参加青年に対し、7月3日から6日までの4日間、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、合宿形式で事前研修を実施した。その後、7月14日及び8月3日にオンラインで事前研修を行った。

この研修は、本事業の効果的な実施を図るべく、参加青年が事業の趣旨及び目的を十分に理解し、日本青年代表としての心構えを養うとともに、テーマに関する日本の事情や派遣国の諸事情についての認識と理解を深め、出発前研修までの自主研修期間の準備として目標を明確にすることを目的とするものである。

参加青年は、各種講義を受講するとともに、派遣団ごとに、役割分担の決定と準備事項の確認、ディスカッションに関する手法の確認や日本文化紹介の準備等を行うことを通じてチームビルディングを図った。



参加青年同士でアイスブレイクを行う
(チームビルディング講座)



テーマ（水と防災）に関する講義を受ける

	月日	時間	プログラム
1	7月3日 (水)	13:15-13:45 13:45-14:15 14:15-14:45 15:00-16:30 17:30-18:30 18:45-20:00 20:00-22:00	開講式 内閣府からの事業概要説明 オリエンテーション チームビルディング講座 夕食 団別研修 自主研修
2	7月4日 (木)	09:00-10:00 10:15-11:15 11:30-12:00 12:00-13:00 13:30-15:30 16:00-17:30 17:30-18:30 18:45-20:00 20:00-22:00	プロトコール講座 派遣国に関する講義 講師【ドミニカ共和国】：牧内博幸 元駐ドミニカ共和国日本国特命全権大使、 東京理科大学国際化推進センター長 講師【モロッコ】：花谷卓治 元駐モロッコ日本国特命全権大使 団別研修 昼食 在京派遣国大使館表敬訪問 団別研修（内閣府からの派遣国説明） 夕食 渡航に関する説明 自主研修

	月日	時間	プログラム
3	7月5日 (金)	09:00-10:45 11:00-12:00 12:00-13:00 13:15-15:15 15:15-15:45 16:00-17:30 17:30-18:30 18:30-22:00	団別研修 ディスカッションテーマ別講義 講師【再生可能エネルギー】：手代木秀太 資源エネルギー庁省エネルギー・新エネルギー部新エネルギー課総括係長 講師【水と防災】：大橋麻希子 内閣府政策統括官(防災担当) 付参事官(普及啓発・連携担当) 付参事官補佐 昼食 ディスカッション講座 事務連絡 各派遣団長からのテーマに関する講義 夕食 自主研修
4	7月6日 (土)	09:30-12:00 12:00-13:00 13:00-14:00 14:00-14:30	団別研修 昼食 事後活動に関する説明 閉講式

1. オンラインプレ会議について

円滑な対面交流プログラムの実現に向けて外国参加青年と日本参加青年の親睦を深めるため、日本と各国の時差を考慮しつつ、テーマ別にオンライン交流(利用ツール:Zoom)を実施した。

9月7日(土)に「水と防災」をディスカッションテーマとするドミニカ共和国及びジャマイカと日本の参加青年が、9月8日(日)には「再生可能エネルギー」をテーマとするモロッコ及びスペインと日本の参加青年がそれぞれオンラインで対面し、自己紹介やアイスブレイク、ディスカッションに関する準備や意見交換等を行った。

2. テーマⅠ：再生可能エネルギー

◆日時

日本時間 : 令和6年(2024年)9月8日(日)17:00-19:00
モロッコ時間 : 令和6年(2024年)9月8日(日) 9:00-11:00
スペイン時間 : 令和6年(2024年)9月8日(日)10:00-12:00

◆参加者

日本参加青年11名、団長、副団長各1名
モロッコ参加青年 : 8名(リーダー1名含む)
スペイン参加青年 : 6名(リーダー1名含む)
ファシリテーター : 1名

◆プログラム内容

日本時間	内容
17:00-17:10	開会、内閣府挨拶、内閣府担当者自己紹介 各団長自己紹介、ファシリテーター自己紹介
17:11-18:05	参加者自己紹介、アイスブレイク(ブレイクアウトルームにて)
18:06-18:10	休憩
18:11-18:30	ディスカッションテーマの説明(日本青年による発表)
18:31-18:50	ディスカッションのための準備(連絡手段の設定と意見交換)
18:51-19:00	閉会、内閣府挨拶、事務連絡



「再生可能エネルギー」の参加者集合写真

3. テーマⅡ：水と防災

◆日時

日本時間 : 令和6年(2024年)9月7日(土) 9:00-11:00
 ドミニカ共和国時間 : 令和6年(2024年)9月6日(金)20:00-22:00
 ジャマイカ時間 : 令和6年(2024年)9月6日(金)19:00-21:00

◆参加者

日本参加青年12名、団長、副団長各1名
 ドミニカ共和国参加青年 : 7名
 ジャマイカ参加青年 : 7名(リーダー1名含む)
 ファシリテーター : 1名

◆プログラム内容

日本時間	内容
9:00- 9:10	開会、内閣府挨拶、内閣府担当者自己紹介 各団長自己紹介、ファシリテーター自己紹介
9:11- 9:55	参加者自己紹介、アイスブレイク（ブレイクアウトルームにて）
9:56-10:15	グラウンドルールの説明と設定
10:16-10:50	ディスカッションテーマと事前課題の説明
10:51-11:00	閉会、内閣府挨拶、事務連絡



「水と防災」の参加者集合写真

第3章

東京プログラム

東京プログラムについて

プログラム日程

テーマⅠ
再生可能エネルギー

テーマⅡ
水と防災

1. 東京プログラムについて

外国参加青年は9月25日(水)に来日、翌日より地方プログラムへ出発し、9月30日(月)に帰京、10月1日(火)から3日(木)までの間、都内にて「国際青年交流会議」に参加した。モロッコ、スペインの青年は「再生可能エネルギー」、ドミニカ共和国、ジャマイカの青年は「水と防災」の2テーマに分かれ、日本参加青年とともにディスカッションや視察を行い、3日(木)には3日間にわたる活動をまとめた成果発表会を行った。

10月4日(金)は本事業の振り返り、都内視察、修了式及び歓送会に参加し、10月5日(土)に帰国した。

2. プログラム日程

日付	時間	プログラム
9月25日(水)		来日、オリエンテーション
9月26日(木)～30日(月)		地方プログラム
10月1日(火)	9:00-15:00	テーマ別視察
	15:30-18:00	テーマ別ディスカッション
10月2日(水)	9:00-12:00	テーマ別ディスカッション
	13:20-16:00	テーマ別ディスカッション
	17:30-19:00	文化交流レセプション
10月3日(木)	9:00-12:00	テーマ別ディスカッション
	13:00-15:30	成果発表会
10月4日(金)	9:30-11:00	振り返り
	11:00-16:30	都内視察
	18:00-20:00	歓送会
10月5日(土)		帰国

3. テーマⅠ 再生可能エネルギー

◆総括テーマ

気候変動

◆小テーマ

再生可能エネルギー

◆実施プログラム

「温室効果ガス削減のために、持続可能なエネルギーをどう確保していくべきか」を議論の焦点とし、再生可能エネルギーをめぐる現状の課題及びそれに向けた努力や解決策について、各国ケーススタディや視察、各国青年間のディスカッションを通じて、各々の考えを深めると同時に、議論して意見をまとめていくことを目的とする。

議論を通じ、相手の意見を尊重して聴く能力を向上させること、自分の意見を相手に明確に伝える技術を養うこと、建設的に議論を進められるよう国際人としてのディスカッションスキルを習得することを目指した。

◆テーマ別視察

資源エネルギー庁

積水化学工業株式会社(東京国際クルーズターミナル実証実験サイト視察及び東京国際交流館における講義)

イベルドローラ・リニューアブルズ・ジャパン株式会社(東京国際交流館における講義)

◆ファシリテーター

源飛輝

◆感想文：百花斉放百家争鳴

ファシリテーター 源飛輝

ファシリテーターなる身分でありながら、実は同世代と括れてしまう方も多い碩学な各国参加者を前にして、その才気煥発ぶりに対し「嗟乎、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」の喩えも引きたくなる程、諸賢の議論には改めて敬意を表したい。願わくは今回の侃侃諤諤で喧喧囂囂な慌ただしく流れた時間や国境を越えた得難い邂逅が、何らかの嚆矢濫觴に昇華し、各自が新しく開眼するに資する糧と相成ったのを祈念する次第である。銘々が本事業を端緒に如何なるルビコン川を渡ったのか、何時か久闊を叙して過日を顧み「朋有り遠方より来たる、亦た楽しからずや」とならんことを待ち望んでいる。

産官学民の4グループに分かれて多岐に亘る議論を繰り広げるにつれ露見し蓄積された各国由来の集合知は荘厳で、分野の異なる若手専門家が協力し限られた時間の中で積み上げたアウトプットは、アイザック・ニュートンが書簡で記したように「巨人の肩の上に立つ」謙虚さすらも得られそうな代物であった。これが国際的に異分野・異年齢のタレントが集まる意義を象徴していたように思う。しかし、同時に専門性の多寡や志向の違いも発生するため、大小の不満も時に散見されたが、基本的には自らの舵取りで外国語を操りながら全てを乗り越えていった各チームにおかれては、その紆余曲折こそ是非振り返っていただきたい。呂律の回る限り言を尽くして初めて至る無知の知もあった筈だ。

厳しいスケジュールの中でも、滔々たる議論は可能な限り本格的で、たとえばある施策について論ずるにしても、表面的・技術的な話に終始せず、まずは各国市民の政府に対する信頼度や各国の歴史・政治・文化にまで裾野を広げ、口角泡を飛ばしていたのが印象的だった。唯唯諾諾を潔しとせず、時に繰り広げられた舌戦は、果てた後にはノーサイドで、相互に丁寧なまでに考え得る限りの言の葉を重ねてみれば、一部に見

られた臆病な自尊心や尊大な羞恥心もかなぐり捨てて虚心坦懐の境地に届いたように映った。

時差ぼけの残る中、体力の続く限りプログラムに食らいついた後には、精も根も尽きる疲労があったかもしれないが、栗林中将の「矢弾尽き果て散るぞ悲しき」どころか、晴れやかな破顔一笑、終幕と収穫を迎えて散るぞ嬉しき。国の代表青年という選抜を経た済々たる多士は、前段の「国の為重き務を果し得」についても、幾許か体感していただけたように思料する。尤も、あれだけ濃密な時を共に刻み、同じ釜の飯を食らった仲間達が正に散り散りにならんとする刹那は淡い寂寥を覚えたろうが、同時に『十二人の怒れる男』のラストシーンのように高爽の気を帯び、清涼感ある蒼穹が広がっていたのではないだろうか。

「集まり散じて人は変われど仰ぐは同じき理想の光」とでも言わんばかりの歴史ある本事業の末席を汚すにあたって、今回の多国籍船が茫洋たる気候変動・再生可能エネルギーというテーマの大海で難破も遭難もなく針路を取り得たのは、船頭多くして船山に上るどころか、全船員が久遠の理想たる北極星を練り上げて掲げ、灯台下暗しも拔かりなくフォローし合えたからこそだ。タイタニック号になることなく接岸できた。その行き先は、コロンブスになぞらえればアメリカ大陸だろうがインドだろうが各人各様だろうが、今回扱った内容はあくまで氷山の一角に過ぎないことも重々に意識しつつ、今後の新天地におけるご活躍に役立たせることを切に期待したい。

異国間・異文化間・異業種間の議論は、我々が「正しく」あれば、出エジプト記におけるモーゼの海割り如く、我々を自由へと導き、新しい知の地平を拓く近道な筈である。コロナ禍を脱したかと思えば、眼前のウクライナ情勢やイスラエル・パレスチナ情勢に目を奪われ、さらに気候変動を巡る諸問題は複雑で海よりも深いし、文字通り、刻々と海は物理的に深くなっていつている。

斯様にも世間の水の苦さが知れるが、否応なく賽は投げられたのであり、その道が茨であっても道が続く限り、進まなければならない。今後、前門の虎、後門の狼と対峙する中で、今回のトレーニングで磨き、体得した議論の方法や心構えは、多分野にリーダーとして邁進していくであろう各位の武器となるのではないか。

それを踏まえ、一方で「神はサイコロを振らない」とアルベルト・アインシュタインが喝破した通り、厳然かつ冷徹な学問や真理を突き詰める姿勢や頑なさや強さも、どうかそのまま失わず、夫々の一隅を照らし続けていただきたい。と、辛うじて一日の長を僅かに携えて皆さんの議論と交流の場にご縁を頂いたファシリテーターとしては総括したい。

からっ風が吹きすさび、時には殺伐として過酷な中にあっても、多肉植物のように、その内面において潤いを絶やさず、瑞々しい感性を以て、やがて大輪の花を咲かせ、たわわな果実が結ばれんことを、そしてそれらが巡り巡って、明日は今日よりも明るくならんことを、私は願って已まない。その一助となることが今回できたのであれば、また仲間として一助となり続けることができるのであれば、身に余る光栄である。

◆感想文：

日本参加青年 モロッコ派遣団 吉村 聡哲

派遣国活動では、モロッコの国としての再生可能エネルギーに対する取組について多くを学ぶことができたが、日本に帰国してから行われた国際青年交流会議でも得られることは多かった。

国際青年交流会議では2日間にわたってディスカッションを行い、最終日に自分たちが考えたことをスライドにまとめて全体場で発表をした。再生可能エネルギーをテーマにした私たちの団は、Academic, Government, Industry, Citizen の四つのチームに分かれてディスカッションを進めることにし、私は Citizen チームの一員として、再生可能エネルギー導入におけるより良い意思決定方法と再生可能エネルギーの普及を促進するために市民ができることを取り上げてディスカッションを行った。

ディスカッションを始めてまず驚いたのが、外国招へい青年の知識の豊富さである。私たちが再生可能エネルギーに関して重要であると考えキーワードについてそれぞれの国の状況を共有した際、モロッコとスペインの青年からは政治や歴史、法制度や経済状況など、幅広い分野の現状を詳しく紹介してくれた。スペイン青年には日頃から意識の高い青少年活動組織に所属している人が多かったことから、政治制度や若者の多様な考えについて詳しかった。一方でモロッコ青年は、太陽光パネルや貯蔵用バッテリーなどを研究する

Ph.D. の学生が大半だったため、技術的な面について多くの知見を持っていた。私たち日本青年には、大学や仕事で平日頃から再エネに関わっている青年もいれば、全くの異なる分野で活躍している青年もいて幅広い層が揃っていたため、それぞれのバックグラウンドを基に意見を出し合った。その結果、それぞれが自分の強みをいかしてディスカッションに積極的に参加することができ、長いと思っていた2日間のディスカッションの時間では足りないほど、議論を深めることができた。

今回のプログラムにおいて最も貴重だった学びは、自分と同じような問題意識を持って活動している青年が世界中にいることを知ることができたこと、そして、将来日本や海外で幅広い分野の最前線で活躍するであろう青年たちと知り合うことができたことである。日頃普通の大学生として過ごしていると、自分と同じような問題意識を持っている若者があまりいないように感じられ、事業参加前はふいに不安や焦りで押し潰されそうに感じるがあった。しかし、外国招へい青年との交流を通し、世界中にアクションを起こそうとする若者がいることを真に理解できたことで、私はまずは自分ができることから全力で取り組み、そこから活動を広げていけばいいんだ、と確信して前に進み出すことのできるマインドセットを得ることができた。

令和6年度国際社会青年育成事業への参加は、自己の大きな改善と変革につながった。20時間の旅を経て、9月25日、東京の羽田空港に到着した。最初の数日間は愛知県を訪問し、日本文化の素晴らしい側面に気付かされた。疲れてはいたが、皆間違いなく満足していた。

東京に戻り、10月1日、モロッコ、スペイン、ジャマイカ、ドミニカ共和国、日本から代表団が集まってオリエンテーションが行われ、さらに濃密なプログラムが始まった。次の訪問先は、経済産業省の資源エネルギー庁だった。訪問中、エネルギー転換や天然資源管理などの極めて重要なテーマについて専門家と話をし、日本のエネルギー規制について知識を増やすことができた。続いて、環境に優しい資材の開発をリードする、積水化学工業株式会社を訪問した。その後、スペインにある世界最大の再生可能エネルギー企業の一部、イベルドロラ・リニューアブルズ・ジャパン株式会社が講演するカンファレンスに向かった。1日の終わりに、産業、投資、政府の役割、市民の関与という、エネルギー転換に関するディスカッションのサブテーマ4つが決まった。3日間にわたり各グループによる話し合いが行われ、非常に刺激的な意見交換の中で、様々な文化的・経済的バックグラウンドからの幅広い意見が集約された。

10月2日は、各テーマについての分析を深め、具体的な提案を打ち出した。同日夜には文化交流も行われ、各団が伝統衣装で国を代表し、全参加者間で友愛の精神と互いへの敬意が強まった。

討議の最終日である10月3日、それまでに出された意見や提案をまとめたプレゼンテーションが終了した。各グループが結論を他の団に発表し、「水と防災」といったテーマに取り組んだグループもあった。こうした機会の結果、それぞれの国で再生可能エネルギーの振興

を支える創造的な解決策が明らかになった。

東京での最終日である10月4日は、都内でも有名な地区を巡り、日本の歴史と文化を学んで過ごした。1日の終わりには表彰式が行われ、プログラムの正式な終了を祝った。全ての団が親善と祝賀の精神を持って集まった、非常に重要な時だった。事業は、単に旅する機会を超えたものだった。より幅広くグローバルに考えるよう促され、新たな考え方に開眼し、個人的にも仕事面でも私の成長に欠かせないものだった。

10月5日、東京を立ち、ついにそれぞれの国への帰路に就いた。素晴らしい思い出と、主催者の方々の尽力と丁寧な歓迎に対する心からの感謝を持ち帰った。

本事業への参加は、個人的にも仕事面でも、自己変革につながった。様々な訪問や議論を通じ、再生可能エネルギー、サステナビリティの取り組み、環境変化を推進するに当たって各業界と政府が果たす重要な役割について、理解が深まった。積水化学工業株式会社への訪問は環境に優しい解決策を創造するためには技術革新が重要であることを実感した瞬間だったが。加えて、エネルギー転換、投資と市民参加の必要性に関する議論は、モロッコが再生可能エネルギーの取り組みを前進させる方法について、新たな視点が与えてくれた。

令和6年度国際社会青年育成事業の主催者の方々、そして本事業を忘れられない体験とするのに貢献した全参加者に、深く感謝したい。ホスピタリティー、綿密な計画、意義深いディスカッションの機会は、私の物の見方を大きく形作るものだった。学びの体験を洞察とインスピレーションに富んだものにしてくださったファシリテーターには特に感謝している。

本事業での体験を、衝撃的で思い出深いものにしてくださった関係者の皆様に改めて御礼申し上げる。

◆感想文：

東京は長い間、写真や話で聞いていた場所でしたが、令和6年度国際社会青年育成事業に参加したスペイン代表団の期待を大きく上回りました。代表団は、アイナラ・アルファロ、アンヘラ・コルドベス、マリア・エテッサム、パブロ・デ・ラ・オス、アナ・ノボア、マリオ・スアレス、アンヘル・ペレス、および団長のチャビエル・トリアナで構成されていました。滞在中、公的機関訪問だけでなく、日本の活気ある首都を探検する機会もありました。日本は私たちを温かく受け入れ、再生可能エネルギーに関する研究や培ってきた知識を実際の現場で活用する機会を提供してくれました。

学術的には、再生可能エネルギーグループのモロッコ代表団と日本代表団と協力し、共通の目標に向けて取り組み、最終的なプレゼンテーションを完成させました。このプレゼンテーションは、ジャマイカ、ドミニカ共和国、および日本の「水と防災」グループの代表団を含む令和6年度国際社会青年育成事業の全参加者に向けて発表しました。

また、資源エネルギー庁での会議や技術見学を含む、有益な会議に参加しました。特に印象的だったのは、積水化学工業株式会社を訪問し、太陽光発電における革新について学んだことです。実際、東京国際クルーズターミナルでは、日本最大規模のフィルム型ペロブスカイト太陽電池の検証を見る機会がありました。このような太陽電池はまだ市場には出ていません。そのため、太陽光発電技術の未来を垣間見る刺激的な体験

スペイン招へい青年団 アイナラ・アルファロ

となりました。

個人的には、特に在日スペイン大使館が訪問に感謝しており、その際に在日スペイン大使館公使参事官のミゲル・ゴメス・デ・アランダ・イ・ビジェン氏にお会いしました。代表団の一部メンバーは、天皇陛下、並びに皇后陛下とお話しする時間をいただくことができ、感激の瞬間となりました。さらに、ガイド付きの都内ツアーを通じて東京の文化や料理に触れ、学術的な領域を超えた日本への理解を深めることができました。

なお、この事業は、他の若い代表団との協力を通じて、批判的思考と若者のエンパワーメントを促進しました。この経験は私たちに貴重な見識を与え、将来に大きな影響を与えるでしょう。現在、スペイン代表団は「世界再生可能エネルギーの日」を祝うプロジェクトに取り組んでおり、持続可能なエネルギーの緊急性と重要性を認識しています。

最後に、この特別な経験に参加させてくださった主催者の皆様に私たちは心から感謝申し上げます。この事業に参加したことにより、重要な見識を得ることに加え、世界中の著名な方々とのつながりも築くことができました。この旅は、名誉であると同時に特権であり、より良い未来のために再生可能エネルギー分野での取り組みを継続するための動機と気づきを与えてくれました。



ホテルニューオータニでの国際青年交流会議



資源エネルギー庁でのスペイン代表団

4. テーマⅡ 水と防災

◆総括テーマ

気候変動

◆小テーマ

水と防災

◆実施プログラム

「深刻化する水災害への対応」を議論の焦点とし、災害対策や予防、災害発生時や発生後など各段階における適切な対応について、各国ケーススタディや視察、各国青年間のディスカッションを通じて、各々の考えを深めると同時に、議論して意見をまとめていくことを目的とする。

議論を通じ、相手の意見を尊重して聴く能力を向上させること、自分の意見を相手に明確に伝える技術を養うこと、建設的に議論を進められるよう国際人としてのディスカッションスキルを習得することを目指した。

◆テーマ別視察

気象庁

東京都水道歴史館

◆ファシリテーター

三谷優衣子

◆感想文：違いから学ぶためのよりよいコミュニケーション ファシリテーター 三谷優衣子

私はドミニカ共和国・ジャマイカ・日本の青年が参加する「水と防災」テーマのファシリテーターとして、7月の事前研修でのディスカッション講座と9月のオンライン会議、10月の国際青年交流会議のディスカッションのデザインとファシリテーションを担当した。「水と防災」では、「深刻化する水災害にどう対応するか?」という問いに対し、気候変動により高頻度・激甚化する水関連の災害への対策と、インフラとしての水資源管理という二つのテーマが含まれた。ハリケーンに伴う水災害に関する具体的な仮想シナリオを設定した上で、「水資源管理とインフラストラクチャー」の他に、災害の時系列に沿って「災害発生前：防災・減災計画」「災害発生時の避難対応」「災害後の復興／ビルド・バック・ベター」という4グループに分かれ、それぞれ問いに対して適応策を検討した。これらの適応策においては、実施する主体がどのような組織であれ、参加者たち自身がどのように働きかけるか、という点にフォーカスして考えることを強調した。

国際青年交流会議初日では、まず気象庁と東京都水

道歴史館への視察を経て、アイスブレイクと事前課題として各自調べていた各国の災害の状況とベストプラクティスの事例を共有し、共通点や相違点を分析することで、お互いの国の状況を理解した。2日目はテーマごとに関わる全てのステークホルダーを洗い出し、その中でも災害の影響により脆弱な立場におかれる人・コミュニティは誰かとその理由について話し合った。災害についてのこのディスカッションにおいて、私が重視していた視点は地理・社会・経済などのさまざまな理由でより脆弱になる人やコミュニティへの配慮である。これらの情報を踏まえて作成したアクション案をポスターにまとめ、メンバーをシャッフルして全員が全グループの案に対して質問やフィードバックをするというアクティビティを行った。その後元のグループに戻り、フィードバックを踏まえて案の修正や調整を行った。3日目は全グループでのリハーサルと相互の質疑応答の後、最終準備を行い、成果発表会を行った。限られたディスカッションや準備時間の中であったが、どのグループもそれまでのディスカッション内容を踏

まえた内容をうまくまとめ上げており、グループごとの特色もよく出ていたと思う。

会議を運営する上で重要視していたのは、異なる状況の参加者全員が参加・発言しやすい場を作るための「D（ダイバーシティ／多様性）、E（エクイティ／公正性）、I（インクルージョン／包摂性）」という原則である。例えば、3か国中ジャマイカのみが英語を第一言語とすることから参加者間の英語力の差があった。さらに、専門家として関連テーマに従事する参加者と学生等そうではない参加者との間のテーマに関する知識や経験の差もあった。これらの差は発言・参加のしやすさに大きく影響するため、進行上の懸念であったと言える。

◆感想文：

日本参加青年 ドミニカ共和国派遣団 石黒 桃子

国際交流会議と一緒にディスカッションしたジャマイカとドミニカ共和国派遣団の外国参加青年たちとの出会いは、本事業において大きな要素だった。この出会いによって私は大きなカルチャーショックを受け、世界で活躍するために大切なことを学ぶことになる。水と防災に関するディスカッションが始まると私は早速カルチャーショックを受けた。青年たちによって取り組む姿勢に大きな差があったのだ。私自身、ディスカッションというと全員が必ず参加し、意見を述べる場であると認識していたため、途中で居なくなったり居なかったのにも関わらず発表はしたい姿勢を見せたりする外国参加青年に戸惑いを隠せなかった。戸惑ったというよりは途中で参加していなかった時間もあったにもかかわらず何を言っているのだ、と苛立ってしまうことの方が多かった。挙句の果てに発表用のスライドを作っていないのに「発表したいから自分が話すパートをくれない？」と聞かれた時は流石に苛立ちもピークに達し、「あなたが話したいなら、あなたでスライド作ってそこを話して！」と慣れない英語で語気強く言ってしまうこともあった。言ってしまった後に気まずくなるのではないかと、さすがに言いすぎてしまったのではないかと少し後悔したが、言われたことも気にせず黙々とスライドを作り始めた彼らを見て、これくらいはっきりと言わないと伝わらないのかと気づいたとき、自身がどれほど“日本的な”コミュニケーションに染まっているかを痛感した。ディスカッション全体を通じて、外国参加青年の取り組む姿勢に苛立ちながら、ときにその苛立ちを相手にぶつけつつどうにか英語でついて行くというのが私の現実であった。普通、

対策として、毎日ディスカッション前にしっかりとアイスブレイクを通した雰囲気作りや、グラウンドルールを設定し毎朝最初に全員で読み上げることなどを実践した。各グループ内で参加者の発言量や参加度合いに差は残ったが、ディスカッションを進めていくうちにそれぞれの参加者が自分の担える役割を担っていくという動きが出てきた。さらに全体を通して、今回の3か国はすべて島嶼国であり台風／ハリケーンの影響を受けているという共通点はあるが、経済や社会状況、災害対策の状況なども大きく異なるため、互いの違いから学ぶことが共通の経験としてできたと思う。

苛立ちをぶつけられたら話し合いにくいなどと感じてしまうものだが、彼らは持ち前の切り替えの早さで苛立った私とも積極的に話し合いをしようとしてくれたように感じる。

最終プレゼンで彼らと共に発表し、「とても良いプレゼンだったよ。ありがとう。」と言われた時にふと気づいてしまったのだ。彼らは結果を重視はしているが、過程はそれほど重視していないこと、私が過程を重視しすぎていたということに。真面目にやって結果を出してこそ価値があると思っていた私の固定観念が崩された瞬間だった。この時初めて彼らへの苛立ちが彼らの文化の尊重へと変わった。日本と中南米では文化が違うということはわかっていたつもりだったが、考え方も文化によって異なることをわかっていたようで理解していなかった。この経験を通じてその点に気づくことが出来たこと、そして海外で活躍するためには文化と考え方の違いを本質的に理解することの重要性を感じられたことは非常に大きな経験だったと感じる。



最後は笑顔でディスカッショングループと一緒に写真

強く影響を受けた経験

INDEX2024 プログラムの一環として、日本で水管理と防災に取り組む主要な機関を訪れる機会を得た。最初に訪れたのは気象庁で、ここでは日本がどのように気象情報を収集し、分析し、国民に提供するかを学んだ。特に、リアルタイムの衛星画像を表示する大きなスクリーンがある制御室を見学したことが印象深かった。これらのツールは気象パターンを監視し、潜在的な災害を予測し、公共の安全を確保するために迅速に警報を発する上で重要である。

次に訪れたのは東京都水道歴史館で、日本の水供給システムの進化についての洞察を得た。この博物館では、日本の水道がどのように発展してきたかについての興味深い歴史的視点を提供していた。さらに、日本人が水資源の管理と保護にどれだけの価値を置いているかも強調されていた。日本が水の保全において革新を続け、将来世代のために清潔な水へのアクセスと持続可能な管理を確保している点は非常に印象的であった。

得られた学びと成果

プログラムの主要な部分として、協働によるアクションプランの作成があった。私はジャマイカと日本の参加青年と共に、水害発生時の避難手順に関するアクションプランを作成した。この取り組みは、各国の避難戦略を比較し、共通点と相違点を明らかにするという点で非常に有意義であった。私たちのケースでは、水害時に、特に避難所を利用する際の子どもや高齢者、障

がいのある人々といった脆弱な立場にある人々が直面する不平等を軽減する方法に焦点を当てた。話し合いの中で、三か国には強固な枠組みがあるものの、脆弱な人々のニーズに応える方法には改善の余地があることが明らかになった。私たちはこれらのギャップを埋めることを目的とした計画を作成し、特に脆弱な人々にとっての避難所の安全性とアクセスの向上を目指した。意見交換は啓発的であるだけでなく協働的であり、各国が共通の課題に対して独自の解決策を提供する場となった。

プログラムのもう一つのハイライトはフィードバックセッションで、各グループがアクションプランを発表し、参加者やファシリテーターから建設的な意見をもらった。このインタラクティブなアプローチにより、提案を実用的かつ包括的なものに改善できた。多様な視点に触れ、各国が同様の問題にそれぞれの国の文脈を踏まえどのように取り組んでいるかを知ることができたのは、特に充実した経験であった。

地域社会への応用

結論として、東京でのディスカッションセッションは非常に有意義であった。本プログラムを通じて得た知識は、私の業務を向上させるだけでなく、特にドミニカ共和国における脆弱な人々の緊急時のニーズに対応するための水管理や災害準備の改善に貢献するものであると確信している。その一例として、地域の避難隊へのボランティア参加、職場での防災訓練への参加、家族の避難計画の作成などを考えている。

影響を与えてくれた経験

このプログラムを通して、いくつかの有益な経験をすることができた。その中でも、各国の団員が2名ずつ配置されたグループで行ったディスカッションには特に強い影響を受けた。そこでは、忍耐、リーダーシップ、チームワークやお互いを理解することの大切さを学ぶことができた。時折社会的な障壁にぶつかったものの、お互いの経験や知見を共有し、さながら「審判」としてメンバー全員の意見に耳を傾けられたことは、身が引き締まるような経験でもあった。この経験から、多様性のあるグループやチームのメンバーとして共通の目標を効果的に達成するということはどのようなことであるか、という今までとは違う視点を見出すことができた。

学んだこと

異なる社会経済的特質や地理的位置を有する3か国において、水害に関しては多くの共通点があるということは大きな気づきであった。今日、気候変動によりこの3か国がますます深刻な影響を受けているのは確かだ。ハリケーンや台風といった異なる呼称ではあるものの、同じような災害を経験していることに加え、気候変動現象に関する防災対策や担当機関もまた類似している。早期警報システム、氾濫原の保護、確立された建築基準法に従った構造物の建設などの災害緩和

対策も、この3か国全てに存在することが分かった。

また、これらの類似点の一方で相違点もいくつか見られた。それは即ち、災害対応に割り当てられる予算、災害弱者とみなされる人々の特性、水害対策のための現存する技術の精巧さである。

プログラム参加後の活動

このプログラムでは、我々の地元で活用すれば効果的で有益であることが証明できそうな学びをいくつか得た。技術的な面から言えば、大雨災害が近づいている際、気象庁(JMA)が採用している洪水ハザードマップを使って特定の地域に住む住民に直面する危険度を通知し、警戒と備えを促すという考え方は歓迎すべき取り組みであろう。このような体制が整えば、人々は物理的に自宅を被害に持ちこたえられるようにしたり、あるいは避難を開始したりと、災害発生に備えるための十分な時間を確保することができる。洪水は、ここジャマイカで直面している最大級の水害の一つである。従って、この「最善策」がジャマイカで活用されれば、大きな効果をもたらすであろう。そのためには、ジャマイカ気象庁やジャマイカ政府のような関係機関、つまり、この最善策を確立し発展させることに直接的な関心を持つ可能性のある団体に働きかけることが、最初のステップなのである。

第4章

地方プログラム

地方プログラムについて

愛知県

沖縄県

1. 地方プログラムについて

外国参加青年は、令和6年(2024年)9月26日(木)から30日(月)まで、2グループに分かれて地方プログラムに参加した。「再生可能エネルギー」をテーマとしてモロッコ及びスペインの外国参加青年は愛知県を訪問し、「水と防災」をテーマとして、ドミニカ共和国とジャマイカの外国参加青年は沖縄県を訪問した。外国参加青年は地元同行青年と共に各地で地元の人々と交流し、地方の文化に触れ、体験プログラム、ホームステイなどを経験した。また、それぞれのテーマに沿った施設を訪問し、ディスカッションに参加するなど、地域の取組やテーマへの理解を深めた。

2. 愛知県（テーマⅠ：再生可能エネルギー）

◆日程

日付	時間	プログラム
9月26日(木)		東京駅から豊橋駅へ移動(ひかり643号)
	14:40-16:00	豊橋技科大学、豊橋バイオマスソリューションズ視察
	16:30-18:00	武蔵精密工業、マイクログリッド視察
9月27日(金)	9:30-11:00	豊橋バイオマス利活用センター視察
	13:00-15:00	豊橋市役所、講義とディスカッション
	18:00-20:00	レセプション(大村秀章県知事出席)、ホームステイマッチング
9月28日(土)	終日	ホームステイ
9月29日(日)	13:30-15:30	トヨタ産業技術記念館見学
	16:00-17:40	大須商店街、グループ散策
9月30日(月)	9:20-12:20	名古屋城見学 名古屋駅から東京駅へ移動(のぞみ92号)

◆感想文：世界から地域へ!地方プログラム(愛知県)

受入実行委員 吉見 依里

令和6年9月26日から9月30日の5日間にわたり、国際社会青年育成事業の地方プログラム(愛知県)の受入れを実施した。本プログラムには、モロッコから8名、スペインから8名の参加青年、ローカルユース15名、そして愛知県IYEOのメンバーを中心とした実行委員13名が参加した。実施したプログラム内容としては、大きく分けて3つあり、豊橋市における「再生可能エネルギー」をテーマとした視察・ディスカッション、ホームステイ、名古屋市での地域理解を促進する施設見学と文化交流である。

①本事業で特に印象に残った具体的な体験

今回、特に印象に残ったことは、豊橋市での視察とホームステイでの交流である。

豊橋市での視察では、再生可能エネルギーへの取組を産官学それぞれの視点から学べるよう準備を進めた。豊橋技科大学での豊橋バイオマスソリューションズの方による講演や、武蔵精密工業でのマイクログリッド(送配電ネットワーク上の「分散型電源」を有効活用できるエネルギーシステム)に関する視察、さらに豊橋バイオマス利活用センターでの施設見学では、地域社会においてどのように技術を活用していくか、その先進事例を伺うことができた。また、豊橋市役所では、行政による環境施策への熱意と課題について市職員の方から講話を聞き、市の取組についても知る機会となった。その後のディスカッションでは、ローカルユースも含め、2日間の振り返りを行い、互いに学びをシェアした。

一方、ホームステイプログラムでは計 10 家庭に参加青年を受け入れていただいた。私もホストファミリーの一員として青年の受け入れを行ったが、着付け体験や買い物といった日本文化体験や日常生活体験を通して、日本の家庭や価値観を直に感じてもらうことができた。各家庭での交流内容は多様であったが、別れの場面では、どのファミリーも名残惜しむ姿が見られ、文化や言語の違いを超えて築かれた絆を目の当たりにした。参加青年にとっても、ホストファミリーの方々にとっても、非常に充実した経験となったようである。

② 本事業を通して学んだことと成果

本プログラムを通して、参加青年が積極的に質問をしている姿が印象的であった。一方で、ローカルユースについては、専門的な内容の理解を助けるため、事前にオンライン勉強会を開催した。その結果、専門的な内容についても意見交換ができるようになり、より有意義な時間を過ごすことができたと考える。各国の現在の取り組みや文化的背景に触れながら学びをシェアすることで、国際的な視野が大きく広がる機会となった。

さらに、善意のネットワークグループのボランティアの方々協力により、名古屋市での交流もスムーズに進行することができた。トヨタ産業技術記念館や名

古屋城を訪れた際には、歴史や技術への理解が深まった。多国籍の参加者が一緒に施設を回りながら交流することで、海外青年、ローカルユースそれぞれに愛知県の魅力を再発見してもらい、異文化への理解を深めてもらえたことも成果の一つである。

③ 今後、所属する組織や地域での活動、事後活動での活用

今回、実行委員は多くの準備と調整を重ねながら、当日を迎えた。視察先の専門的な内容を効果的に伝えるために、専門知識を持つ方に通訳を依頼したり、訪問先の方々も交えて細かな打ち合わせを何度も実施したりしたことがプログラムの成功につながったと感じている。また、今回参加したローカルユースの中には、プログラム参加をきっかけに内閣府事業に興味を持った者もあり、今後、彼らが国際的な舞台で活躍できるよう、支援を続けていきたいと考える。

最後に、本プログラムは、愛知県庁や豊橋市内の協力機関、各視察先、ボランティアの皆様の支えがあったからこそ無事に遂行することができた。これらのつながりを基に、今後も地域社会全体で国際交流を推進する体制を構築していきたいと考える。次世代のリーダー育成につながる活動を継続するため、これからも事後活動に取り組んでいく。



参加青年の到着を歓迎する実行委員



ディスカッション



名古屋城視察

◆感想文：

モロッコ招へい青年団 シャイマ・カンタウィ

9月26日から30日までの5日間にわたる愛知県への訪問は充実したもので、素晴らしい企画に満ちた体験だった。全ての瞬間が熟慮の上で計画されており、私たち全員にとって忘れられないものとなった。

日程の第1日目は、最先端の工学研究で名高い一流機関である豊橋技術科学大学への興味深く学びの多い訪問から始まった。

その後、自動車部品生産で世界をリードする武蔵精密工業株式会社を見学した。ここでは、高度な製造技法の背後にある精緻なプロセスを目にする、希少な機会が得られた。精密工学から自動化された組み立てラインに至るまで、訪問によって、日本の綿密な職人技と革新的な技術が合わさって世界級の製品が作り出される様子を直接目にする事ができた。完璧さ、効率性、持続可能な開発に対する日本の飽くなき取り組みを目の当たりにした体験であり、日本の産業のあらゆる面に浸透した創意工夫の精神に感銘を受けた。

翌日は、豊橋市におけるエネルギー・トランジション（再生可能エネルギーへの移行）の取り組みの中核となる先駆的プロジェクト、同市バイオマス利活用センターを探索した。豊橋市役所での昼食を楽しんだ後、市職員の方々とは有意義な対話が行われた。議論の中心は豊橋市における環境への取り組みであり、同市が持続可能な都市開発を通じた生活の質の向上を重視していることが強調された。1日の締めくくりとして、名古屋にて愛知県知事主催の温かく丁寧なレセプションに出席した。知事による心からの歓迎の挨拶で始まり、最後には魅惑的な文化パフォーマンスを行って、モロッコの豊かな芸術遺産を活気ある雰囲気の中でご覧いただき、両国の心からのつながりを形成した。

ホストファミリーの家庭に滞在し、没入型の体験をした9月28日は、真に特別な日となった。日本文化を深く探究できる機会になり、日程の中で最も思い出深い部分の1つとなった。ホストファミリーが温かく親切であったためくつろいだ気持ちになることができ、郷土料理を試したり、日本の日常生活について学んだ

りと、数え切れないほどの楽しい時を共有した。

おいしい家庭料理と一緒にいただいたり、伝統に配慮し心を込めて調理された郷土料理を試したりする機会もあった。ホストファミリーは非常に親切で忍耐強く、お茶を入れる微妙なコツから伝統的な日本の家でのエチケットまで、様々な習慣について教えてくださった。

9月29日、感情の高ぶる中でホストファミリーに別れを告げ、名古屋のトヨタ産業技術記念館に向かった。同記念館は、繊維業界の小企業から世界的な巨大自動車企業となったトヨタの発展を明快に物語るものだった。その後、活気に満ちた大須商店街を散策し、生き生きとした雰囲気に浸りつつ、地元の商習慣や文化について素晴らしい洞察を得た。

最終日である9月30日には、徳川家康によって1612年に建てられた代表的史跡、名古屋城のガイドツアーに参加する機会に恵まれた。名古屋城は第二次世界大戦中に破壊されたものの、1959年に再建され、現在は日本の封建時代の歴史に特化した博物館となっている。建物の中を歩いていると、豊かな歴史を感じる展示物に囲まれ、時を遡っているようだった。愛知探訪の最後にふさわしい訪問であり、日本が歴史と現代的なものを融合させていることに、驚嘆の気持ちで一杯になった。

愛知県を巡った5日間の日程は、単なるプログラムを超え、地域の産業と文化の本質を見て、感じて、理解できる深い文化交流だった。地方の機関や職員の方々との交流は非常に充実しており、理解と連携の橋を築くものだった。

主催者側による万全な計画、プロ意識、心からの厚意に深く感謝申しげたい。全ての瞬間が意義深いものとなり、知識と思い出だけでなく長く続く友情を持ち帰ることになった。

忘れられない体験をさせてくださった皆様、本当にありがとうございました！

◆感想文：

スペイン招へい青年団 パブロ・デ・ラ・オス・カンパンデギ

2024年9月26日から30日にかけて、令和6年度国際社会青年育成事業の一環としてスペイン代表団は日本の愛知県で開催された地域プログラムに参加させてもらったことを光栄に思います。この没入型の体験を通じて、私たちは日本の文化、技術、持続可能性の実践について深く理解するとともに、国際的な仲間とのつながりを育むことができました。

私たちの旅は9月26日、豊橋駅に到着したことから始まりました。ホストの方々に温かく迎えられた私たちは、豊橋技術科学大学で株式会社 豊橋バイオマスソリューションズで研修を受け、最初の学びを得ました。その後、武蔵精密工業株式会社を訪問し、最先端のマイクログリッド技術について学びました。

翌日の9月27日には、豊橋市バイオマス利活用センターを訪問し、バイオマス生産の過程とエネルギー生成への応用を実際に見学しました。地元で昼食を取った後、豊橋市役所で豊橋市の持続可能性への取り組みについて議論を行いました。その夜、歓迎会に参加し、光栄にも愛知県の犬村知事にお会いすることができました。その会は、スペイン代表団とモロッコ代表団の仲間たちが伝統的なパフォーマンスを披露するなど、真の文化交流の場となり、ホームステイのマッチングへと続けました。同僚であるシャビと私は、三重県、特に活気に満ちた四日市市へと連れて行ってくさるホストファミリーとマッチングしました。



三重県での探索では、鈴鹿市の椿大神社を訪れ、地域の慣習や伝統について深く学びました。その後、四日市市の酒翠庵で初めての茶道を体験し、永遠に忘れられない静寂のひとつを味わうことができました。伝統的な着物を身にまとい、四日市市立博物館を訪問し、市や地域の豊かな歴史について知ることができました。また、四日市公害と環境未来館を見学し、この地域が直面した環境問題と再生可能エネルギーの重要性について深く考えさせられました。どちらも本事業の重要なテーマでした。夜になるとホストファミリーの方々がたこ焼きやお好み焼きの手作り料理を私たちに教えてくださり、本場の日本家庭料理を味わうことができました。



9月29日には、トヨタ産業技術記念館を訪問しました。ここでは、トヨタの起源についての興味深い物語を学び、名古屋が日本の産業発展において果たした重要な役割を知ることができました。その後、活気あふれる大須商店街を含む名古屋市内のインタラクティブなツアーに参加しました。その夜は、友人たちと共に夕食を楽しんだ後、日本ならではの体験であるカラオケバーでの刺激的な夜を過ごし、素晴らしい思い出ができました。



最終日となる9月30日は、心のこもった別れに満ちたほろ苦い一日でした。出発前に、シニアボランティアガイドの案内で名古屋城を訪問し、その戦略的な歴史や象徴的なシャチホコの意味についての見識を得る機会がありました。それは、愛知での時間を締めくくりに相応しい体験であり、日本の豊かな文化遺産と人々の温かさが融合していました。この思い出深い訪問の後、私たちは東京に戻り、忘れられない章の幕を閉じました。



愛知での時間は単なる学びの場ではなく、私たちの文化の架け橋を築き、持続可能性の価値を受け入れ、国境を越えた友情を育む機会でもありました。日本の革新、伝統、コミュニティへの取り組みに対する深い感謝を胸に、日本を後にします。この思いを、今後のすべての活動において大切にしていきたいと思います。

3. 沖縄県（テーマⅡ：水と防災）

◆日程

日付	時間	プログラム
9月26日（木）	12:00-14:35	ジャマイカ招へい青年団 羽田空港から那覇空港へ移動（JAL915 便）
	16:55-19:30	ドミニカ共和国招へい青年団 羽田空港から那覇空港へ移動（ANA1097 便）
9月27日（金）	10:00-10:30	池田竹州沖縄県副知事表敬訪問
	10:30-12:00	沖縄県防災関連機関による講義
	14:00-16:30	琉球大学、講義とディスカッション
	18:45-21:00	レセプション、ホームステイマッチング
9月28日（土）	終日	ホームステイ
9月29日（日）	10:00-11:30	なは市民協働プラザ、トークセッション
	12:00-14:30	講義、防災食の試食
	15:00-17:00	ディスカッション
9月30日（月）	9:30-11:15	首里城見学
	13:15-15:50	那覇空港から羽田空港へ移動（JAL910 便）

◆感想文：「良い変化」のきっかけとなった受入活動

受入実行委員長 宮里 幸子

はじめに

令和6年9月26日～30日の5日間、沖縄県 IYEO にて「令和6年度国際社会青年育成事業」の受入れを行い、ドミニカ共和国とジャマイカから青年16名を迎えた。

コロナ禍を経て、数年ぶりの沖縄県での受入れであった。この間、事業の一時中断も影響し、沖縄県 IYEO への新規入会がなく、また既存会員も仕事や家庭の事情で活動ができない者も出てくるなど、活動可能な会員数が限られる中での受入れに当初は不安もあったが、実行委員が力を合わせ、なんとか受入活動をこなすことができた。実行委員の一人一人と、その活動を支えてくれたそれぞれの家族に改めて感謝したい。

1. 特に印象に残った場面

印象に残った場面が二つある。どちらも「別れの場面」だ。

一つはホームステイが終了する日の朝、集合時間に間に合わせ、ホストファミリーが次々と青年を会場へ

連れて来てくれたのだが、皆、なかなかその場を去ろうとしない。話に花を咲かせ、写真を撮り合い、ハグし合い、涙し・・・と別れを惜しむ姿にこちらも頭が熱くなり、良い交流ができたのだと感じ入った。

もう一つは最終日の那覇空港での見送りで、地元ユースが皮剥けたようなとても良い表情を見せたのが印象に残った。体験は人を成長させる。今回の事業がそのきっかけとなったようで嬉しく思う。

今回は13人の地元ユースの参加があった。中には、親に勧められてなんとなく参加をしたという人もいたが、後日アンケート回答を見ると5日間でのユースたちの心の変化が伝わってくる。海外青年との交流の楽しさを味わい、他のユースから刺激を得て、テーマについて他国の事情に驚き、語学力の壁につまずき、お互いの歴史について発見し、相手国への先入観が崩れるなど、頭も心も大いに動いたようだ。日本青年として事業に参加してみたいと意欲が出た人もおり、今後の応募につながることを期待する。

2. プログラムを通じた学びと成果

毎回受入れをする度に強く感じることもある。今回も感じたそれは、「世の中において、目に見えていることはほんの一部に過ぎず、その背後の见えない部分に多くの人の努力と時間が積み重ねられている」ということだ。

実行委員として、プログラムの企画、準備、運営を行うと、「舞台の裏側」を経験する。一つの「場面」を成り立たせるには、多くの人の協力が必要なことを実感する。自分が青年として事業参加していた時にはまるで気づかなかったが、あの時も実は、各国の受入実行委員会が苦勞してプログラムを作ってくれていたのだと今更ながらに感じられ、感謝の気持ちがひしひしと湧いてくる。長年事後活動が続けてきたある実行委員は「自分が参加青年の時に楽しい経験をさせてもらったので、恩返しのためでやっている」と話している。

そういう沢山の人の努力と想いが「舞台上の」海外青年、地元ユース、ホストファミリーの学びと成長（人材育成）につながっており、各自の中で起こったであろう「良い変化」が、地元実行委員会が修めた「成果」と言えるのではないだろうか。

3. 学びと成果を今後どのように活かしたいか

受入準備は各方面との様々な調整の積み重ねで、その過程で、それぞれの人の立場、視点、意図を理解しようとし、折り合いをつける方法を学んでいく。それは私を含め各実行委員が、今後何をやるにもきっとプラスになると確信する。地域での国際交流にも役立つと思っている。

「良い変化」のきっかけをくれる各種交流事業について、より多くの沖縄の若者に実体験を持って伝えていき、地域の人材育成に少しでも繋げていきたい。

◆感想文： ドミニカ共和国招へい青年団 ガブリエル・エンリケ・ノボア・コンセプション

強く影響を受けた経験

私にとって忘れがたい経験の一つは、日本文化に根付くレジリエンス（困難な状況への適応力）に触れたことであり、特に沖縄での災害対策システムを目の当たりにしたことだった。日本の防災訓練は、非常に緻密かつ包括的であり、地元住民だけでなく、観光客や特別な配慮が必要な人々をも想定したものである点が際立っている。こうした先見性と包括性によって、誰もが背景や能力にかかわらず緊急時に必要な行動をとれる仕組みが実現されている。何世代にもわたる自然災害との闘いを通じて培われたレジリエンスと地域の精神を示すものであり、模範とすべきものだと感じた。

得られた学びと成果

沖縄での滞在中、最も啓発された瞬間の一つは、ホセ・カストロ教授の講義に参加したことであった。教授の見解は、地震とその危険性に対する私の理解を根本的に変えるものであった。カストロ教授は、「地震が人を殺すのではなく、建物が人を殺すのだ。したがって、建物の設計には十分注意すべきである」という重要なポイントを強調し、この言葉は私の考え方を一変させた。この発言は、建築物の耐震性が地震時に人命を守る上でいかに重要であるかを強調している。自然災害は避けられないものの、その影響の大きさは、慎重で

堅固な建物の設計によって大幅に軽減できるということを改めて認識した。

この講義は単に情報を提供するだけでなく、私にとって転機となるものであった。自国のインフラや、設計の不十分な建物がもたらす潜在的なリスクについて批判的に考えるきっかけとなったのである。カストロ教授の講義から得た知識は非常に貴重であり、災害多発地域における建築物の安全性がいかに重要かという点について、より深い理解を得ることができた。

また、このプログラムの大きな成果の一つは、より良い未来の構築を志す専門家や学者、才能ある青年たちとのネットワークを築けたことである。この多様で活気に満ちたネットワークは、将来、持続可能な進歩を推進し、世界に大きく前向きな影響をもたらすためのイノベーションやコラボレーションを実現する上で貴重な財産となると確信している。

地域社会への応用

沖縄での経験とカストロ教授の講義から得た洞察は、地元のコミュニティの防災意識の向上とより良い災害対策を推進するための積極的な行動を取るよう私を後押しした。ドミニカ共和国も日本同様、地震の影響を受けやすいが、災害対策のレベルや建物の設計にはまだ改善の余地があると感じている。

学んだことを基に、耐震建築の重要性について地域

社会で対話を始めることが重要だと考えている。これは、ワークショップを開催したり、地方自治体と協力したり、建築家やエンジニアと連携して、厳格な建築基準の必要性を訴えたりなど、さまざまな手段を通じて達成できるだろう。また、沖縄のように観光客や特別な配慮が必要な人々も含めた実践的な防災訓練の導入を推進していきたい。

総じて、日本文化、特に沖縄におけるレジリエンス

と備えの姿勢から、私は大きな影響を受けた。また、ホセ・カストロ教授の講義は、地震の影響を軽減する上で建築物の強度が重要であることについて、さらに深い理解を与えてくれた。最後に、このプログラムで築いたネットワークは、私がこれから災害に備えることの重要性を定着させるよう新しい解決策を模索し、地域社会における防災意識の啓発と防災策の改善を提唱する上で、助けになってくれるだろう。

◆感想文：

日本最南端の沖縄訪問はジャマイカ団員にとって非常に思い出深いものとなった。様々な活動、見識が深まる講義、ホームステイでの暖かいおもてなしに至るまで、旅のあらゆる面を楽しむことができた。貴重な知識を得るとともに、沖縄の歴史、文化、食、災害に強い体質を深く知ることができた。

代表団は沖縄県の副知事である池田竹州氏を表敬訪問し、そこで沖縄の歴史と文化を学んだ。沖縄の文化は「かりゆし」として知られる独特の正装を特徴とし、伝統的な要素と現代的な要素を融合させながら、特別な機会だけでなく日常でも着用されることが多い。また「シーサー」という琉球文化の守り神とされる獣像についても学んだが、これは家や地域を災いから遠ざけると言われている。沖縄の豊かな文化的遺産やそこに深く根付いた慣習が、これら象徴的な風習によく現れている。

沖縄の文化は、土着の文化と他国からの影響との融合である。この島は、伝統音楽や「エイサー」のような舞踊に代表される快活な芸事と、陶器や織物のような工芸品で有名である。沖縄の言語や先祖崇拜を含む文化は日本本土とはまた違った豊かな遺産を反映していると言える。

ホームステイ

私が経験したホームステイは充実したものであり、日本の家庭の日常について多く学ぶことができた。ホストファミリーの方々には温かく歓迎して頂き、またジャマイカの文化についても心からの理解を示し、あらゆる点を受け入れて頂いた。私たちは一緒にボブマリーの曲を聞いたり、タコライスやみそ汁、梅干しなどの和食や沖縄料理に舌鼓を打ちながら、ジャマイカ

ジャマイカ招へい青年団 シャベル・ワトソン

の有名なブルーマウンテンコーヒーについて会話に花を咲かせたりした。私は民謡でよく使われる沖縄の伝統的な楽器「三線」にもトライした。沖縄博物館を訪れたときには、歴史について多く学び、また美味しい沖縄そばと一緒に食べることもできた。その後、沖縄ワールドでは伝統的な音楽や舞踊を堪能し、国内最大級の鍾乳洞である玉泉洞のツアーにも参加した。

首里城

ユネスコの世界遺産に登録されている首里城を訪れたときは、琉球王国の豊かな歴史を垣間見ることができた。我々の訪問時は2019年に発生した火災によって焼失した正殿をはじめとする他の施設部分の修復のさなかであったが、その一方、閑静な首里城公園（御庭）からは、自然と歴史が完璧に調和している那覇市のパノラマの景色が広がっていた。

講義

様々な団体によって行われた講義は、水と防災に関する日本の対処法を深く掘り下げており、興味深く且つためになる内容であった。我々は、台風や地震、干ばつなど沖縄に被害をもたらす様々な災害について話し合った。我々が参加した講義では、沖縄の水資源から防災、危機管理にいたるまで様々な議題が扱われた。我々は、水の保全、持続可能な利用、台風や洪水などの自然災害時の緊急対応に焦点を当てながら、沖縄の水資源を管理するために取られた措置について学ぶことができた。沖縄県企業局（OPEB）が30年連続で水の配給制限を回避したような、高度な水管理システムと防災戦略を実施できる専門知識は称賛に値する。水供給の管理、インフラ耐性の確保、異常気象による被害の緩和対策など、沖縄県の統合的な取り組みから学ぶことによって、ハリケーンや干ばつの影響を受けやす

いジャマイカも水資源の持続可能性や災害対策を改善することができるだろう。地元の若者とのディスカッションを通して様々な知見を得たことは、自国の防災対策において自分の役割を果たす励みとなった。

私は自分のコミュニティにおいて、他の派遣団員とともに得た知識や経験を共有し、水の保全技術を促進していくことを目標としている。小さな緊急用のサプライキットを作り配布することによって、地元の若者が水の保全や災害対策に関われるように促していきたいと思う。

沖縄での地方プログラムは私にとって特別な経験となり、これからも私の専門や学びを必ず高めてくれるものになると確信している。我々代表団員に与えてくださった貴重な機会に心から感謝申し上げたい。

第5章

事業の評価

招へい団長報告

アンケート

総括評価

外国参加青年 団長報告

モロッコ招へい青年団 ウィアム・シャキブ

モロッコ王国と日本との学術的・科学的協力を強化する一環として、光栄にも、名誉ある国際社会青年育成事業（INDEX）において、モロッコの4大学から集まった6名の博士課程学生からなる代表団の団長を務めた。本事業は、異なる国の青年間の学術的・文化的交流を促すよう設計されており、再生可能エネルギーといった重要な課題について連携し、学習し、交流を行う、唯一無二の場を提供するものであった。

東京到着時には、駐日モロッコ王国大使より温かい歓迎を受けた。その後新幹線で愛知県へ向かい、まず豊橋および名古屋において、一連の施設訪問や体験を通じ、日本のイノベーションの詳細や愛知県の大きな魅力について学んだ。

例えば豊橋技術科学大学への訪問では、技術的訓練および産業界との密接な連携を重視した素晴らしいモデルである、高専の教育制度について案内を受けた。この革新的なアプローチは、日本が効率的かつ厳格な方法で明日の技術者や技能者を育てていることを示すものであった。また、再生可能エネルギーを活用するマイクログリッドを見せてくださった武蔵精密工業株式会社や、バイオマスと責任ある資源管理を通じて市がサステナビリティに尽力している証である豊橋市バイオマス利活用センターなど、最先端の産業拠点を探訪する機会もあった。

滞在中のハイライトの一つが愛知県知事主催レセプションであり、両国の協力関係を深化させる機会が温かく強調された。日本人家庭でのホームステイを通じて文化に浸かり、真正な文化交流ができたことで、愛知での体験がより充実したものとなった。日本人家庭で過ごした特別な日は、特に大切な思い出となっている。家庭の日常生活に浸かり、料理を味わい、伝統を理解し、そして最も重要なことに、深い真の絆を形成した。

愛知県で学びの多い5日間を過ごした後、東京へ戻って事業の第2部が始まり、再生可能エネルギーを中心としたディスカッションと交流に焦点が移った。日本の経済産業省（METI）や、積水化学工業、イベルドロラといった革新的な企業を訪問し、日本が持続可能なエネルギーへ転換するための戦略について理解を深めた。

東京でのプログラムは、日本、モロッコ、スペイン、ジャマイカ、ドミニカ共和国の青年を集め、より良い未来へ

の関心と情熱という共通項を持って議論・討議を行い、アイデアを共有する場を提供するものであった。各参加青年が固有の視点、夢、課題を持ち寄り、持続可能な開発への障壁を乗り越える方法について、共にブレインストーミングを行った。日本青年、そしてスペイン、ドミニカ共和国、ジャマイカの仲間と交流することで、考えが充実し、新たなアイデアが生まれた。

最も思い出深い瞬間の一つが、日本の天皇后両陛下との御接見であった。計り知れない誇りと感情がこみ上げた瞬間であり、モロッコを代表して平和と持続可能な開発への尽力を共有する、唯一無二の機会だった。INDEX 事業によって実現した、一生に一度の体験であった。

東京で行われた3日間のグループディスカッションの中で、各代表団は、再生可能エネルギーと水と防災に関する課題に対処するための提案を作成し、最後のセッションでは結論のプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションは充実した体験であり、各国の優先事項や現実に関する理解を深めるものだった。

日本での旅は、日本の文化、歴史、伝統の核心に飛び込むものであり、畏敬の念を持ってそれらを探究した。荘厳な名古屋城から浅草の活気ある通りまで、訪れた全ての場所に物語があり、深い歴史と精神を感じた。

INDEX は単なる学術的な交流の場にとどまらず、異文化理解への入口であり、日本、スペイン、ドミニカ共和国、ジャマイカといった多様なバックグラウンドを越えて友情と協力関係を築く機会であった。本事業は、対話とイノベーションを通じた持続可能な未来への尽力を体現するものである。こうした国際的取り組みに貢献することで、平和と持続可能な開発という共通のビジョンによって結束した若者たちと強固なつながりを作る機会に恵まれた。

本事業は、学術的な派遣を超越しており、人間として冒険し、文化に浸かり、世界中の若者の多様性と団結を祝福するものであった。かけがえない思い出、新たな友情、両国のさらなる協力強化のためのアイデアを携えての帰国となる。光栄にもモロッコからの代表団を率いて「日出ずる国」日本を訪問できたことに、深く感謝している。

スペイン招へい青年団 チャビエル・トリアナ・ゴメス

令和6年度国際社会青年育成事業におけるスペイン代表団のナショナルリーダーとして、特に再生可能エネルギー分野で気候変動との闘いに貢献することに情熱を注ぐ、素晴らしい7名の若者たちの支援をさせていただいたことを光栄に思う。この事業を通じての主な目標は、スペイン代表団を支援し、個人的にも職業的にも成長できる環境を作り出すことであった。初めから、私たちの成功の鍵は、誰もがアイデアを共有し、学ぶことができる安全且つ包摂的な場をつくることにあったと理解していた。

これを達成するために、私は二つの主要な戦略を定めた。一つ目は、オンラインミーティングを通じて参加者同士がつながり、日々の評価や個別サポートを受けられる「安全な場」を作ること、二つ目は能力開発セッションを通じて知識を提供することである。再生可能エネルギーを専門とするスペインの気候行動 NGO「Ecologistas en Acción」と提携し、スペイン代表団向けに2回のオンライン研修を実施した。これらのセッションに加え、複数のオンライン会議と国の公式見解まとめの作成が、プログラムにおける議論の土台を築くのに役立った。

この代表団を率いたことは、生涯大切にしたい人生を変えるような体験となった。最も印象深い瞬間は、単にチームの旅路を支えるだけでなく、プログラム全体を通じて参加青年がいかに深く関与し、互いに結びつき、力を得たかを目の当たりにすることであった。彼らの情熱とこの活動への献身は、若者の参画と国際協力の力を信じる私の思いをさらに強めた。事業終了時には、私は深く感動し、このような取り組みを支援することに人生を捧げたいと強く思うようになった。

私自身の成長を振り返ると、特に二つの大きな学びが際立っている。一つ目は、国際協力事業を運営する上で必要なプロトコルや構造的な支援についての理解が深まったことである。この経験により、組織運営能力とリーダーシップスキルが向上し、これらを今後のプロジェクトにも活かしていく。二つ目、そしておそらくより充実感を得られた成果は、代表団から受け取ったフィードバックである。日々の評価会を実施し、継続的な支援を提供した結果、参加者からの肯定的な反応が、私たちのアプローチがいかに効果的だったかを示してくれた。彼

らのフィードバックと、事業中の四つのワーキンググループで見せた素晴らしいパフォーマンスは、彼らがいかに有能で意欲的であるかを再確認させてくれた。この達成感は、リーダーとして最も誇らしい瞬間の一つとなった。

事業終了後も、スペイン代表団は非常に高い意欲と積極性を維持している。私たちは、今後のスペイン参加青年を支援し、この旅で得た知識や経験を共有することに全力を尽くす。また、様々な気候変動対策の活動に引き続き取り組み、特に国際的なアドボカシーの意思決定プロセスにおける影響力を強化し、再生可能エネルギーへの認識を高め、他者の行動促進を目指している。



ドミニカ共和国招へい青年団 マリア・アントニア・ディセン・ロメロ

ドミニカ共和国団の団長として参加できたことは大変光栄であった。名高い国際社会青年育成事業（INDEX 2024）に選ばれた我々参加青年を代表し、この貴重な機会に深く感謝申し上げる。1994 年以来、日本とドミニカ共和国の間で友情と相互学習の架け橋を担ってきたこの取り組みに参加できたことは、私たちにとって大きな幸運だった。

今年、カリブ地域からの参加者として我々が取り組んだのは、「水と防災」という極めて重要なグローバル課題である。気候変動が世界を変容させる中、この課題の緊急性はかつてなく明確になっている。この交流を通じて、我々は水管理と防災の分野で知見を共有し、革新的な解決策を模索する機会を得た。

沖縄での地方プログラムは、学びの多い経験であった。日本の防災アプローチは、長年の自然災害への対応を通じて磨かれた日本人のレジリエンスと共同体意識の証であり、まさに模範となるものである。

このような予見性と包括性のレベルにより、背景や能力にかかわらず、すべての人が緊急時に備え、適切な行動を取ることができる体制が整えられている。

我々の訪問は沖縄で始まり、ジャマイカ団とともに沖縄県の副知事との意見交換の場を持つことができたことは大変光栄であった。

我々のために企画された講義に参加し、沖縄の防災インフラの成熟ぶりを知り、そして何よりも現地の人々と文化交流できたことは、我々にとって最も魅力的な経験の一つであったと感じる。

東京での訪問は気象庁から始まった。ここで、日本がどのように気象関連の情報を収集・分析し、国民に伝えているかを学んだ。これらのツールは、天候パターンの監視や災害の予測、そして国民の安全確保のための迅速な警報発信において非常に重要である。

また、このプログラムの大きな成果の一つは、プロフェッショナルなネットワークの構築である。スペイン、モロッコ、ジャマイカ、日本など、異なる状況や大陸からの青年たちと出会う機会を得ることができた。このプログラムを通じて得た知識は、私の仕事の向上に寄与するだけでなく、ドミニカ共和国における水管理と防災の取り組み、特に緊急時に脆弱な人々のニーズに応えるための力となると確信している。

ドミニカ共和国政府職員として、この経験を通じて、若者の参加と共創の場を促進すること、さらには、自然災害と水リスクに直面する我が国を強化するための変革行動と支援に、より深く携わる決意も固まった。

ジャマイカ招へい青年団 アンドレア・ローズマリー・スペンサー

オンラインプレ会議（水と防災） 2024 年 9 月 6 日

このオンラインプレ会議は、プログラム中に行われるディスカッションの基盤となったことに加え、ディスカッションの対象分野及びトピック、また各グループのメンバーとも慣れ親しむ機会を与えてくれたという二つの点において、参加者にとって大変有意義なものであった。

地方プログラム： 沖縄 2024 年 9 月 26 日～30 日

地方プログラムは、本事業の中で最も特に影響を受

けた活動であった。そこで得られた学びや知識、またホームステイ体験は計り知れないものとなった。講義やディスカッションを通して、ジャマイカ、沖縄、ドミニカ共和国の間には気候変動に関する影響という点に関して、相違点よりも多くの共通項があるということを知った。

ジャマイカの地理的位置を考慮すると、我が国は水に関連する災害、特にハリケーン（台風）に関して脆弱であるが、気候変動に対する備えが重要であることは疑いもなく明らかであると感じた。何故なら、災害に対する備えこそが、その国がどのくらいの被害を受け、また実際に事態が発生した後に講じられる対応

策に違いを生むからである。沖縄、ひいては日本が防災に重きを置いていることは見習うべき点であり、このことは地方（県）レベルでも国レベルでも、実施されているプログラムや取り組みに顕著に現れている。沖縄県民が防災キャンプや年1回の避難訓練に参加していることは特筆すべきことである。

ジャマイカには「木は若いうちに曲げたほうが良い。古い木は折れてしまうからだ」ということわざがある。これは「子供は小さいうちに正しくしつけられないといけない。なぜなら大人になってからでは手遅れになるかもしれないからだ」という意味だ。本事業のような取り組みにおいて日本が防災教育に重きを置いていることは、若者達の心にしっかりと刻まれていた。我々参加者は防災の重要性を学び、気候変動の影響に対する自国のレジリエンスを強化するために、実施可能なプログラムや取り組みを提案することができた。

このような防災の重要性は、対話型の講義や参加者同士の関連なディスカッションを通して確固たるものとなった。さらに特筆されるべきは、災害への備えは地域及び国家レベルにおいて、居住者、大学、政府機関などの利害関係者が協調的に関与することで機能する傾向があるということであった。備えは、災害前、災害発生時、災害後のすべての段階において重要だ。また水害のみならず地震に関しても同様に備えが重要であることは留意すべき点である。

琉球大学での講義でも言及されていたように、人々が死ぬのは「地震ではなく建物によって」である。防災における研究の役割は強調されすぎることはないであろう。重要なことは、建物が人命や構造物への損失を防げる資材や技術仕様を用いて建てられているかということだ。ジャマイカには居住用及び商業用建築物の両方に関して順守されるべき厳しい建築基準法がある。現在我が国は津波の影響を受けてはいないが、常に変化する気候変動の性質を鑑みると、津波に着目し

た社会啓発活動は時宜にかなっている。

最後に、沖縄の家族と一緒に過ごす機会を持てたことには参加者一同心から感謝している。ホストファミリーが我々を温かく歓迎してくれたことは真に光栄なことであり、彼らとの絆は我々の中に永遠に残るであろう。

国際青年交流会議：

東京 2024年10月1日～3日

東京プログラムで開催されたディスカッションは、国際青年交流会議(IYC)において最高潮に達した。グループ同士の対話、知識や最善策についてのやり取りは参加者一人一人にとって大変有益であった。自然水害は避けることのできないものだが、それらに対する適切な備えと計画こそが重要なのだと分かった。

気象庁(JMA)への訪問では、災害への備え、つまり災害前、発生時、災害後における予測、主要関係者との連携、適切なタイミングでの情報提供などが更に重要視された。気象庁の各部署におけるスムーズなオペレーションは特に注目すべき点であった。実際、国の気候変動へのレジリエンスを強化するものは、準備と講じられるその後の対応策なのであろう。

国際青年交流会議(IYC)には天皇皇后両陛下に拝謁する機会も設けていただいた。さらに、5か国の参加者全員が、小テーマである水と防災、再生可能エネルギー両方についての有益な発表から多くを学ぶことができた。

文化交流レセプションでは参加国の伝統に触れる機会を得ることができ、それは出席者全員に好評であった。

ジャマイカ国は令和6年度国際社会青年育成事業の閉幕とともに、気候変動の影響に対する自国のレジリエンス強化を目指すこと、得られた知識を伝えていくために最善を尽くすことを誓って帰国の途に就いた。

参加青年アンケート評価

1. 調査方法

アンケートは、選択式及び記述式で、Google Formsを使用し、オンラインで実施した。

2. 回収率

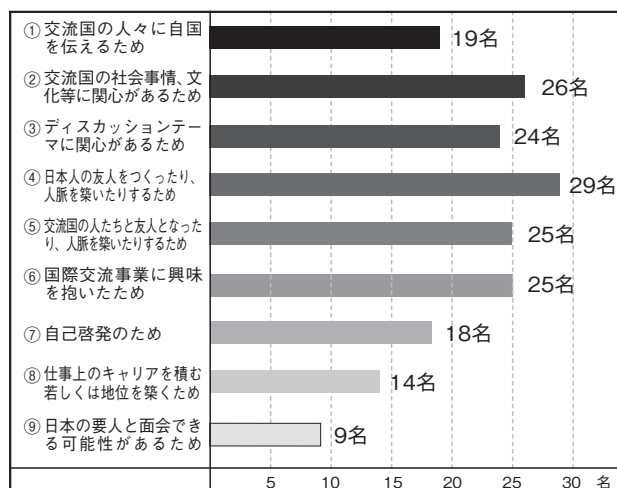
外国参加青年32名回答(100%)

3. 評価結果

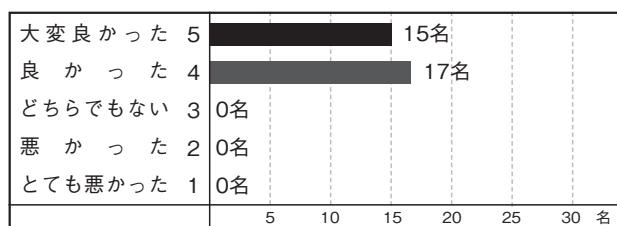
本事業に参加した外国参加青年に対し、5段階評価、複数選択肢による質問及び自由記述により、本事業へのアンケート評価を実施した。結果は下記のとおりである。

4. 全体評価

(1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。
(複数回答可)



(2) 事業全体をどのように総合評価しますか。



- ・INDEX2024は大変豊かな事業である。「水と防災」に関して、沖縄の成功例を学ぶことやホームステイに参加することを楽しんだ。(水と防災)
- ・INDEX事業はよく考え抜かれており、満足のゆくように実行された。(水と防災)
- ・文化を学び、人々に出会うという素晴らしい経験を得た。もう少しホームステイ家族と共に過ごす時間があ

ればと願う。(水と防災)

- ・この事業は喜びを感じられる素晴らしい機会であり、日本文化や施設訪問での学びを楽しむことができた。(再生可能エネルギー)
- ・INDEX事業は活動内容について大変良いものであると考える。実際に、自分自身のことや他国の文化を多く学び、テーマへの深い理解を得ることができた。いまや、自分のチームや日本で出会った人々と、気候変動に関わり続けたいと願っている。(再生可能エネルギー)

(3) この事業への参加を通して、目標を達成できましたか。

大きな成果を得ることができた	5	12名
達成できた	4	19名
どちらでもない	3	0名
あまり達成できなかった	2	0名
まったく成果を得られなかった	1	0名
		5 10 15 20 25 30 名

(事業への参加を通じた目標について)

- ・水に起因する自然災害について、各交流国の計画・対応・復興方法に関する情報を集めるとともに、日本文化に関する知識と理解を深めるため。(水と防災)
- ・科学技術を活用して、災害への備えと避難を効率的に実施するための方法についての情報を学び共有すると同時に、交流国の参加者とネットワークを築くため。(水と防災)
- ・我々が直面している世界共通の課題について、様々な国の青年と議論するとともに、日本の豊かな文化を発見し真に価値のある経験をするため。(再生可能エネルギー)
- ・日本と日本の文化について学び、環境や気候、そして特に私が関心を寄せているエネルギーについて議論するため。(再生可能エネルギー)

- (4) 以下の①～⑫までに掲げる項目に関し、この事業全体を通じて得られた自らの成長等への効果について、以下の5～1のうち、該当すると思われるものを選択してください。

5:大きな効果があった／4:効果があった／3:どちらでもない／2:あまり効果がなかった／1:効果がなかった

① 日本と交流国の文化についての知識・理解	3.9
② コミュニケーション力	4.2
③ リーダーシップ	4.4
④ 問題解決力(目前の課題を解決するために創意工夫する力)	4.4
⑤ 異文化への対応力	4.8
⑥ 主体性・積極性・チャレンジ精神	4.4
⑦ 集団生活への適応力(協調性・柔軟性等)	4.6
⑧ 自国のアイデンティティー／誇り	4.5
⑨ 責任感・使命感	4.6
⑩ マネジメント力	4.4
⑪ ディスカッション力	4.4
⑫ ネットワークづくり	4.3

※数値は参加青年32名の平均

- (5) 上記(4) に掲げたもの以外で、事業参加によって具体的に得られたものがあれば記入してください。

- ・将来の協働を見込んだネットワークを広げること。国際的な場に出て代表となる意識を高めること。(水と防災)
- ・他の参加国がどのように気候変動に取り組んでいるかについて深く理解したこと。(水と防災)
- ・自国、特に責任のある立場の人々と自身の経験を共有したこと。(再生可能エネルギー)
- ・グループワークにおける仲間やファシリテーターへの根気や思いやり。(再生可能エネルギー)

- (6) あなたはこの事業への参加を通じて、人生、社会などについての考え方が変わったと思いますか。

大きく変わった	5	12名
変わった	4	17名
どちらでもない	3	1名
あまり変わらなかった	2	2名
全く変わらなかった	1	0名

- ・自然災害に対する積極的な姿勢や、地域社会の共助がどのように復興や受容に影響するかについて、日本文化から多くのことを学んだ。(水と防災)
- ・日本文化への理解を深め、特に日本人の優しさ、器用さ、レジリエンスに対して尊敬の念を抱いた。(水と防災)
- ・気候変動や地球温暖化の課題、そして、これらの課題を我々がどのように解決していくことができるかにつ

いて多くのことを学んだ。(再生可能エネルギー)

- ・ホームステイの経験を通して、日本の社会慣習について、社会的・文化的な違いを理解することができた。(再生可能エネルギー)

- (7) この事業を通じて、あなたと交流国の人々との相互理解が深まったと思いますか。

とても深まったと思う	5	20名
深まったと思う	4	11名
どちらでもない	3	1名
あまり深まったと思わない	2	0名
深まったと思わない	1	0名

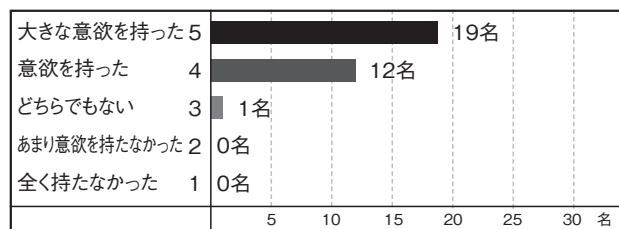
- ・複数の国々と協働することや包括的な方法論で共にプロジェクトの提案を検討することは、大変に実りのあるものであった。(水と防災)
- ・様々なテーマで議論したり発表したりすることが求められるため、この事業は絶対的に参加者同士の相互理解を促進するものである。(水と防災)
- ・互いの経験を共有するなど相互理解を通して、それぞれの国の課題を解決ができると思う。(再生可能エネルギー)
- ・共に食事をしたり、視察や施設訪問、ディスカッションなどで国を超えたグループになったりするような柔軟性を求む。(再生可能エネルギー)

- (8) この事業を通じて、あなたと交流国の人々との友好が深まったと思いますか。

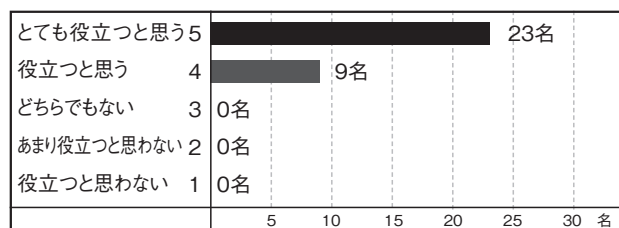
とても深まったと思う	5	24名
深まったと思う	4	7名
どちらでもない	3	0名
あまり深まったと思わない	2	0名
深まったと思わない	1	0名

- ・このような交流事業は、単に行政的な二国間のものというだけでなく、真の変化を生み出せる若者たちの友情を築き上げるものである。(水と防災)
- ・参加者同士のまとまりが良く、また、ホームステイでの経験は様々な議論の手助けとなった。(水と防災)
- ・スペインと日本の参加青年と友好を深めることができた。他国の文化や背景を発見することは大変に興味深いものである。(再生可能エネルギー)
- ・出会った人々と事業後も私的に繋がりを保つことは素敵なことである。この繋がりは将来の活動へとつながっていくだろう。(再生可能エネルギー)

(9) 事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか。



(10)-1 この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。



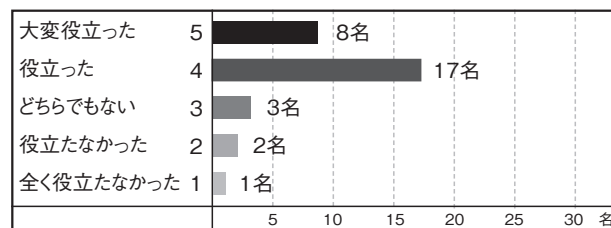
- ・日本における様々な水資源の管理計画は興味深いもので、これらの方法を必ず同僚に共有したい。(水と防災)
- ・私が得たこの経験によって、仕事の現実世界について十分に理解を深めることができた。日本への渡航は、私にとって最高の経験のひとつとなった。たくさんの日本の方言を学ぶことができ、今後も学び続けていきたい。私の研究領域はコンピューターサイエンスであるが、水や土壌の管理に関わる専門外の分野からも学ぶところが大変に多かった。(水と防災)
- ・大変に実りあるものであった。(再生可能エネルギー)
- ・このような国際交流事業は、人生に一度きりの機会である。(再生可能エネルギー)

(10)-2 上記において、5～4を選んだ方は、どのように役立つと考えるか、以下の内容から当てはまる項目を選んでください。(複数回答可)

①就職の際の社会活動実績として示すことができる	20
②自分の広い意味でのキャリア実績として示すことができる	20
③自分の専門分野の実績として示すことができる	18
④自分の人格形成に対して良い影響を与える	22
⑤自分の国際的視野が広がったことにより、理解力の向上につながる	23
⑥国際問題や異文化コミュニケーションに対する理解が深まった	22
⑦各国交流国の参加者間における人的ネットワークの広がり	22
⑧自国の参加者間における人的ネットワークの広がり	22

5. オンライン準備会合

(1) オンライン準備会合は日本での対面交流へ向けての準備に役立ちましたか。



(2) オンライン準備会合の良かった点は何ですか。

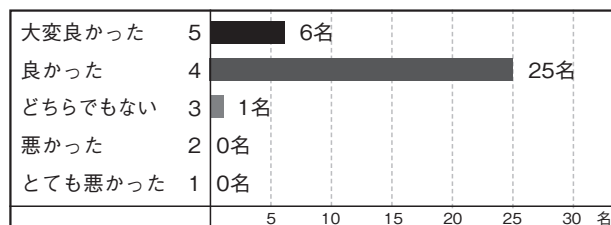
- ・自国の代表団にとって、顔合わせと意思疎通の機会となった。特に事業参加前の心構えを共有できた。この機会を大変肯定的にとらえている。(水と防災)
- ・オンライン会合のおかげで、事業について基礎的な準備を進めることができた。(水と防災)
- ・参加者は初対面の自己紹介をすることができ、事業の概要を知ることができた。(再生可能エネルギー)
- ・事業前に自己紹介をしてお互いを知ることができた。また事業やディスカッションの詳細についても知ることができ、大変役に立った。(再生可能エネルギー)

(3) オンライン準備会合の改善すべき点は何ですか。

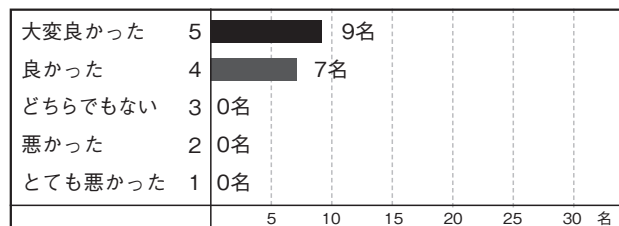
- ・時間が長すぎた。(水と防災)
- ・複数回の会合の機会があった方がよい。(水と防災)
- ・事業の詳細や、ディスカッションの事前準備として必要なことの具体的な説明があれば良かった。(再生可能エネルギー)
- ・お互いを知るアイスブレイクがなく、初対面の状態で、全て自主性に任されていたことには多少戸惑いを覚えた。発表や質問はディスカッションや活動に関するものではなかったので、準備をするためには混乱を来した。(再生可能エネルギー)

6. 東京プログラムと国際青年交流会議 (9/25～26、10/1～4)

(1) グループディスカッションをどのように評価しますか。

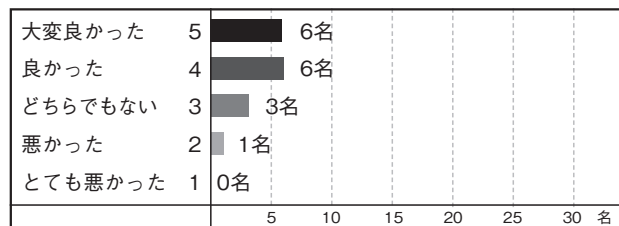


(2)-1 資源エネルギー庁へのテーマ別視察をどのように評価しますか。



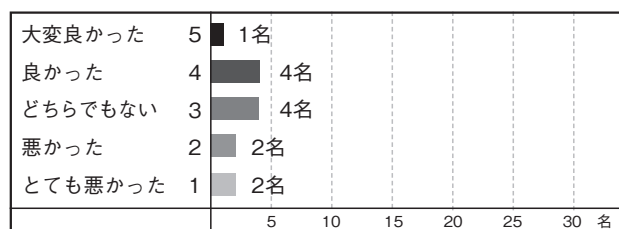
※「再生可能エネルギー」の参加青年

(2)-2 積水化学工業株式会社へのテーマ別視察をどのように評価しますか。



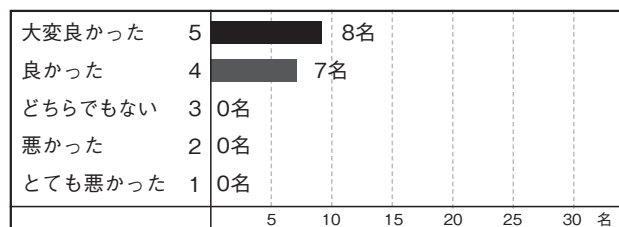
※「再生可能エネルギー」の参加青年

(2)-3 イベルトローラ・リニューアブルズ・ジャパン株式会社へのテーマ別視察をどのように評価しますか。



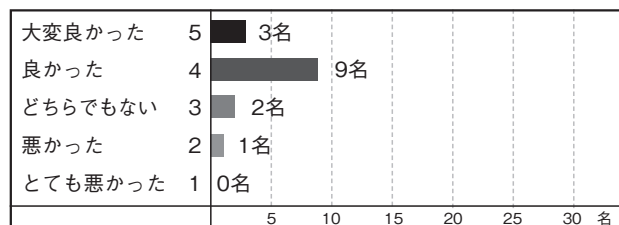
※「再生可能エネルギー」の参加青年

(3)-1 気象庁へのテーマ別視察をどのように評価しますか。



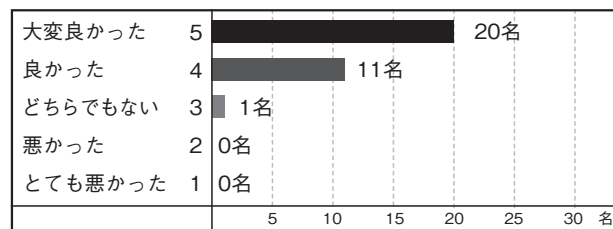
※「水と防災」の参加青年

(3)-2 東京都水道歴史館へのテーマ別視察をどのように評価しますか。

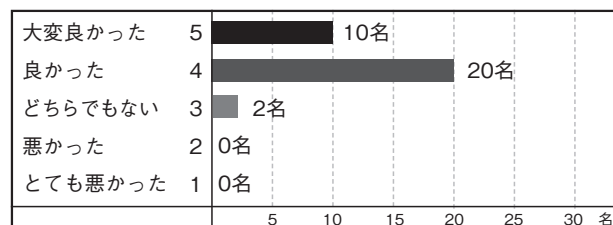


※「水と防災」の参加青年

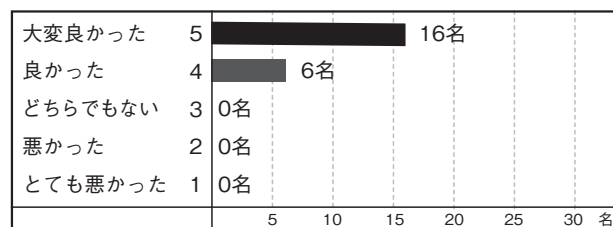
(4) レセプション及び文化交流会をどのように評価しますか。



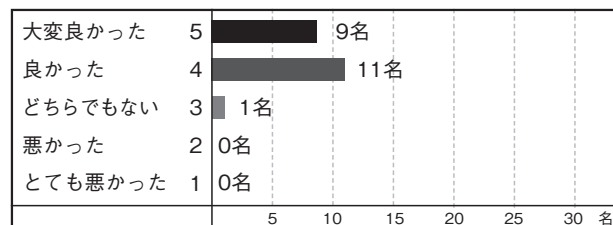
(5) 成果発表会をどのように評価しますか。



(6) 都内視察をどのように評価しますか。



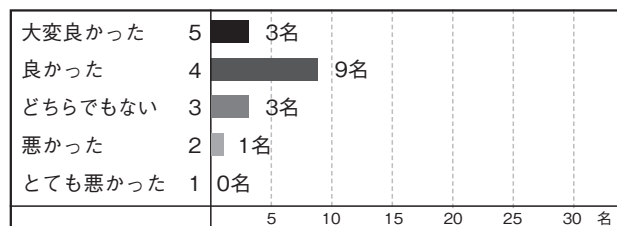
(7) 歓送会をどのように評価しますか。



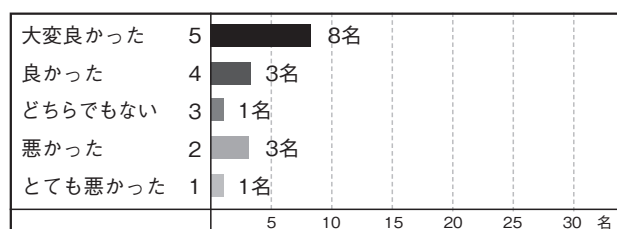
- ・東京プログラムと国際青年交流会議の両方に参加することを心から楽しんだ。これらの経験は大変に素晴らしく、与えられた機会に深く感謝している。多様な視点に触れること、優れた専門家から学ぶこと、世界中の情熱的な若手リーダーたちと協働すること、これらの機会は大変に価値があるものだ。地球規模の課題に対して私の理解を広げ、未来への意義ある行動を生み出すきっかけとなったこの事業の実施に心から感謝している。この経験を可能にしてくれたことに感謝を申し上げる。(水と防災)
- ・異なるディスカッショングループのスペインやモロッコの青年たちとも交流したかった。きっと彼らからの学びも多かっただろうと思う。(水と防災)
- ・大変に興味深く、大変に気に入った。(再生可能エネルギー)
- ・ディスカッショングループでのリサーチ準備にもっと時間をかけられたらと思った。(再生可能エネルギー)

7. 地方プログラム：愛知県（再生可能エネルギー）9/26～30

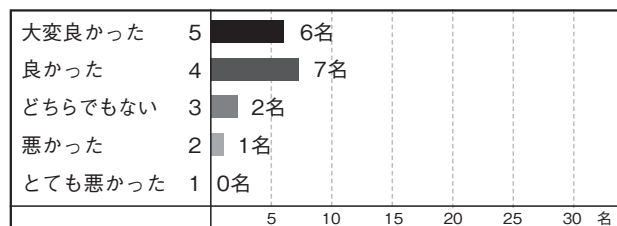
(1) 豊橋技科大学及び豊橋バイオマスソリューションズへの視察をどのように評価しますか。



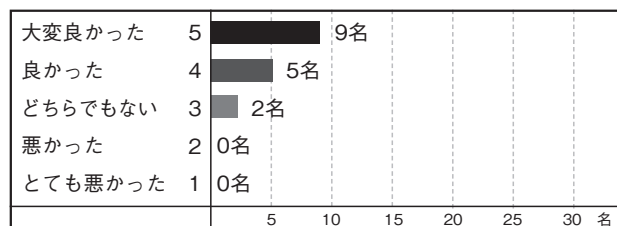
(2) 武蔵精密工業への視察をどのように評価しますか。



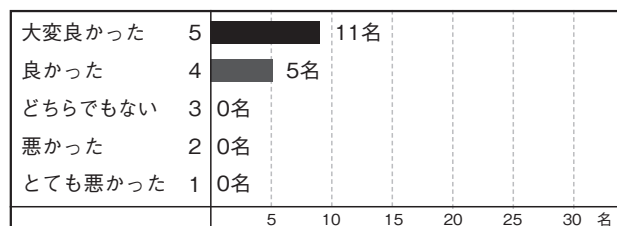
(3) 豊橋バイオマス利活用センターへの視察をどのように評価しますか。



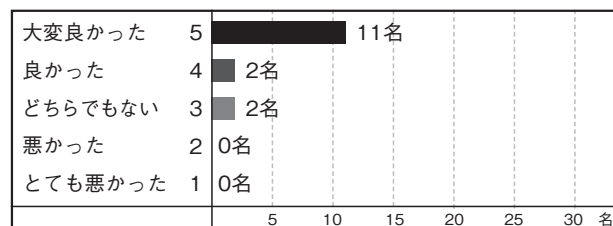
(4) 豊橋市役所での講義とディスカッションをどのように評価しますか。



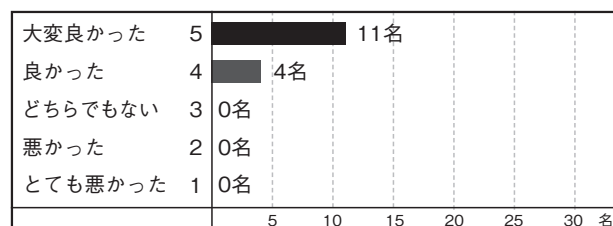
(5) レセプション及びホームステイマッチングをどのように評価しますか。



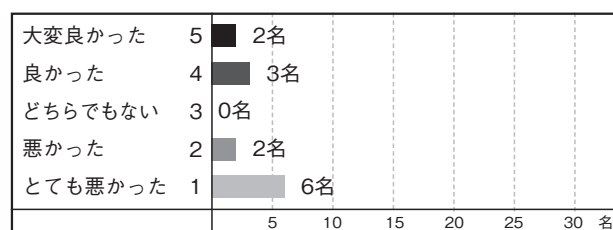
(6) 2泊3日のホームステイプログラムをどのように評価しますか。



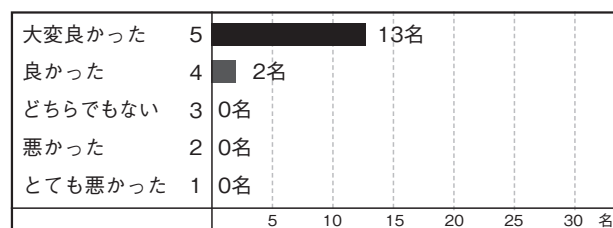
(7) トヨタ産業技術記念館の見学をどのように評価しますか。



(8) 大須でのグループ散策をどのように評価しますか。



(9) 名古屋城の見学をどのように評価しますか。

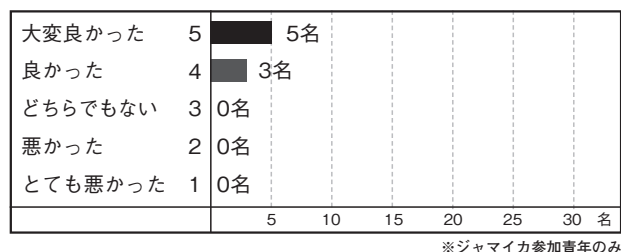


(10) 地方プログラム（愛知県）に対する感想や意見などあれば記入してください。

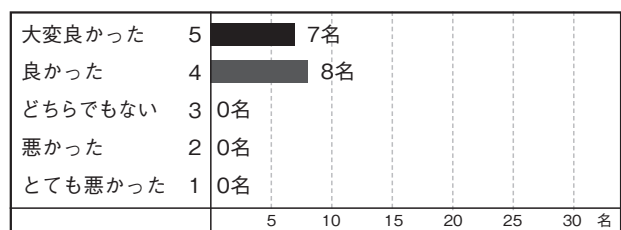
- ・到着時の温かい歓迎に感動した。しかしながら、活動は大変に過密で厳しく、すべての参加者に大きな疲れが残った。また、ローカルユースは大変に優しく助けた。 (再生可能エネルギー)
- ・高層ビルなどよりも自然や景観が好きなので、東京よりも愛知が気に入った。ホストファミリーと時間を過ごし、多くの場所を訪れ、伝統的な風習にも挑戦した。 (再生可能エネルギー)
- ・この経験を思い出深いものにしてくれたホストファミリーには大変に感謝している。このような優しさと助けに支えられた時間を過ごせたことは大変に幸運であった。 (再生可能エネルギー)

8. 地方プログラム：沖縄県（水と防災） 9/26～30

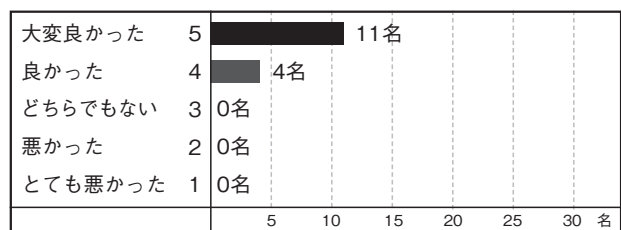
(1) 初日の自由時間をどのように評価しますか。



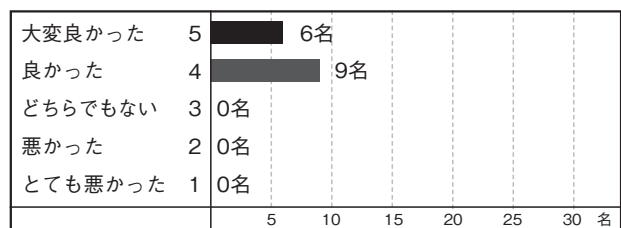
(2) バス内でのオリエンテーションをどのように評価しますか。



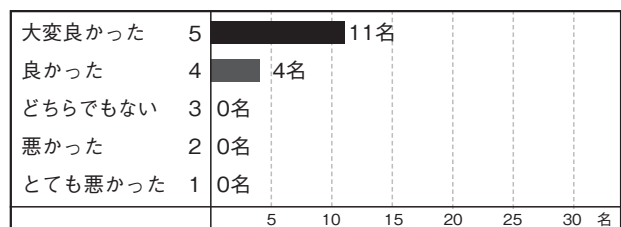
(3) 沖縄県庁表敬訪問をどのように評価しますか。



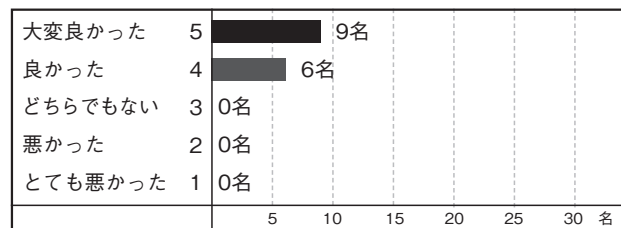
(4) 沖縄県防災関連部署による講義をどのように評価しますか。



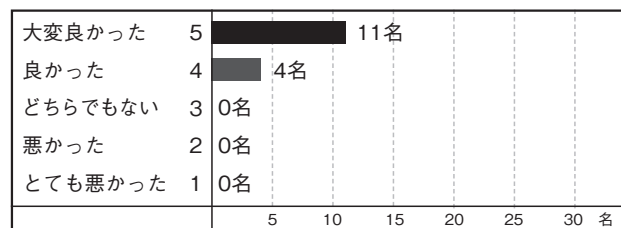
(5) 琉球大学での講義をどのように評価しますか。



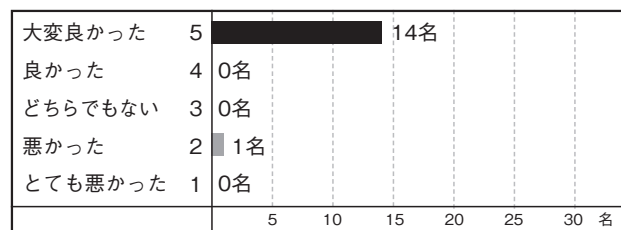
(6) 琉球大学での地元青年とのディスカッションをどのように評価しますか。



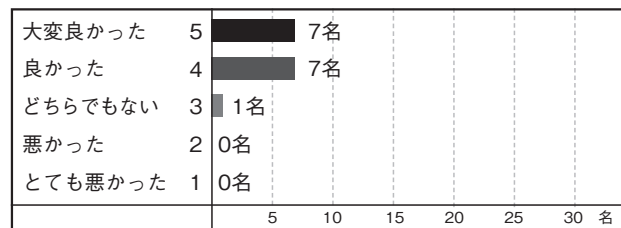
(7) レセプションとホームステイマッチングをどのように評価しますか。



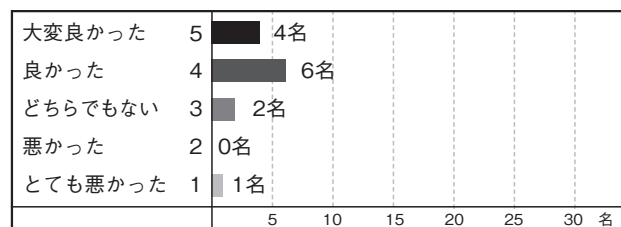
(8) 2泊3日のホームステイプログラムをどのように評価しますか。



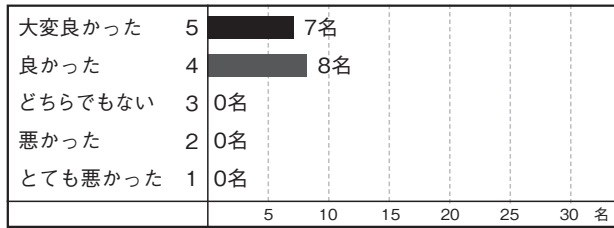
(9) 防災担当者のトークセッションをどのように評価しますか。



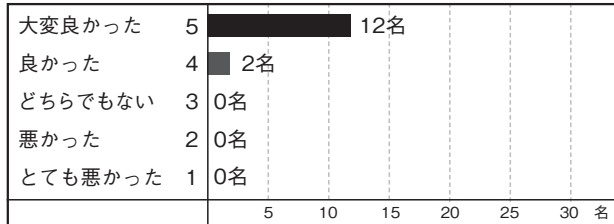
(10) 防災キャンペーの講義をどのように評価しますか。



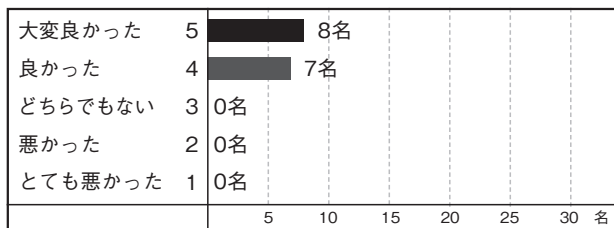
(11) 地元青年とのディスカッションをどのように評価しますか。



(12) 地元青年との国際通り散策をどのように評価しますか。



(13) 首里城の見学をどのように評価しますか。



(14) 地方プログラム（沖縄県）に対する感想や意見などあれば記入してください。

- ・ホームステイプログラムは宝物である。このプログラムはずっと続けてもらいたい。沖縄のローカルユースは大変に愛らしく、とてもポジティブなエネルギーで迎え入れてくれた。彼らはこのプログラムの輝く存在である。(水と防災)
- ・ホームステイが大変に良かった。ホストファミリーは大変温かく歓迎してくれた。可能であるならば、ホームステイの期間がもっと長ければと思う。県知事表敬訪問も素晴らしかった。(水と防災)
- ・沖縄では、長い時間とどまる台風と、その恐れの中で生活することは理想的ではないという共通の認識を共有していただいた。だからこそ、取りうる対策の全てを追及しているのだと理解した。(水と防災)

9. 日本での対面交流後

(1) 今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。

- ・私が得た他の参加者や地域のリーダーたちとの繋がりは大変に価値がある。特に、若者の参加、環境の取り組み、コミュニティ開発に関する領域において、将来

的な活動を協働していく関係を作っていこうと思う。
(水と防災)

- ・この事業で出会った人々とともに、サステナビリティに関係する分野で、世界へ価値を生み出す活動を創り出していきたいと思う。この事業で得たネットワークはもっとも価値あるものであると思う。

(水と防災)

- ・この事業で学んだことを自身の専門的な仕事に活かそうと思う。また、水と災害に関する事業を管轄するドミニカ共和国の責任者へこの知識を提供したい。

(水と防災)

- ・学位取得へ向けて自身の研究を続けるにあたり、この経験を活かそうと思う。この事業への参加についてまとめやレポートを作成するとともに、多くの人へこのような交流事業に参加することを勧めたいと思う。

(水と防災)

- ・ハリケーンが来たとしても、沖縄のように恐れではなく安心の中で生活できるよう、取りうる限りの方法を尽くすという共通理解について、カリブの人々と共有したいと思う。(水と防災)

- ・事業で得た繋がりや知識によって、私自身が類似の課題へ貢献できるようになり、また、他の人々が文化交流に関わっていけるようになっていくだろう。

(再生可能エネルギー)

- ・将来的には、この事業で得た知識やスキルを、海水淡水化の技術や再生可能エネルギーにおける自身の研究へと応用させることで、この経験を活かしていきたいと思う。(再生可能エネルギー)

- ・コミュニケーションや問題解決力を向上させるため、この事業での経験を活かしたいと思う。これはまた、ここで得た知識をより良い理解へと応用していくことであり、より効果的な解決方法を引き出したり、連携事業へ貢献したりすることになる。最終的には、継続的な発展や適用を目指していくこととなるだろう。

(再生可能エネルギー)

- ・相互文化的な学びや気候変動のために、若い人々を指導したり、訓練したり、促進したり、支援したりし続けること。(再生可能エネルギー)

- ・日本とその文化をよりよく理解するための始まりとしてこの経験を活かしたいと思う。ネットワークを向上させ、真に興味深い人々と出会うことができた。

(再生可能エネルギー)

(2) 将来へ向けて、この事業に対する意見や改善すべきところなどあれば自由に記入してください。

- ・既参加青年の同窓会ネットワークを構築することは、進行中の連携や支援に有益となるだろう。このネットワークは、事業期間を超えて、知識の共有、事業連

携、継続中の文化交流を促進させることができるだろう。(水と防災)

- 活動の合間に休憩時間をもっと多く入れること。ホテル滞在の時は3人部屋にしないこと。(水と防災)
- リラクゼーションやネットワーキング、参加者間の率直な意見交換のために、自由時間は不可欠である。その点を考慮して、各活動の合間には、15分間休憩の設定を提案する。(水と防災)
- 事業の中で、二つのテーマの参加者同士が、交流や協働を行えるように計画すること。

(再生可能エネルギー)

- この事業は良く組み立てられており、大変に気に入っている。しかしながら、伝統的な場所へ訪問する時間はなかった。国の遺産はその過去であり歴史である。次の機会に、もっと多くの県を訪れたいと思う。

(再生可能エネルギー)

- この素晴らしい機会に感謝している。テーマについて多くの学びを得たり、日本の文化を知ったり、素晴らしい人々と出会ったり、決して忘れることのない唯一無二の経験をする事ができた。

(再生可能エネルギー)

事業の総括評価

2024年度 国際社会青年育成事業（日本青年外国派遣）

I 趣旨

本年度事業の成果を測り、次年度以降の事業に活かすため、日本参加青年を対象として事業終了時にアンケートによる評価を行った。アンケートにおける評価の数値基準は、5段階評価（評価の高い方から5～1）を基本とした。

※本報告書では、日本青年派遣事業に焦点を当てて評価する。

※参加青年に対して行った5段階評価のアンケートの詳細については「資料編」参照。

II 評価結果

1. 事業目的の達成度

①日本と交流相手国の相互理解の促進 [1-(7)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との相互理解が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年のうち5段階評価の4（深まったと思う）以上と回答した者は77.3%であり、全体の8割近くが相互理解が深まったと評価した。

②日本と交流相手国の友好の促進 [1-(8)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との友好が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の90.9%が5段階評価の4（深まったと思う）以上と回答。全体の9割を超える者が相手国の人々との友好が深まったと回答し、高い評価であった。

③社会貢献活動への意欲 [1-(9)]

「事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか」との問いに対して、5段階評価の4（ある程度意欲を持った）以上と回答した者は72.7%であり、一定の評価があった。

④事業参加による参加青年の将来への影響 [1-(10)-1]

「この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の95.5%が5段階評価の4（役立つと思う）以上と回答し、極めて高い評価であった。

⑤事業参加による目的の事前設定と達成状況 [1-(3)]

「この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何でしたか。また、その目標は達成できましたか。」との問いに対して、日本参加青年の72.7%が5段階評価の4（大きく変わった）以上を付け、一定の評価があった。

Ⅲ 総括評価

最後に、アンケートの総合評価を含めて、今回の総括評価をまとめる。

「事業全体をどのように総合評価しますか[1-(2)]」との問いに対して、日本参加青年の81.1%と全体の8割を超える者が5段階評価の4（良かった）以上と回答し、全体としては高い評価が得られた。続く自由記述欄では、事前研修から継続する一連のプログラムにより派遣国についての学びを深められたといった声、日本と派遣国それぞれの政府機関やテーマに関連する施設など、普段の生活では行きにくい場所へ訪問できた経験が有意義だったとの声、それぞれに個性的な日本人メンバー同士の出会いと学びあいが有意義だったといった声があった。一方で、一部プログラムにおいてテーマに関する学びの深化や外国青年との交流機会が物足りなかったとの声もあり、次年度以降の事業の実施に向け、改善を図ってまいりたい。

事業を終了しての今後の展望として、「今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。[4-(1)]」との問いに対して、日本参加青年からは、日本青年として自分が世界のフィールドで貢献していくという自覚が強まったといった声、テーマに関して日本よりも進んだ取組がある国を訪問できた経験を自分のキャリア形成に活かしたいといった声、事後活動組織において次世代の青年育成や、テーマに基づいた活動に積極的に従事し、その道のリーダーとして活躍していきたいといった声など、前向きなコメントが多く寄せられた。

以上、日本参加青年による評価結果を総括すると、全体として、日本参加青年は、テーマに沿ったプログラムを通じて、世界的な社会課題の解決に貢献する人材としての素養を高めたと言える。さらに、将来は、事業で得られた学びを糧に、それぞれのフィールドの中で、リーダー的存在として指導性を発揮しつつ活躍していくことが十分に期待できることから、本事業の目的は十分に達成されたものと評価できる。

Chapter 1

Outline of the Program

Overview of the International Youth Exchange Programs by the Cabinet Office

Outline of the International Youth Development Exchange Program (INDEX) 2024

1. Overview of the International Youth Exchange Programs by the Cabinet Office

The International Youth Exchange Programs by the Cabinet Office, Government of Japan, began in 1959, commemorating the royal wedding of Their Majesties the Emperor Emeritus and Empress Emerita. Since then, the program has been implemented for over 65 years.

The program is implemented with the aim of fostering youth who will demonstrate leadership in the international community and contribute to social activities. Through exchanges with youth from Japan and other countries, the program promotes mutual understanding and friendship among youth, broadens their international perspectives, nurtures the spirit of international cooperation, and enhances their practical skills in international cooperation.

2. Outline of the International Youth Development Exchange Program (INDEX) 2024

The International Youth Development Exchange Program (INDEX) was developed on the occasion of the Imperial Succession in 2019 from the “International Youth Development Exchange Program” reorganized in 1994 to commemorate the royal wedding of Their Majesties the Emperor and Empress, based on the integration of the following two original programs: the “Japanese Youth Goodwill Mission” that was launched in 1959 to commemorate the royal wedding of Their Majesties the Emperor Emeritus and Empress Emerita, and the “Invitation of Overseas Youth to Japan” that began in 1962.

In 2024, the program aimed to foster youth who will contribute to solving global issues. Japanese youth were dispatched for approximately 10 days to two countries engaged in activities related to the program's themes, where they participated in discussions, institutional visits, homestays, and other activities. After returning to Japan, they participated in a three-day International Youth Conference with invited foreign youth from four countries, including the dispatch countries. Through discussions, cultural exchanges, and other activities based on the theme, the youth deepened mutual understanding and friendship.

(1) Theme and Exchange Countries

Overall Theme: Climate Change

Sub-themes and Exchange Countries:

- Theme I: **Renewable Energy** – Morocco, Spain
 - Theme II: **Water and Disasters** – Dominican Republic, Jamaica
- (Japanese youth were dispatched to the two countries underlined)

(2) Japanese Youth Goodwill Mission

① Countries to visit and number of youths

Country to visit	Number of Japanese Participating Youths
Morocco	11 youths, 1 leader, 1 sub-leader
Dominican Republic	12 youths, 1 leader, 1 sub-leader
	Total 27

② Schedule

Period	Activities
Wednesday 3 July to Saturday 6 July 2024 (4 days)	Preparatory training session (intensive)
Sunday 14 July and Saturday 3 August 2024 (2 days)	Preparatory training session (online)
Saturday 7 September and Sunday 8 September 2024 (1 day each)	Online pre-conference (by theme)
Thursday 19 September and Friday 20 September 2024 (2 days)	Pre-departure training session
Saturday 21 September to Monday 30 September 2024 (10 days)	Activities in exchange countries
Tuesday 1 October to Thursday 3 October 2024 (3 days)	International Youth Conference
Friday 4 October to Saturday 5 October 2024 (2 days)	Post-program training session
Saturday 8 February 2025	Online Reporting Session

③ Activities in Exchange Countries

Institutional visits related to the sub-themes, discussions with local youth, cultural exchange, homestays, courtesy visits to government agencies, etc.

(3) Invitation of Foreign Youth

① Invited countries and the number of youths

Theme	Invited country	Number of Overseas Participating Youth
I Renewable Energy	Morocco	8 (including 1 leader)
	Spain	8 (including 1 leader)
II Water and Disasters	Dominican Republic	8 (including 1 leader)
	Jamaica	8 (including 1 leader)
		Total 32

② Invitation Period

September 25 – October 5, 2024 (11 days)

Details are provided below for the International Youth Conference.

③ Activities in Japan

- Regional Program :
Aichi (Morocco, Spain) or Okinawa (Dominican Republic, Jamaica), where participants engage with local youth, hold discussions, theme-related institutional visits, and participate in homestays, etc.
- International Youth Conference :
Discussions with Japanese participating youth, Cultural Exchange Reception, etc.
- Tokyo Program : Reflection activities, city tours, and closing ceremonies.

(4) International Youth Conference

① Overview and Objectives

The International Youth Conference is held annually as part of the International Youth Development Exchange Program, aiming to facilitate effective implementation of the program by bringing together Japanese youth dispatched on mission and overseas youth invited through the program.

During this year's conference, under the overarching theme of "Climate Change," youth from Japan and participating countries discussed the two sub-themes: "Renewable Energy" and "Water and Disasters" followed by presentation of the outcomes of their discussions on the themes. Its goal is to foster youth who will contribute to addressing global issues.

② Schedule

Date	Program contents	
Wednesday, September 25	Arrival in Japan	Orientation for the invited Foreign Youths
Thursday, September 26 - Monday, September 30	Regional program	【Morocco, Spain】 : Aichi Prefecture 【Dominican Republic, Jamaica】 : Okinawa Prefecture
Tuesday, October 1	Tokyo program, International Youth Conference	Morning: Orientation Theme-related Institutional Visit 【Renewable Energy】 Agency for Natural Resources and Energy 【Water and Disasters】 Japan Meteorological Agency Afternoon: Theme-related Institutional Visit 【Renewable Energy】 Sekisui Chemical Co., Ltd. (Tokyo International Cruise Terminal), Iberdrola Renewables Japan Co., Ltd. 【Water and Disasters】 Tokyo Waterworks Historical Museum Afternoon: Theme-based discussions
Wednesday, October 2		Morning: Theme-based discussions Afternoon: Theme-based discussions, Cultural Exchange Reception
Thursday, October 3		Morning: Theme-based discussions Afternoon: results presentation, evaluation meeting
Friday, October 4		Morning: Reflection, city tours Afternoon: City tours, closing ceremony, farewell reception
Saturday, October 5		Returning to their home countries

③ Discussion Group Composition by Sub-theme

Theme I: Renewable Energy

Facilitator: 1

Japanese participating youth (dispatched to Morocco): 11

Moroccan participating youth: 8, Spanish participating youth: 8

Theme II: Water and Disasters

Facilitator: 1

Japanese participating youth (dispatched to Dominican Republic): 12

Dominican participating youth: 8, Jamaican participating youth: 8

Chapter 2

Pre-Program Training and Online Preparatory meeting

Pre-Program Training

Outline of Online Preparatory meeting

Theme I
Renewable Energy

Theme II
Water and Disasters

Pre - Program Training

Japanese Youth Goodwill Mission 2024

The selected 24 participating youths underwent a four-day pre-training camp from July 3rd to 6th at the National Olympics Memorial Youth Center in Shibuya, Tokyo, followed by online Pre-Program Training on July 14th and August 3rd.

The aim is to ensure the effective implementation of the program by the participating youth, to ensure that they fully understand the purpose and objectives of the program, to develop their mindset as representatives of Japanese youth, to deepen their awareness and understanding of the situation in Japan and the various circumstances of the host countries related to their theme, and to clarify their goals in preparation for the self-study period leading up to the pre-departure training.

They attended various lectures and, by delegation, worked on team building through activities such as deciding on each one's role and confirming what to prepare as well as confirming discussion methods and preparing to introduce Japanese culture.



Ice-breaking among participating youth (Team building)



Received a lecture on theme (Water and Disasters)

	Date	Time	Program
1	July 3rd Wednesday	13:15-13:45 13:45-14:15 14:15-14:45 15:00-16:30 17:30-18:30 18:45-20:00 20:00-22:00	Opening ceremony Explanation of outline of the Program from the Cabinet Office Orientation Lecture on team building Dinner Group training Self-study training
2	July 4th Thursday	09:00-10:00 10:15-11:15 11:30-12:00 12:00-13:00 13:30-15:30 16:00-17:30 17:30-18:30 18:45-20:00 20:00-22:00	Lecture on protocol Lecture on host countries Lecturer (Dominican Republic) : Hiroyuki MAKIUCHI Former Ambassador of Japan to Dominican Republic Lecturer (Morocco) : Takuji HANATANI Former Ambassador of Japan to Morocco Training by delegation Lunch Courtesy call to the embassy of the host countries in Tokyo Training by delegation (explanation of the host country from the Cabinet Office) Dinner Explanation on traveling to host countries Self-training

	Date	Time	Program
3	July 5th Friday	09:00-10:45 11:00-12:00 12:00-13:00 13:15-15:15 15:15-15:45 16:00-17:30 17:30-18:30 18:30-22:00	<p>Training by delegation</p> <p>Lecture by discussion theme</p> <p>Lecturer 【Renewable Energy】 : Hideta TESHIROGI Subsection Chief, New and Renewable Energy Division, Agency for Natural Resources and Energy</p> <p>Lecturer 【Water and Disasters】 : Makiko OHASHI Deputy Director for International Cooperation, Disaster Management Bureau, Cabinet Office</p> <p>Lunch</p> <p>Discussion session</p> <p>Administrative announcements</p> <p>Lectures on themes from each delegation leader</p> <p>Dinner</p> <p>Self-training</p>
4	July 6th Saturday	09:30-12:00 12:00-13:00 13:00-14:00 14:00-14:30	<p>Training by delegation</p> <p>Lunch</p> <p>Explanation on post-program activity</p> <p>Closing ceremony</p>

1. Outline of the Online Preparatory Meeting

In order to facilitate smooth face-to-face exchange programs, online exchanges (via Zoom) were held by theme, taking into consideration the time difference between Japan and the other participating countries, to deepen the friendship between both sides.

On September 7 (Saturday), the participating youth from Japan, the Dominican Republic and Jamaica from the discussion theme "Water and Disasters" held an online meeting. On September 8 (Sunday), the participating youth from Japan, Morocco and Spain from the discussion theme "Renewable Energy" held another one. During these sessions, they introduced themselves, engaged in ice-breaking activities, and exchanged opinions and prepared for the upcoming discussions.

2. Theme I : Renewable Energy

◆Date

Japan Time: September 8, 2024 (Sunday) 17:00–19:00

Morocco Time: September 8, 2024 (Sunday) 9:00–11:00

Spain Time: September 8, 2024 (Sunday) 10:00–12:00

◆Participants

Japanese Delegation to Morocco: 11 Japanese participating youth, 1 leader, 1 sub-leader

Moroccan participating youth: 8 (including 1 leader)

Spanish participating youth: 6 (including 1 leader)

Facilitator: 1

◆Program Contents

Japan Time	Contents
17:00-17:10	Opening, Cabinet Office Remarks, Self-Introduction of Cabinet Office Staff Self-Introduction of Delegation Leaders, Self-Introduction of Facilitators
17:11-18:05	Self-Introductions among participating youth, Icebreaking (in breakout rooms)
18:06-18:10	Break
18:11-18:30	Explanation of the Discussion Theme (Presentation by Japanese Youth)
18:31-18:50	Preparation for the Discussion (Setting Communication Channels and Exchange of Opinions)
18:51-19:00	Closing, Cabinet Office Remarks, Administrative Announcements



"Renewable Energy" Group Photo

3. Theme II : Water and Disasters

◆Date

Japan Time: September 7, 2024 (Saturday) 9:00–11:00

Dominican Republic Time: September 6, 2024 (Friday) 20:00–22:00

Jamaica Time: September 6, 2024 (Friday) 19:00–21:00

◆Participants

Japanese Delegation to the Dominican Republic: 12 Japanese participating youth, 1 leader, 1 sub-leader

Dominican participating youth: 7

Jamaican participating youth: 7 (including 1 leader)

Facilitator: 1

◆Program Contents

Japan Time	Contents
09:00-09:10	Opening, Cabinet Office Remarks, Self-Introduction of Cabinet Office Staff Self-Introduction of Delegation Leaders, Self-Introduction of Facilitators
09:11-09:55	Self-Introductions among participating youth, Icebreaking (in breakout rooms)
09:56-10:15	Explanation and Setting of Ground Rules
10:16-10:50	Explanation of Discussion Theme and Pre-Program Assignment
10:51-11:00	Closing, Cabinet Office Remarks, Administrative Announcements



"Water and Disasters" Group Photo

Chapter 3

Tokyo Program

Outline of Tokyo Program

Program and Schedule

Theme I
Renewable Energy

Theme II
Water and Disasters

1. Outline of Tokyo Program

Overseas participating youth arrived in Japan on September 25 (Wednesday), and departed for the local programs the following day. They returned to Tokyo on September 30 (Monday), and participated in the “International Youth Conference” in Tokyo from October 1 (Tuesday) to October 3 (Thursday). Participating youth from Europe and Africa focused on the theme of “Renewable Energy,” while participating youth from Latin America focused on the theme of “Water and Disasters”. They engaged in discussions and theme-specific site visits with Japanese participating youth, and on October 3 (Thursday), the presentation of discussion results was held to summarize their activities over the three days.

On October 4 (Friday), they reflected on the program, went on a Tokyo city tour, and attended the closing ceremony and farewell party. They returned to their home countries on October 5 (Saturday).

2. Program Schedule

Date	Time	Program
September 25 (Wednesday)		Arrival in Japan, Orientation
September 26 (Thursday) - 30 (Monday)		Regional Program
October 1 (Tuesday)	09:00-15:00	Theme-based Institutional Visits
	15:30-18:00	Theme-based Discussions
October 2 (Wednesday)	09:00-12:00	Theme-based Discussions
	13:20-16:00	Theme-based Discussions
	17:30-19:00	Cultural Exchange Party
October 3 (Thursday)	09:00-12:00	Theme-based Discussions
	13:00-15:30	Presentation of the Discussion Results
October 4 (Friday)	09:30-11:00	Reflection Session
	11:00-16:30	City Tour in Tokyo
	18:00-20:00	Farewell Party
October 5 (Saturday)		Return to Home Country

3. Theme I : Renewable Energy

◆ Overall Theme

Climate Change

◆ Sub-Theme

Renewable Energy

◆ Implemented Program

The focus of the discussion was on “How to secure sustainable energy for the reduction of greenhouse gases.” The aim was to deepen understanding of the current issues surrounding renewable energy, as well

as the efforts and solutions being implemented to address them, through country-specific case studies, institutional visits, and discussions among youth from different countries. At the same time, participating youth were encouraged to engage in discussions, consolidate their opinions, and work toward outputs.

Through these discussions, the program aimed to improve the ability to listen to others' opinions with respect, develop the skill to clearly communicate one's own opinions, and acquire international discussion skills to engage in constructive debates as global citizens.

◆ Institutional Visit

Agency for Natural Resources and Energy

Sekisui Chemical Co., Ltd. (Lectures at Tokyo International Cruise Terminal and Tokyo International Exchange Center)

Iberdrola Renewables Japan Co., Ltd. and lectures at Tokyo International Exchange Center

◆ Facilitator

Takaki MINAMOTO

◆ Facilitators' Report : Discussion fully bloomed

Takaki MINAMOTO

I would like to extend my sincere respect to the fellow participating youths for their wonderful talents and intelligence shown in their discussions once again on this paper. And I hope our time devoted to the fierce discussion and the international friendship made during the program contribute to their bright future, looking forward to a big reunion someday.

The amount of their knowledge from four different sub-groups (academia, citizen, government, industry) was impressive, and their interdisciplinary efforts and outputs reminded me of the famous quote of Newton's "standing on the shoulders of Giants." The process of their discussion represented the importance of gathering diverse talents of different ages and fields in one place for co-creation. Of course there emerged some disagreements on the way, but they basically handled every challenge by themselves with speaking in a language which is not their mother tongue, and I am pretty sure they did broaden their horizons after such a heavy workload.

Amid the tight schedule, their discussion remained as professional and authentic as possible. For instance, when dealing with certain case studies, they did not finish at technical or superficial conversations, but rather they dug deeper to topics such as history, culture, and politics and taught new things to each other. From the perspective of a facilitator, they became

truly open to each other after piles of big and small discussions.

Despite jet lag, they did their best to make their program a fruitful one, and indeed, smiling faces at the final presentation were the symbol of the successful completion of their journey. At the very end of the program, the selected representative youths from different contingents, who ate together, discussed together, and spent a lot of time together had to go back to their own places. It might have been a moment with tears for them, but at the same time, it appeared as a pleasant scene where promising leaders of tomorrow set sail for their new tasks and dreams, saying "see you again" rather than just "good-bye."

As a facilitator, I did my best to try to add a meaningful new page of 2024 to this honorable and historic program, but it was mainly their fantastic team work and efforts that enabled the discussion on renewable energy and climate change a great one without any major troubles. Each one of them was the captain of our ship of discussion, and they made it without being a Titanic. Unfortunately, we could not cover everything that we wanted to cover due to time constraints, but I hope they will continue their journey on the theme with the new friendship they obtained this time.

Given the wide-scale problems and issues we are

facing today right after COVID-19, not to mention disputes around Palestine and Ukraine as well as progressing global warming, yes, our path ahead might be a tough one. Still, we have no choice but to proceed, and I sincerely hope the training the participating youths received through this program equipped them with new weapons to tackle the hard international issues together from now on.

Having said that, I would also like them to continue their decent academic attitude toward their study, research, and discussion, and of course, to keep up their good work in each field. The reality may be harsh, but given their fresh and creative sense and warm heart, I

am positive that we are going to have leaders who can make tomorrow a brighter day than today. And I would like to be counted as a crew of the vessel sailing in the rough ocean with them, aiming for the Polaris. Thank you, everyone.

◆Report : Japanese Participating Youth (Delegation to Morocco), Akisato YOSHIMURA

During my activities in Morocco, I had the opportunity to learn a great deal about the country's efforts in renewable energy. However, I also gained a lot from the International Youth Conference held after returning to Japan.

At the conference, we held discussions over two days, and on the final day, we summarized our thoughts in a presentation slide and shared them with the entire group. Our group, focused on renewable energy, was divided into four teams: Academic, Government, Industry, and Citizen. I was part of the Citizen team, where we discussed better decision-making methods for introducing renewable energy and what citizens could do to promote its spread.

The first thing that surprised me when the discussion began was the vast knowledge of the international youth participants. When we shared the key concepts we thought were important in renewable energy and the current situations in our respective countries, the young people from Morocco and Spain provided detailed insights into a wide range of topics such as politics, history, legal systems, and economic conditions. Many of the Spanish participants were part of organizations focused on youth activities, so they were well-versed in political systems and the diverse perspectives of young people. On the other hand, most of the Moroccan youth were Ph.D. students researching

solar panels and storage batteries, so they had a deep understanding of the technical aspects. Among the Japanese youth, some were already involved in renewable energy through their university studies or work, while others were active in completely different fields, which created a diverse group. We exchanged opinions based on our individual backgrounds, and as a result, we were able to actively engage in discussions, utilizing our strengths. The two days of discussions, which initially seemed long, were not enough to fully explore all of the topics.

The most valuable lesson I learned from this program was realizing that there are young people around the world who share similar concerns and are working towards solutions. I also had the chance to meet young people who will likely be at the forefront of various fields both in Japan and abroad in the future. As an ordinary university student, I sometimes felt that there were few young people who shared the same concerns as I did, and before joining this program, I felt overwhelmed by anxiety and impatience. However, through interacting with international youth, I was able to truly understand that there are young people around the world who are taking action. This gave me the mindset to focus on what I can do right now and to start my efforts from there, knowing that I can gradually expand my activities. This understanding has allowed me to move forward with confidence.

My participation in the International Youth Development Exchange Program 2024 has profoundly improved and transformed me. After a 20-hour journey, we touched down at Tokyo's Haneda airport on September 25. During our first few days, we traveled to Aichi Prefecture, where we discovered amazing aspects of Japanese culture. Despite our exhaustion, we were clearly happy.

On October 1, back in Tokyo, our program intensified with an orientation session bringing together delegations from several countries, including Morocco, Spain, Jamaica, the Dominican Republic, and Japan. The Ministry of Economy, Trade, and Industry's Natural Resources and Energy Agency was the next place we visited. We were able to talk with experts regarding vital subjects including energy transition and natural resource management during this visit, as well as get more knowledge about Japanese energy regulations. Following this meeting, we paid a visit to SEKISUI CHEMICAL CO. LTD, a leader in the development of eco-friendly materials, and then we went to a conference lectured by IBERDROLA RENEWABLES JAPAN CO. LTD, a division of the world's largest renewable energy company in Spain. At the end of the day, four sub-themes were identified for discussion: industry, investment, government role, and citizen involvement in the energy transition. Over the course of three days, the group talks brought together a wide range of opinions from our various cultural and economic backgrounds in an incredibly exciting exchange of ideas.

On October 2, we deepened our analyses of our respective themes and came up with concrete recommendations. There was also a festive cultural evening that day, where each delegation was able to represent its country in traditional costume, reinforcing the spirit of camaraderie and mutual respect between all participants.

On October 3, the last day of the debates, we concluded our presentations by summarizing the ideas and proposals developed over the previous days. The conclusions of each group were presented to the other delegations, including those who had addressed the subject of 'water and disasters'. As a result of this chance, creative solutions that

support the advancement of renewable energies in our individual nations were brought to light.

On October 4, our last day in Tokyo, we spent learning about Japanese history and culture by touring some of the city's most famous neighborhoods. We celebrated the program's official conclusion at the end of the day with the awarding of awards. On this momentous occasion, all of the delegations convened in a spirit of goodwill and celebration. The program was more than just an opportunity to travel; it was essential to my development both personally and professionally, encouraging me to think more widely and globally and opening my eyes to new ideas.

On October 5, the day we left Tokyo, we finally began our journey back to our respective countries. We brought with us wonderful memories and our sincere gratitude for your efforts and gracious welcome.

My participation in this program has transformed me both personally and professionally. Through the various visits and discussions, I acquired a deeper understanding of renewable energy, sustainability practices, and the critical role industries and governments play in driving environmental change. The visit to SEKISUI CHEMICAL CO. LTD. stands out as a moment where I truly grasped the importance of innovation in creating eco-friendly solutions. Additionally, the discussions around energy transition and the need for investment and citizen involvement provided me with fresh perspectives on how Morocco could move forward in its renewable energy initiatives.

I would like to express my deepest gratitude to the organizers of the 2024 International Youth Development Exchange Program, and all the participants who contributed to making this program an unforgettable experience. Your hospitality, meticulous planning, and the opportunity to engage in meaningful discussions have profoundly shaped my perspective. I am especially thankful to the facilitators who ensured that our learning experience was both insightful and inspiring.

Once again, I thank everyone involved for making this experience both impactful and memorable.

Tokyo was a place we had long heard about and seen in photos, but it surpassed all expectations of the Spanish Delegation in the INDEX24 programme, composed by Ainara ALFARO, Ángela CORDOBÉS, María ETESSAM, Pablo de la HOZ, Ana NOVOA, Mario SUÁREZ, Ángel PÉREZ, and a group leader, Xabier TRIANA. During our stay, we not only engaged in formal institutional visits but also had the chance to explore Japan's vibrant capital. Japan welcomed us warmly, allowing us to apply our research and prior knowledge on Renewable Energies within a real-world context.

Academically, we collaborated with the delegation of Morocco and the delegation of Japan from the Renewable Energy group, working towards a shared objective that culminated in a final presentation. This presentation was delivered to all INDEX2024 participants, including delegations from Jamaica, the Dominican Republic, and Japan's "Water and Disasters" group.

We also attended enlightening conferences and technical visits, including one at the Agency for Natural Resources and Energy, in the Ministry of Economy, Trade and Industry. A particular highlight was our visit to SEKISUI CHEMICAL CO., LTD, where we learned about innovations in Solar Power Generation. Indeed, at Tokyo International Cruise Terminal, we had the opportunity to observe and touch on Japan's largest-scale verification of Film-type Perovskite Solar Cells. These kinds of solar cells are not yet on the market.



INTERNATIONAL YOUTH CONFERENCE AT HOTEL NEW OTANI

Thus, it gave us an inspiring glimpse into the future of solar technology.

On a personal level, we are grateful for the institutional visits, especially the one organised by the Spanish Embassy in Japan, where we met Mister Miguel Gómez de Aranda y Villén, the Minister-Counselor of Spain in Japan. Some delegation members even had the chance to speak briefly with the Emperor Naruhito and the Empress Masako, which was a thrilling moment. Additionally, a guided city tour allowed us to immerse ourselves in Tokyo's culture and cuisine, broadening our appreciation for Japan beyond the academic realm.

Moreover, this program fostered critical thinking and youth empowerment through collaboration with other young delegates. This experience has given us valuable insights and will have a positive impact on our future. Currently, the Spanish Delegation is working on a project to celebrate World Renewable Energy Day, recognising the urgency and importance of sustainable energy solutions.

In conclusion, we would like to express our sincere thanks to the organisers for including us in this exceptional experience, providing us with access to key insights and connecting us with notable figures from around the world. This journey has been both an honour and a privilege, leaving us motivated and inspired to continue our work in renewable energy for a better future.



SPANISH DELEGATION AT MINISTRY OF ECONOMY, TRADE AND INDUSTRY.

4. Theme II: Water and Disasters

◆ Overall Theme

Climate Change

◆ Sub-Theme

Water and Disasters

◆ Implemented Program

The focus of the discussion is on “Responding to Intensifying Water Disasters.” The objective is to deepen individual perspectives on appropriate responses at each stage of disaster management—such as prevention, actions during a disaster, and post-disaster recovery—through case studies, institutional visits, and discussions among youths from different countries. Based on the above, the goal is to summarize and form opinions through these discussions.

Through these discussions, the program aimed to improve the ability to listen to others’ opinions with respect, develop the skill to clearly communicate one’s own opinions, and acquire international discussion skills to engage in constructive debates as global citizens.

◆ Institutional Visit

Japan Meteorological Agency
Tokyo Waterworks Historical Museum

◆ Facilitator

Yuiko MITANI

◆ Facilitators’ Report: Better communication allows us to learn from our differences Yuiko MITANI

As the facilitator of the theme ‘Water and Disaster Management’ with youth from Dominican Republic, Jamaica and Japan, I designed and facilitated the discussions at the pre-training in July, the online preparatory meeting in September and the International Youth Conference in October. The ‘Water and Disasters’ theme discussions were given the question ‘How do we respond to the increasing severity of water-related disasters?’ and included two sub-themes: countermeasures against water-related disasters, which are becoming more frequent and severe due to climate change, and the management of water resources as infrastructure. After setting up a specific hypothetical scenario related to water-related disasters associated with hurricanes, the participants were divided into

four groups, according to the timeline of a disaster occurrence: ‘Pre-disaster: disaster prevention and mitigation planning’, ‘Evacuation response during disaster’ and ‘Post-disaster recovery/build back better’, in addition to ‘Water resources management and infrastructure’. Adaptation measures were examined for each of these sub-themes. Throughout the discussions, the emphasis was on the actions of the participants themselves, regardless of what organisation was implementing the measures.

On the first day of the International Youth Conference, the participants first visited the Japan Meteorological Agency and the Tokyo Metropolitan Museum of Waterworks History. Then, we started the discussions by ice-break activities and shared the

overview of water-related disasters and adaptation best practices in their respective countries, which they had researched as a preliminary task, and analysed similarities and differences in order to understand each other's national situations. Then, participants identified all stakeholders in each sub-theme and we discussed who among them were the people and communities most vulnerable to the effects of disasters and what makes them so. In this discussion on disasters, the perspective I focused on was the consideration of people and communities who are more vulnerable for various reasons, such as geographical, social and economic. The proposed actions developed based on this information were summarised on posters, and we hosted a mutual sharing activity where groups moved round and everyone asked questions and gave feedback on all groups' proposals. The groups then returned to their original groups to revise and adjust their drafts based on the feedback. On the third day, after a rehearsal with all groups followed by a question-and-answer session, the final adjustments were made and the results were presented. Although there was limited time for discussion and preparation, all the groups did a great job of incorporating various ideas and perspectives based on the previous discussions, and the individual characteristics of each group were well expressed.

In designing the discussions, I focused on

incorporating the principles of D (Diversity), E (Equity) and I (Inclusion) in order to create a safe space where all participants could equally participate and speak their opinions. For example, there were differences in English language skills amongst participants, as only Jamaica out of the three countries had English as a first language. In addition, there were differences in knowledge and experience on the topic amongst participants who were already working on the relevant topic as experts and those who were not, e.g. students. These differences could be major barriers for smooth discussions, as they had a significant impact on the ease of speaking out and participating. As a countermeasure, the following measures were implemented: creating an atmosphere through solid ice-breaking activities before starting each day's discussions, setting ground rules and reading them out loud at the beginning of each morning. Although there were still differences in the level of contribution amongst individuals within each group, as the discussion progressed, each participant began to take on the role they were able to play. Furthermore, throughout the whole process, participants from the three countries were able to learn from each other through this shared experience, sharing commonalities including being island nations and facing effects of typhoons/hurricanes, as well as differences in economic and social situations and disaster preparedness.

◆Report : Japanese Participating Youth (Delegation to the Dominican Republic) Momoko ISHIGURO

The encounter with the participating youths from Jamaica and the Dominican Republic at the International Youth Conference was a significant aspect of this program for me. This encounter gave me a huge cultural shock and taught me important lessons about what is essential for succeeding globally.

As the discussion on water and disasters began, I was immediately struck by the cultural shock. There was a significant difference in the attitudes of the participating youths. I had always understood discussions as a place where everyone must participate and express their opinions. However, I was taken aback

when some overseas participating youths left the room midway or expressed their will to present even though they had not been present during the discussion. I did not just feel confused; I often became frustrated, thinking, "How can you say something like that when you were not even present for part of the discussion?"

The peak of my frustration came when one participant, who had not prepared any slides for the presentation, asked me, "Can you give me a part to present?" In that moment, my irritation reached its peak, and I responded firmly in English, which I was not used to, saying, "If you want to present, make your

own slides and talk about it!” Afterward, I wondered if I had gone too far or if it would make things awkward, but when I saw them quietly starting to create their own slides without caring about my words, I realized that I had to be that direct for them to understand. This experience made me realize just how much I had been influenced by “Japanese-style” communication.

Throughout the discussion, I often felt frustrated by the approach of the overseas participating youth, sometimes directing that frustration toward them while trying to keep up in English. Normally, if someone expressed frustration, it would be difficult to continue a productive discussion, but they quickly shifted gears and tried to engage in the conversation with me despite my frustration.

After we presented together in the final presentation, the moment they said to me, “That was a great one.

Thank you,” I suddenly realized something. I realized that, while they do care about results, they do not place as much emphasis on the process, while I had been overly focused on the process. It was the tipping point for me when my fixed belief that the value of work comes from doing it seriously and achieving results was shattered. For the first time, my frustration with them transformed into respect for their culture. Although I thought I understood that there were cultural differences between Japan and Latin America, I had not fully grasped that even ways of thinking can differ because of culture.

Given this experience, I became aware of how important it is to deeply understand cultural and ideological differences in order to succeed abroad. I feel that this realization through the program was a profoundly valuable experience for me.



Take photo lastly by Discussion group with smile

◆Report:

Dominican Republic, Maria Laura Martínez Bisonó

Experience that Has Strongly Impacted Me

As part of the INDEX2024 program in Japan, we had the opportunity to explore key institutions dedicated to water management and disaster preparedness. Our visit began at the Japan Meteorological Agency (JMA), where we learned how Japan captures, analyzes, and communicates weather-related information to its population. It was an impressive experience, particularly observing the control room equipped with large screens displaying real-time satellite images. These tools are crucial for monitoring weather patterns,

predicting potential disasters, and providing timely alerts to ensure public safety.

The second site we visited was the Tokyo Waterworks Historical Museum, where we gained insight into the evolution of Japan’s water supply systems. The museum offered a fascinating historical perspective on how the country’s aqueducts have developed over time. More importantly, it highlighted the value the Japanese people place on the careful stewardship and preservation of their water resources. It was

remarkable to see how the country has innovated in water conservation, ensuring access to clean water and its sustainable management for future generations.

What I Have Gained: Learnings and Achievements

A key aspect of the program involved collaborative action planning. I worked alongside participants from Jamaica and Japan on an action plan centered on evacuation protocols during water-related disasters. This exercise was particularly enriching as we compared each country's evacuation strategies, identifying both similarities and differences. In our case, we focused on evacuation during water and disaster events, specifically addressing ways to reduce inequalities faced by vulnerable groups—such as children, the elderly, and people with disabilities—when accessing evacuation shelters. Our discussions revealed that, while all three countries have strong frameworks in place, there are gaps in how we cater to the needs of vulnerable populations. Together, we developed a plan aimed at closing these gaps, with the primary objective of improving safety and accessibility in evacuation centers for these groups. The exchange of ideas was not only enlightening but also collaborative,

with each country offering unique solutions to common challenges.

Another highlight of the program was the feedback sessions, where each group presented their action plans and received constructive input from peers and facilitators. This interactive approach allowed us to refine our proposals, ensuring they were practical and inclusive. It was particularly rewarding to engage with diverse perspectives and see how others tackled similar issues from their national contexts

What I Have Gained: Learnings and Achievements

In conclusion, the Tokyo discussion sessions were incredibly enriching. I am confident that the knowledge gained through this program will not only enhance my professional work but also contribute to efforts to improve water management and disaster preparedness in the Dominican Republic, especially in addressing the needs of vulnerable groups during emergencies. An example of this would be volunteering with community evacuation brigades, participating in emergency drills at my workplace, and creating a family evacuation plan.

◆Report :

Jamaica, Javis Montgomery Rose

Impactful Experience

Throughout the program, several powerful experiences were had, however the most impactful experience was the group discussions which featured at least two members of each delegation in each group. Lessons of patience, leadership, teamwork and understanding were learnt. It was humbling to be able to share experiences and insights despite the social barrier at times, as well as be the figurative “referee” that ensured that all voices were heard. Being a part of that experience has really provided a different perspective in what it is like to be a participating member of a very diverse group/team, working together to effectively achieve a common goal.

Lessons Learnt

It was enlightening to realize that three countries

with such different socio-economic profiles and geographic locations shared so many commonalities as it relates to water-related disasters. Certainly, all countries are now experiencing the increasingly deleterious effects of climate change. Not only do all countries share similar disasters albeit with different names in certain instances (hurricane and typhoon), but the prevention/mitigation strategies considering the climate change phenomenon, as well as the responsible agencies are also similar. Mitigation strategies such as early warning systems, floodplain protection and building structures according to established building codes were also seen in all three countries.

Despite these similarities, several differences arose. These differences were namely the budget allocated for such disaster responses, the profiles of what are

regarded as vulnerable groups and the sophistication of existing technology utilized to combat these water-based disasters.

Post-program Activity

There were several useful takeaways from the program that could prove effective and beneficial if employed locally. From a technical standpoint, the idea of using flood risk maps (employed by the Japan Meteorological Agency, JMA) as a warning and preparedness mechanism to notify citizens living in certain areas of the level of risk they face when a disaster (rain related) approaches would be a welcome initiative. With this in place, persons are afforded ample time to prepare for such occurrences whether that means making their homes physically able to withstand the effects, or even commence evacuation. This “best practice” is one that would be very effective if employed in Jamaica as flooding is one of the major water-related disasters that is faced here. Lobbying the stakeholders (Meteorological Service of Jamaica, the Government of Jamaica, etc.) that would have a direct interest in establishing and developing this best practice is a first step in having it employed locally.

Chapter 4

Regional Program

Outline of Regional Program

Aichi

Okinawa

1. Outline of Regional Program

Overseas participating youth took part in regional programs from September 26 (Thursday) to September 30 (Monday), 2024, divided into two groups. The participating youth from Morocco and Spain, with the theme of “Renewable Energy,” visited Aichi Prefecture, while the participating youth from the Dominican Republic and Jamaica, with the theme of “Water and Disasters”, visited Okinawa Prefecture. Together with local youth on site, they engaged in exchanges with local people, experienced local culture, and took part in activities such as first-hand-experience programs and homestays. They also visited institutions related to their respective themes, participated in discussions, and deepened their understanding of the local initiatives and theme itself.

2. Aichi

◆ Schedule

Date	Time	Program
September 26 (Thursday)	14:40-16:00	Transfer from Tokyo Station to Toyohashi Station (Hikari No. 643) Visit to Toyohashi University of Technology and Toyohashi Biomass Solutions
	16:30-18:00	Visit to Musashi Seimitsu Industry and Microgrid
September 27 (Friday)	09:30-11:00	Visit to Toyohashi Biomass Utilization Center
	13:00-15:00	Visit to Toyohashi City Hall, Lecture and Discussion
	18:00-20:00	Reception Attended by Hideaki ŌMURA, Governor of Aichi Prefecture and Homestay Matching
September 28 (Saturday)	All Day	Homestay
September 29 (Sunday)	13:30-15:30	Visit to Toyota Commemorative Museum of Industry and Technology
	16:00-17:40	Visit to Osu Shopping District, Group Walk
September 30 (Monday)	09:20-12:20	Visit to Nagoya Castle Transfer from Nagoya Station to Tokyo Station (Nozomi No. 92)

◆Report : From the World to the Local Community! Regional Program (Aichi) Hosting Executive Committee Member, Eri YOSHIMI

The Regional Program (Aichi) of INDEX 2024 was held over the course of five days from September 26 to September 30, 2024. Eight participants from Spain, eight from Morocco, 15 local youth, and 13 executive committee members primarily from Aichi IYEO joined this program. The program contents were divided into three main components: a site visit/discussion on the theme of renewable energy in Toyohashi City, a homestay program, and a facility tour and cultural exchange to promote regional understanding of Nagoya City.

① Specific Experiences That Were Particularly Memorable During This Program

The site visit in Toyohashi City and the interactions during the homestay were the most memorable moments this time.

For the site visit in Toyohashi City, we prepared to learn about renewable energy initiatives from the perspectives of industry, government, and academia. The lecture from Toyohashi Biomass Solutions at Toyohashi University of Technology, the visit to Musashi Seimitsu Industry to learn about their microgrid, and the facility tour of the Toyohashi City Biomass Utilization Center gave us advanced examples

of how technologies can be utilized in the regional society. Also, at Toyohashi City Hall we heard from city officials about their enthusiasm and challenges of environmental policies by the government, offering insights into the efforts of the city. During the following discussion session, local youth joined to reflect on the two days of activities and shared their learnings with each other.

As for the homestay program, a total of 10 families welcomed the participating youth. I also welcomed one participating youth as a host family, and through Japanese cultural experiences like kimono dressing, or the everyday life experiences like shopping, they were able to directly engage with Japanese family life and values. While the experiences and activities varied across households, all families were reluctant to say farewell when it came time to part ways, and it was clear that the bonds created transcended the differences of culture or language. It seemed to be a greatly fulfilling experience for both the participating youth as well as the host families.

② Lessons Learned and Outcomes from This Project

One of the most striking parts of this program was seeing how actively the participating youth asked questions. On the other hand, an online study session was organized in advance to support the local youth in understanding the specialized content of the program. As a result, they were able to engage in discussions even on specialized topics, which I believe made the experience more meaningful. Sharing knowledge about the current initiatives and cultural backgrounds of each country provided an opportunity to significantly broaden their international perspectives.

Furthermore, the exchange activities in Nagoya City proceeded smoothly with the support of volunteers

from the Aichi Goodwill Guides Network. Visits to the Toyota Commemorative Museum of Industry and Technology and Nagoya Castle enhanced our understanding of history and technology. As the multinational participants toured the facilities together, both the overseas youth and the local youth rediscovered the charm of Aichi and deepened their understanding of different cultures, making this another significant outcome of the program.

③ Applications for Future Organizational or Regional Activities, and Post-program Activities

The executive committee prepared extensively, coordinating numerous tasks leading up to the start of the program. To effectively convey specialized content at the site visits, we enlisted interpreters with relevant expertise and conducted multiple detailed meetings with the host organizations, all of which I feel contributed to the success of the program. Further, as a result of this program some of the local youth participants expressed interest in Cabinet Office programs, and going forward we will continue supporting them so they can thrive on the international stage.

Lastly, this program was only successfully executed due to the support of the many people in the Aichi Prefectural Government, cooperating organizations in Toyohashi City, site visit locations, and volunteers involved. Based upon these connections, we will continue to build a framework for promoting international exchange activities throughout the local community. We will continue to engage in post-program activities so as to further activities that contribute to nurturing the next generation of leaders.



Executive Committee Greeting the Arrival of the Participating Youth



Discussion



Nagoya Castle Visit

Our visit to Aichi Prefecture was a beautifully orchestrated experience, spanning five enriching days from September 26 to 30. Every moment was thoughtfully planned, and it left an indelible mark on all of us.

The first day of our journey unfolded with a captivating and enlightening visit to Toyohashi University of Technology, a prestigious institution celebrated for its cutting-edge engineering research.

Our day continued with a tour of Musashi Seimitsu Industry Co., a global leader in the production of automotive parts. Here, we had the rare opportunity to witness the intricate processes behind advanced manufacturing techniques. From precision engineering to automated assembly lines, the visit offered a firsthand look at how Japan's meticulous craftsmanship and innovative technologies come together to create world-class products. The experience was a testament to the nation's relentless drive for perfection, efficiency, and sustainable development, leaving us inspired by the spirit of ingenuity that permeates every aspect of Japanese industry.

The following day, we explored the Toyohashi City Biomass Utilization Center, a pioneering project central to the city's energy transition efforts. After a delightful lunch at Toyohashi City Hall, we engaged in meaningful dialogues with local officials. The discussions revolved around Toyohashi's environmental initiatives, highlighting the city's focus on enhancing quality of life through sustainable urban development. The day culminated in a warm and gracious reception hosted by the Governor of Aichi Prefecture in Nagoya. The evening began with a heartfelt welcome speech by the Governor and ended with a mesmerizing cultural performance, providing a lively glimpse into Morocco's rich artistic heritage, and a heartfelt connection between our two cultures.

September 28 marked a truly special day, an immersive experience staying with a host family. This opportunity allowed us to delve deeply into Japanese culture, and it became one of the most memorable parts of our journey. My host family's warmth and kindness made me feel at home, and we shared countless

enjoyable moments, from trying local dishes to learning about everyday life in Japan.

We shared delicious home-cooked meals, and I had the chance to try local dishes that were prepared with care and attention to tradition. They were incredibly kind and patient, teaching us about various customs, from the subtle art of tea preparation to the etiquette of a traditional Japanese home.

Saying goodbye on September 29 was emotional, but our journey continued with a visit to the Toyota Commemorative Museum of Industry and Technology in Nagoya. The museum elegantly narrated the evolution of Toyota from its humble beginnings in the textile industry to becoming a global automobile giant. Later, we wandered through the vibrant Osu shopping district, absorbing the lively atmosphere and gaining fascinating insights into local trade traditions and culture.

On our last day, September 30, we were treated to a guided tour of Nagoya Castle, an iconic historical site built in 1612 by Tokugawa Ieyasu. Though destroyed during World War II, it was rebuilt in 1959 and now stands as a museum dedicated to Japan's feudal history. Walking through its halls, we were transported back in time, surrounded by the echoes of a rich and storied past. This visit marked the perfect conclusion to our exploration of Aichi, filling us with a sense of admiration for Japan's ability to blend history with modernity.

This five-day journey through Aichi Prefecture was more than just a program—it was a profound cultural exchange that allowed us to see, feel, and appreciate the essence of the region's industrial and cultural landscapes. The interactions we had with local institutions and officials were deeply enriching, creating a bridge of understanding and collaboration.

I wish to express my deepest gratitude to the organizers for their impeccable planning, professionalism, and genuine kindness. You made every moment meaningful, and we take back with us not only knowledge and memories but also friendships that will endure.

Thank you all so much for this unforgettable experience!

◆Report :

From September 26 to 30, 2024, the Spanish delegation had the privilege of participating in a regional program in Japan's Aichi Prefecture, as part of the International Youth Development Exchange Program (INDEX) 2024. This immersive experience provided us with a deeper understanding of Japanese culture, technology, and sustainability practices, while fostering connections with our international peers.

Our journey began on September 26, as we arrived at Toyohashi Station. We were warmly welcomed by our hosts and had our first educational encounter at the Toyohashi University of Technology, where we received training from Toyohashi Biomass Solutions Corp.. This was followed by a visit to Musashi Seimitsu Industry Co., Ltd., where we learned about cutting-edge microgrid technology.

The following day, September 27, we visited the Toyohashi City Biomass Utilization Center, where we witnessed firsthand the process of biomass production and its applications in energy generation. After a local lunch, we engaged in discussions about Toyohashi's sustainability initiatives at the Toyohashi City Hall. That evening, we attended a welcome party where we had the honor of meeting Mr. Ōmura, Governor of Aichi Prefecture. The evening was a true cultural exchange, with our Spanish delegation and Moroccan peers showcasing traditional performances, leading up to the homestay matching. My colleague Xabi and I were paired with a host family who took us to Mie Prefecture, specifically to the vibrant city of Yokkaichi.



Spain, Pablo de la Hoz Campandegui

Our exploration of Mie included a visit to the Tsubaki Grand Shrine in Suzuka, where we delved into local customs and traditions. This was followed by an unforgettable experience: my first tea ceremony at Shisui-an in Yokkaichi, a moment of serenity that I will cherish forever. Clad in traditional kimonos, we then visited the Yokkaichi Municipal Museum, which offered an engaging glimpse into the city's and region's rich history. We also toured the Yokkaichi Pollution Museum, a poignant reminder of the area's environmental challenges and the importance of renewable energy—key themes of our program. That evening, our host family guided us in preparing homemade takoyaki and okonomiyaki, giving us a taste of authentic Japanese home cooking.



On September 29, we set off for the Toyota Commemorative Museum of Industry and Technology. Here, we learnt the fascinating story of Toyota's origins, highlighting Nagoya's pivotal role in Japan's industrial development. The day continued with an interactive tour of the city, including a visit to the bustling Osu Shopping Centre. That night, we enjoyed dinner with our friends, followed by an exciting evening at a karaoke bar—a quintessential Japanese experience that left us all with wonderful memories.



The final day, September 30, was a bittersweet one, filled with heartfelt goodbyes. Before departing, we had the opportunity to visit the Nagoya Castle with senior volunteer guides who provided insights into its strategic history and the symbolism of the iconic Shachihoko. It was a fitting finale to our time in Aichi, blending Japan's rich cultural heritage with the warmth of its people. After this memorable visit, we journeyed back to Tokyo, marking the end of an unforgettable chapter.



Our days in Aichi were not just a learning experience, but also a chance to build bridges between our cultures, to embrace the values of sustainability, and to foster friendships that transcend borders. I leave Japan with a deeper appreciation for its dedication to innovation, tradition, and community—a sentiment that I will carry forward in all my future endeavors.

3. Okinawa

◆ Schedule

Date	Time	Program
September 26 (Thursday)	12:00-14:35	Delegation from Jamaica, Transfer from Haneda Airport to Naha Airport (JAL915)
	16:55-19:30	Delegation from Dominican Republic, Transfer from Haneda Airport to Naha Airport (ANA1097)
September 27 (Friday)	10:00-10:30	Courtesy Visit to the Governor of Okinawa Prefecture
	10:30-12:00	Lecture by Disaster Prevention-related Organizations in Okinawa
	14:00-16:30	Lecture and Discussion at the University of the Ryukyus
	18:45-21:00	Reception and Homestay Matching
September 28 (Saturday)	All Day	Homestay
September 29 (Sunday)	10:00-11:30	Talk Session at Naha Citizen Collaboration Plaza
	12:00-14:30	Lecture and Tasting of Emergency Rations
	15:00-17:00	Discussion
September 30 (Monday)	09:30-11:15	Visit to Shuri Castle
	13:15-15:50	Transfer from Naha Airport to Haneda Airport (JAL910)

◆Report : Hosting Activities That Inspire Positive Change

Hosting Executive Committee Chairperson, Sachiko MIYAZATO

Introduction

In 2024 over the course of five days from September 26 to 30, the Okinawa IYEO hosted 16 participating youth from the Dominican Republic and Jamaica as part of INDEX 2024.

This marked the first hosting activity in Okinawa in several years since the COVID-19 pandemic. During that period of time the program was temporarily suspended, there were no new members joining the Okinawa IYEO, and some existing members faced personal or work-related circumstances preventing them from participating. While this brought about concerns relating to whether or not the hosting activities could be conducted with the limited number of active members, the executive committee members worked together to ensure the success of the hosting activities. I would like to extend my heartfelt gratitude to each member of the committee and their families who supported these efforts.

1. Particularly Memorable Moments

Two moments stand out vividly in my memory. Both involved farewells.

The first was on the morning when the homestay program concluded, where the host families brought the participating youth back to the venue on time, but everyone was reluctant to leave. They chatted enthusiastically, took photos, hugged, and shed tears... Watching them express their reluctance to say goodbye moved me deeply, and at this point I felt that the exchanges were a success.

The second was at Naha Airport on the final day, where the local youth participants all had very good expressions on their faces, as if they had broken out of their shell. These experiences help grow individuals. I was delighted to see how this program served as a catalyst for their development.

Thirteen local youth participated this time. Some joined simply because their parents encouraged them, but their post-program survey responses revealed

significant transformations over the five days. They enjoyed interacting with overseas participants, were inspired by their peers, surprised after learning about issues in other countries, faced language barriers, discovered shared histories, broke down preconceived notions about other nations, going to show that their minds and hearts were profoundly engaged. Some even expressed a desire to participate as a representative Japanese youth in future programs, and I hope this leads to more applications.

2. Learnings and Outcomes from the Program

There is something I am strongly reminded of each time we host these programs. This was felt this time as well, which is, “What we can see in the world is but a small fraction, and hidden behind the visible parts lies an immense amount of effort and time invested by many individuals.”

Serving as an executive committee member and being involved in the planning, preparation, and operation of the program allows one to experience “behind the scenes.” I have come to realize that creating a single “scene” requires the collaboration of many people. I was unaware of this when I participated in the program as a youth, but now I understand the great efforts made by each of the hosting committees to create these programs, and for this my gratitude for them

grows. One long-serving executive committee member shared, “I participate as a way of giving back because I had such an enjoyable experience when I was a youth participant.”

These collective efforts and intentions are connected to the learning and growth (talent development) of the international participants, local youth, and host families “on the stage,” and the “positive changes” that likely occurred within each of them can surely be considered the achievements of the local executive committee.

3. How to Utilize Lessons and Outcomes in the Future

Preparations as hosts involved continuous coordination with various parties, and through this process we learn to understand different perspectives, positions, intentions, and find ways to reach compromises. I am confident that this experience will be beneficial for all executive committee members, including myself, in any future endeavors. I also believe it will be valuable for promoting international exchanges in the local regions.

Regarding the opportunities for positive change presented by these exchange programs, I hope to provide more youth in Okinawa these firsthand experiences, and to contribute to the development of local talent.

◆Report :

Dominican Republic, Gabriel Enrique Noboa Concepcion

Experience that has Strongly Impacted Me

Among the top experiences that has left a lasting impact on me is witnessing the resilience embedded in Japanese culture, particularly through their emergency systems in Okinawa. The meticulous and inclusive nature of their disaster preparedness drills is nothing short of remarkable. What truly stood out to me was the extent to which these drills are designed to be practical and inclusive, taking into account not only the local population but also tourists and individuals with special needs. This level of foresight and inclusivity ensures that everyone, regardless of their background or abilities, is prepared and knows what to do in the event of an emergency. The Japanese approach to

disaster preparedness is a testament to their resilience and communal spirit, which has been honed through centuries of facing natural calamities and serves as a perfect example of how things should be done.

What I Have Gained: Learnings and Achievements

One of the most enlightening moments during my time in Okinawa was attending a lecture by Professor Jose Castro. His insights fundamentally changed my understanding of earthquakes and the dangers they pose. Professor Castro emphasized a critical point that reshaped my perspective: “Earthquakes do not kill people; buildings do. Therefore, we should be careful

of the buildings' designs." This statement underscored the importance of architectural integrity and the role it plays in safeguarding lives during seismic events. It made me realize that while natural disasters are inevitable, the extent of their impact can be significantly mitigated through thoughtful and robust building designs.

This lecture was not just informative but transformative. It prompted me to think critically about the infrastructure in my own country and the potential risks posed by poorly designed buildings. The knowledge I gained from Professor Castro's lecture is invaluable, and it has equipped me with a deeper understanding of the importance of structural safety in disaster-prone areas.

Also, a key achievement of this program was building a network of professionals, academics, and talented young individuals who are dedicated to creating a better future. I'm sure that this diverse and dynamic network will be a valuable asset for future projects, fostering innovation and collaboration that aim to make a significant and positive impact on the world, driving sustainable progress.

Applying My Experiences to Help My Local Community

The insights and experiences I gained from my time in Okinawa and the lecture by Professor Jose Castro have

inspired me to take proactive steps to raise awareness and advocate for better disaster preparedness in my local community. The Dominican Republic, much like Japan, is susceptible to earthquakes. However, the level of preparedness and the quality of building designs may have some room to improve.

Drawing from what I learned, I believe it is crucial to initiate a dialogue within my community about the importance of earthquake-resistant building designs. This can be achieved through various means, such as organizing workshops, collaborating with local authorities, and engaging with architects and engineers to emphasize the need for rigorous building codes. Additionally, I plan to advocate for the inclusion of practical emergency drills that cater to all segments of the population, including tourists and individuals with special needs, much like the system in Okinawa.

In conclusion, the resilience and preparedness demonstrated by Japanese culture, particularly in Okinawa, have profoundly impacted me. The lecture by Professor Jose Castro has further deepened my understanding of the importance of structural integrity in mitigating the effects of earthquakes. Lastly, the network built in this program will help me brainstorm new solutions, raise awareness and advocate for better disaster preparedness in my local community, ensuring that we are better prepared to add value in addressing any future challenges.

◆Report :

Jamaica, Shavel Watson

The visit of the Jamaican delegates to Okinawa, Japan's southernmost prefecture, was truly memorable. Every aspect of the trip, from the diverse activities and insightful lectures, to the warm hospitality of the homestay experience, was thoroughly enjoyed. We gained valuable knowledge and understanding of Okinawa's history, culture, cuisine and resilient nature towards disasters.

The delegates met with the Okinawa prefectural vice-governor, Mr. Ikeda Takekuni, where we learnt about Okinawa's history and culture. We discovered that Okinawan culture features a distinctive formal

attire known as the Kariyushi, often worn for special occasions, blending traditional and modern elements. We also learned about Shisa, the iconic guardian statues from Ryukyuan tradition, which are believed to protect homes and communities from harm. These symbols reflect Okinawa's rich cultural heritage and deep-rooted customs.

Okinawan culture is a blend of indigenous traditions and influences. The island is famous for its vibrant arts, including traditional music, dance (like the Eisa), and crafts such as pottery and textiles. The Okinawan language and customs, such as ancestral worship,

reflect a rich heritage distinct from mainland Japan.

Homestay

My homestay was fulfilling, I learnt a lot about everyday life with a Japanese family. They were incredibly welcoming and showed a genuine appreciation for my Jamaican culture, embracing various elements. We shared moments listening to Bob Marley music and engaging in conversations about Jamaica's renowned Blue Mountain Coffee. While enjoying various Japanese/Okinawan dishes such as Taco Rice, Miso soup, Ume and others. I even tried playing the Sanshin, a traditional Okinawan musical instrument used in folk songs. We visited the Okinawa museum where I learnt a lot about Okinawa's history and then we shared a meal of Okinawa Soba which I found very delicious. Following that, we visited Okinawa World, where I heard and saw traditional Okinawa music and dances. We also did a tour of the Gyokusendo Cave, which is the longest cave in the south of Okinawa Island.

Shurijo Castle

Our visit to Shurijo castle, a UNESCO World Heritage Site, offered a glimpse into the Ryukyuan Kingdom's rich history. Our time of visit showcased the reconstruction of the main hall (Seiden) which was destroyed by a fire in 2019, along with other sections of the castle. The castle's serene park and gardens offered us a panoramic view of Naha, which was a perfect blend of nature and history.

Lectures

The lectures were enlightening, and engaging, providing a deep dive into Japan's methods of dealing with water and disasters, which were delivered by various entities. We discussed various disasters affecting Okinawa, such as typhoons, earthquakes and droughts.

The lectures we participated in covered diverse topics, from water resources to disaster prevention and crisis management in Okinawa. We learnt steps taken to manage Okinawa's water resources, focusing on water conservation, sustainable use, and emergency response

during natural disasters like typhoons and floods. Their expertise in implementing advanced water management systems and disaster preparedness strategies is admirable as the Okinawa Prefecture Enterprise Bureau (OPEB) managed to avoid water rationing for thirty (30) consecutive years. By learning from Okinawa's integrated approach to managing water supply, ensuring infrastructure resilience, and mitigating the impacts of extreme weather events, Jamaica could improve its water resources sustainability and disaster preparedness as the island is prone to hurricanes and droughts. The discussion with local youths provided valuable insights as I was then encouraged to do my part in disaster preparedness in my country.

I aim to share the knowledge and experience gained with my colleagues and promote water conservation techniques within my community. I will encourage local youths within my community to become a part of water conservation efforts and disaster preparedness by creating and distributing small emergency supply kits.

My overall experience of the regional program in Okinawa was remarkable, and will certainly enhance my professional and learning path. I am incredibly grateful for the opportunity that my fellow participants and I received.

Chapter 5

Evaluations

Delegation Leaders' Reports

Questionnaire

Overall Evaluation

Delegation Leaders' Report

Morocco, Wiam CHAKIB

As part of the strengthening of academic and scientific cooperation between the Kingdom of Morocco and Japan, I had the honor of leading a Moroccan delegation of six PhD students from four Moroccan Universities in the prestigious "International Youth Development Exchange Program: INDEX." This program, designed to foster academic and cultural exchanges among young people from different countries, offered us a unique platform to collaborate, learn, and exchange on crucial issues like renewable energies.

Upon our arrival in Tokyo, we were warmly welcomed by the Ambassador of the Kingdom of Morocco to Japan before embarking on a journey by Shinkansen to Aichi Prefecture. Our first stops in Toyohashi and Nagoya allowed us to participate in a series of visits and events that unveiled the intricacies of Japanese innovation and the incredible charm of Aichi Prefecture.

A visit to Toyohashi University of Technology, for instance, introduced us to the Kosen education system, a fascinating model that emphasizes technical training and close collaboration with industry. This innovative approach illustrated Japan's efficiency and rigor in preparing the engineers and technicians of tomorrow. We also had the opportunity to explore cutting-edge industrial sites, including Musashi Seimitsu Industry Co., which showcased a microgrid based on renewable energies, and the Toyohashi Biomass Utilization Center, a testament to the city's commitment to sustainability through biomass and responsible resource management.

One of the highlights of our stay was a reception hosted by the Governor of Aichi Prefecture, where the opportunities for deeper cooperation between our countries were warmly emphasized. Our experience in Aichi was enriched by a cultural immersion through a homestay with Japanese families, which allowed for an authentic exchange of cultures. That exceptional day spent with Japanese families remains a particularly cherished memory. It provided us with a chance to immerse ourselves in their daily lives, savor their cuisine, understand their traditions, and most importantly, form

deep and genuine bonds.

After five enlightening days in Aichi Prefecture, the second part of the program brought us back to Tokyo, where the focus shifted to discussions and exchanges centered on renewable energy. We visited Japan's Ministry of Economy, Trade, and Industry (METI), as well as innovative companies like Sekisui Chemical and Iberdrola, gaining a deeper understanding of Japan's strategies for a sustainable energy transition.

This program in Tokyo, which gathered young participants from Japan, Morocco, Spain, Jamaica, and the Dominican Republic, provided a forum to discuss, debate, and share ideas with a shared curiosity and a united passion for a better future. Each participant brought unique perspectives, dreams, and challenges, and together, we brainstormed ways to overcome the barriers to sustainable development. Exchanges with Japanese youth, along with our peers from Spain, the Dominican Republic, and Jamaica, enriched our reflections and sparked new ideas.

One of the most memorable moments was our audience with Their Majesties the Emperor and Empress of Japan. It was a moment of immense pride and emotion, a unique opportunity to represent Morocco and share our commitment to peace and sustainable development. The experience was a once in a lifetime opportunity, one that the INDEX program made possible.

During the three days of group discussions in Tokyo, the delegations formulated recommendations addressing challenges related to renewable energy and water and disasters, culminating in a final session where we presented our conclusions. These presentations were an enriching experience, fostering a deeper understanding of each country's priorities and realities.

Our journey through Japan was also a dive into the heart of its culture, history, and traditions, which we explored with awe. From the majestic Nagoya Castle to the vibrant streets of Asakusa, every place we visited told a story, carrying with it a deep sense of history and soul.

INDEX was not just a platform for academic exchange, it was a gateway to intercultural understanding, a chance to build friendships and cooperation across diverse backgrounds, including Japan, Spain, the Dominican Republic, and Jamaica. This program embodies a commitment to a sustainable future through dialogue and innovation. By contributing to this international initiative, I had the privilege of forging strong connections with young people united by a shared vision of peace and sustainable development.

More than an academic mission, this program was a human adventure, a cultural immersion, and a celebration of diversity and solidarity among young people from across the globe. I return with precious memories, new friendships, and ideas for further strengthening cooperation between our countries. I am profoundly grateful for the honor of leading this Moroccan delegation to the heart of the Land of the Rising Sun!

Spain, Xabier Triana Gomez

As the National Leader of the Spanish delegation at INDEX2024, I had the honor of coordinating and supporting a group of seven incredible young individuals passionate about contributing to the global fight against climate change, particularly in the field of renewable energy. My primary objective throughout the programme was to empower Spanish delegates and create a supportive environment where they could grow both personally and professionally. From the beginning, I knew that a key part of our success would be ensuring a safe and inclusive space for everyone to share ideas and learn.

To achieve this, I defined a strategy that revolved around two main components: first, creating a “safe space” where the participants could connect through online meetings, with daily evaluations and individual support; and second, equipping them with knowledge through capacity-building sessions. I partnered with “Ecologistas en Acción,” a relevant Spanish Climate action NGO specializing in renewable energy, which conducted two online training sessions for the team. These sessions, coupled with multiple online preparatory working meetings and the creation of a national position paper, helped lay a solid foundation for our discussions during the program.

Leading this delegation was a transformative experience, one that I will carry with me for the rest of my life. The most impactful moment for me wasn't

just facilitating the team's journey, but witnessing how deeply involved, interconnected, and empowered the participants became throughout the program. Their enthusiasm and commitment to the cause reinforced my belief in the power of youth engagement and international cooperation. By the end of the program, I found myself deeply moved and motivated to dedicate my life to supporting such initiatives.

Reflecting on my personal growth, two major learnings stand out. The first is my enhanced understanding of the protocols and structural support needed to run an international cooperation program. This experience has sharpened my organizational and leadership skills, which I will continue to apply in future projects. The second, and perhaps more rewarding, achievement came from the feedback I received from my delegation. After hosting daily evaluations and providing continuous support, the positive responses from the participants showed me how effective our approach had been. Their feedback, paired with their remarkable performance during the program's four working groups, reinforced how capable and motivated they are. This sense of accomplishment has been one of my proudest moments as a leader.

Post-program, the Spanish delegation remains highly motivated and engaged. We are committed to supporting future Spanish participants, sharing the knowledge and experiences we gained from this journey and we

also plan to continue collaborating on various climate activism initiatives, specially strengthening our impact on international advocacy decision-making processes where we hope to raise awareness about renewable energy and inspire others to take action.



Dominican Republic, Maria Antonia Dicen Romero

It was a great honor to participate as the leader of the Dominican Republic delegation. On behalf of our youth delegation, selected to take part in the prestigious International Youth Development Exchange Program (INDEX 2024), I extend our deepest gratitude for this invaluable opportunity. We are privileged to have been part of an initiative that, since 1994, has served as a bridge of friendship and mutual learning between our two nations, Japan and the Dominican Republic.

This year, as participants from the Caribbean region, we address the topic of vital global importance: Water and Disasters. With climate change reshaping our world, the urgency of this issue has never been more evident. This exchange allowed us to share knowledge and explored innovative solutions in water management and disaster prevention.

The Regional Program in Okinawa was a learning experience. The Japanese approach to disaster preparedness is a testament to their resilience and communal spirit, which has been honed through centuries of facing natural calamities and serves as a perfect example of how things should be done.

This level of foresight and inclusivity ensures that everyone, regardless of their background or abilities,

is prepared and knows what to do in the event of an emergency.

Our visit began at the Okinawa Prefecture, that where we interchange ideas with the Vice Governor of Okinawa, quite honor for our delegation to share time with him and the Jamaica delegation members.

To participate in lectures organized for us, getting to know the infrastructure and maturity of disaster risk prevention in Okinawa and above all, meeting the locals and being able to exchange cultures, I think it has been one of the most fascinating experiences we have had.

In Tokyo, our visit began at the Japan Meteorological Agency (JMA), where we learned how Japan captures and analyzes weather-related information to its population. These tools are crucial for monitoring weather patterns, predicting potential disasters, and providing timely alerts to ensure public safety.

Also, a key achievement of this program was building a network of professionals, we had the opportunity to meet other young people from different reality and continent, like Spain, Marruecos, Jamaica and Japan.

I am confident that the knowledge gained through

this program will not only enhance my professional work but also contribute to efforts to improve water management and disaster preparedness in the Dominican Republic, especially in addressing the needs of vulnerable groups during emergencies.

As an official of the Dominican government, after this experience, I feel more committed to the promotion of spaces for youth participation and co-creation, but has also, to be part of transformation actions and support for measures that strengthen us as a country in the face of natural disasters and water risks.

Jamaica, Andrea R. Spencer

Online Preparatory Meeting (Water and Disasters) – September 6, 2024

The participants benefitted tremendously from this meeting, as it provided one, the foundation for the discussions that would be held during the programme, and two, the opportunity to become familiar with the subject areas/topics that would be discussed, as well as their respective group members.

Regional Programme: Okinawa, Japan - September 26 – September 30, 2024

This was the most impactful part of the programme - the lessons learnt, knowledge gained, and the homestay experience were immeasurable. Throughout the lectures and discussions, we learnt that there were more similarities than differences between Jamaica, Okinawa, and the Dominican Republic, with respect to the impacts of climate change on our countries.

Given Jamaica's geographical location, the country is vulnerable to water related disasters, especially hurricanes (typhoons). It was undoubtedly clear that preparation is a key response to climate change. Preparation is what makes the difference in the extent to which a country is affected, and indeed the response measures that are implemented after an event. The importance that Okinawa and by extension Japan, places on preparation is exemplary. This is evident in the programmes/initiatives that are implemented, at both the local (prefecture) and national levels. Of note, are the Bosai Camps and yearly Evacuation Drills, that involve the residents of Okinawa.

In Jamaica, there is a proverb that says, *"bend a tree while it is young, because when it is old it will break."* This means that *"children should be taught/disciplined the right way when they are young, because trying to do it when they are older might be too late."* The value that Japan places on training their youth, through initiatives such as the INDEX programme, left an indelible mark. The participants learnt the importance of preparation, and were able to recommend programmes/initiatives that could be implemented, to strengthen their country's resilience the impacts of climate change.

This importance of preparation was solidified, through the interactive lectures and robust discussions among the participants. Additionally, it was noted that preparation tends to be successful with the coordinated involvement of all stakeholders – residents, universities, and government agencies, at both the local and national level. Preparation is important all stages - before, during and after the event. Of note, is that equal importance is placed on preparing for earthquakes, and not just water-related disasters.

As stated during the lecture at the University of the Ryukyus, *"earthquakes do not kill people, buildings do."* The role of research in disaster prevention cannot be overemphasized, it is important that the buildings are constructed using material and technical specifications that will prevent loss of life/damage to structures. Jamaica has strict building codes that are adhered to, for both residential and commercial buildings. While Jamaica is not currently affected by tsunamis, a Public Education Campaign that focuses on tsunamis is timely, given the ever changing nature of climate change.

Finally, the opportunity to spend time with a local family was appreciated by all the participants. The warmth and welcome extended to us by our homestay families was truly humbling, and the bonds that were formed with our Okinawan family will reside with us forever.

International Youth Conference : Tokyo, Japan – October 1, 2024 – October 3, 2024

The discussions that commenced during the Tokyo Programme culminated at the International Youth Conference. The group interactions, and transfer of knowledge and best practices were beneficial to every participant. Natural water-related disasters are inevitable. However, proper preparation and planning for these events are key.

The visit to the Japan Meteorological Agency (JMA) further emphasized the importance that is placed on preparation – forecasting, coordination between key stakeholders, and timely dissemination of information – before, during and after an event. Of note was the seamless operations of the respective units within the JMA. Indeed, it is the preparation and the subsequent response measures that are implemented, that will strengthen a country's resilience to climate change.

The International Youth Conference also afforded the opportunity for the participants have audience with the Emperor and Empress of Japan. Additionally, the participants from all five countries, benefitted from the informative presentations that were shared in plenary, on both sub-themes – *Water and Disasters and Renewable Energy*.

The cultural exchange provided the opportunity for the participating countries to share their traditions, which was well received by all who were in attendance.

As the curtains closed on INDEX 2024, the Jamaican delegation returned home with a commitment to do our best to impart the knowledge gained, as we strive to strengthen Jamaica's resilience to the effects of climate change.

Evaluation

1. Survey method

Questionnaire was administered online using Google Forms, in both multiple choice and descriptive formats.

2. Response rate

32 Foreign Participating Youths responded (100%)

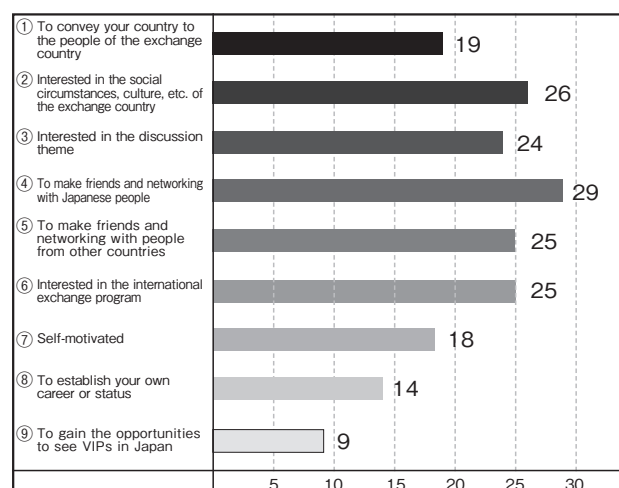
3. Overall evaluation

A Questionnaire survey was conducted on the Foreign Participating Youths who participated in the program, using a 5-point scale and free description. The results are as follows.

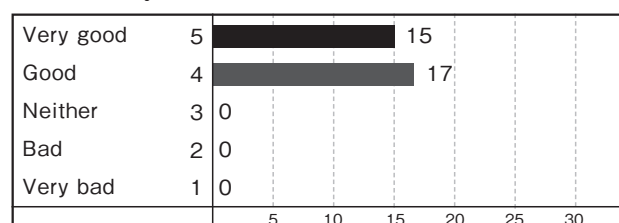
4. Overall program

(1) Why did you join the Program?

(Multiple answers possible)



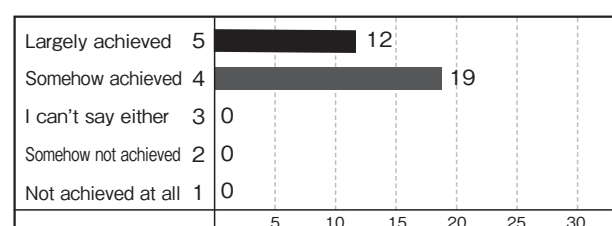
(2) What is your overall evaluation of the INDEX?



- INDEX 2024 has been a very enriching program. Regarding 'Water and Disaster,' I enjoyed learning about the success story of Okinawa and participating in the homestay. (Water and Disasters)

- The INDEX was very thought out and was executed satisfactorily. (Water and Disasters)
- I had an amazing experience, learning the culture and meeting the people. I hope that there will be given more time with homestay families. (Water and Disasters)
- This program was an amazing opportunity that we are very much grateful for, and where we were able to enjoy and learn from the Japanese culture and its institutions. (Renewable Energy)
- I consider INDEX 2024 has been very good in terms of the idea of the program and event. In fact, I have learned a lot about myself, other cultures and I have gotten deeper into the topic. Now, I am willing to keep working on climate change with my team and with other people who I have met during the stay in Japan. (Renewable Energy)

(3) Do you think you could achieve the goals you wanted to achieve through the program?



(Goals through participation in the program)

- To garner information on how the different participations countries plan, respond, and recover as it relates to natural water related disasters; also, to gain knowledge and appreciation for the Japanese culture. (Water and Disasters)
- I hoped to learn and share information related to how technology can streamline the disaster preparedness and evacuation. I also hoped to network with persons from different countries. (Water and Disasters)
- Engaging in discussions with various countries about the common global challenges we all face, while also discovering the rich culture of Japan, was a truly valuable experience. (Renewable Energy)
- Learning about Japan and the culture of Japan and talking about the environment, climate, and energy is very interesting to me. (Renewable Energy)

(4) How do you evaluate yourself after the program in the following 12 items?

5. Very skilled / 4. Skilled / 3. Basic / 2. Rather Insufficient / 1. Insufficient

① Knowledges and understandings of Japan and participating countries' cultures	3.9
② Communication skills	4.2
③ Leadership skills	4.4
④ Problem solving skills / ability to address problems	4.4
⑤ Ability to respond to different cultures	4.8
⑥ Challenge spirit (I like to challenge myself)	4.4
⑦ Ability to adapt to group activity / cooperation and flexibility in groups	4.6
⑧ Having national identities	4.5
⑨ Spirit to take initiatives / play an active role	4.6
⑩ Management skills	4.4
⑪ Discussion skills	4.4
⑫ Networking skills	4.3

※ Averages of 32 participating youths.

(5) If you have any other thing to gain from the participation in this program, please write it in detail.

- Expanding Networks for Future Collaborations. Enhancing International Exposure and Representation. (Water and Disasters)
- A great understanding of how the other participating countries are tackling climate change. (Water and Disasters)
- Sharing my experiences with my country and especially with responsible authorities. (Renewable Energy)
- Patience and compassion with my peers and the facilitator when working in a group. (Renewable Energy)

(6) Do you think that your participation in this program has changed your perspectives towards the life and society?

Very much	5	12
Mostly	4	17
Neither	3	1
Not much	2	2
Not at all	1	0

- I learnt a lot about the Japanese culture in respect to their proactive attitude to natural disasters and how a society social behavior influences recovery and adaptation. (Water and Disasters)
- It has made me understand Japanese culture more and I have gained more respect for the kindness, ingenuity and resilience of the Japanese. (Water and Disasters)

- I learned a lot about the issue of climate change and global warming, and how we can solve these issues. (Renewable Energy)
- The experience with the host family and how social conventions are in Japan helped me understand and interpret better social and cultural differences. (Renewable Energy)

(7) Do you think that this program contributes to promoting mutual understanding among you and people from other countries?

Very much	5	20
Mostly	4	11
Neither	3	1
Not much	2	0
Not at all	1	0

- It was quite nourishing to work with multiple nationalities and draft a project proposal together in an inclusive methodology. (Water and Disasters)
- This program definitely encourages mutual understanding amongst participants as we had to discuss and decide on various topics for the presentation. (Water and Disasters)
- Because we understand each other, we can solve the problems of each country by sharing experiences. (Renewable Energy)
- The flexibility of having meals together, mixed groups for tours, institutional visits, discussions... (Renewable Energy)

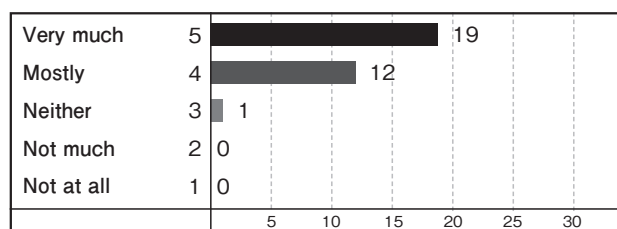
(8) Do you think that this program contributes to establishing friendship among you and people from other countries?

Very much	5	24
Mostly	4	7
Neither	3	0
Not much	2	0
Not at all	1	0

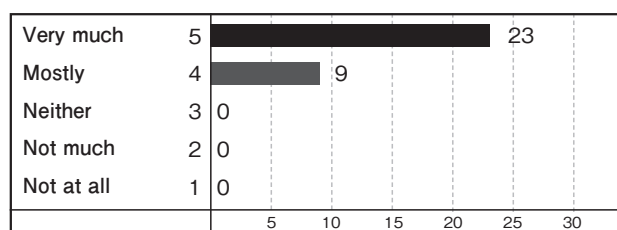
- This type of exchange not only favors government cooperation between the two countries, but also weaves bonds of friendship between people and especially among young people who can promote real change. (Water and Disasters)
- The integration amongst the participants was good and the home stay aided in the various discussions. (Water and Disasters)

- We met a lot of friends from Spain and Japan, and It's so interesting to discover every culture and every background. (Renewable Energy)
- It's nice to keep informal contact with people from the program afterwards, keeping connected and maybe running future projects. (Renewable Energy)

(9) Do you think that this program encourages your willingness to participate in social contribution activities?



(10)- 1 Do you agree that your experience from this program will be useful for your future?



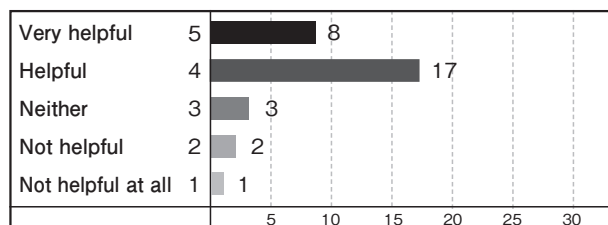
- The various water resources management strategies by Japan were intriguing and I will definitely share with my colleagues about these methods. (Water and Disasters)
- I hope that with this experience I've gained I will be able to fully understand the real world of work. Travelling to Japan was one of the best experiences I have had. I learned a lot of Japanese dialect and I hope to continue learning. My area of study is computer science, however it is very encouraging to learn more from different majors under the water and land management. (Water and Disasters)
- It's so fruitful. (Renewable Energy)
- International cooperation programs like this are a once-in-a-lifetime opportunity. (Renewable Energy)

(10)-2 Those who gave a 4 or 5 rating above, what do you think how you can benefit from the program?
(Multiple answers possible)

① Be able to show this experience as a social activity record for job hunting or so.	20
② Be able to show this experience as the career achievements in a broad sense.	20
③ Be able to show this experience as a track record in my field of expertise.	18
④ Be able to influence positively to my personality formation.	22
⑤ To expand the international perspective and improve the understanding.	23
⑥ To deepen the awareness towards global issues and intercultural communication.	22
⑦ To make friends and expand the network among participants.	22
⑧ To make friends and expand the network among your delegation.	22

5. Online Preparation Meeting

(1) Was the Online Preparation Meeting helpful in preparing you for the face-to-face program in Japan?



(2) What were the Pros of the online exchange?

- It allowed the delegation to meet and exchange ideas, especially expectations of the pre-exchange program. We value it as very positive. (Water and Disasters)
- The online meeting prepared me for the very basics of what the program is about. (Water and Disasters)
- Initial introduction of participants and an overview of the program. (Renewable Energy)
- We could see each other before the program to introduce ourselves and get to know each other and that was really useful also to know about the details of the programs and the topics we had to work in the working groups. (Renewable Energy)

(3) What were the Cons of the Online Preparation Meeting ?

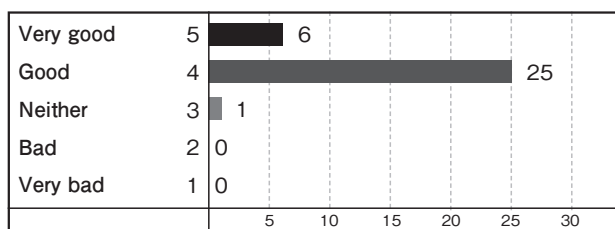
- Too long. (Water and Disasters)
- The scheduling time was not ideal. (Water and Disasters)
- It would be good to talk about the program in detail and have an action plan for the discussion topic so that we can seriously prepare for it. (Renewable Energy)
- There were no "icebreakers" for us to get to know ourselves, all self-managed was a bit uncomfortable

because we didn't know each other.

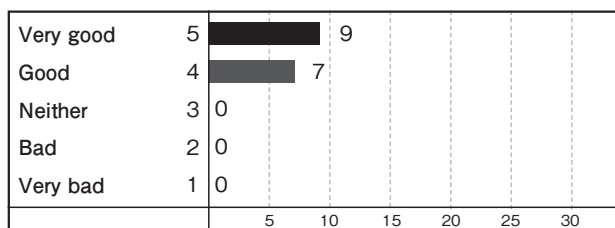
And the presentations and questions draft weren't later followed throughout the group discussions and conference, so it was confusing to prepare work.
(Renewable Energy)

6.Tokyo Program and the International Youth Conference (25th-26th Sep, 1st-4th Oct.)

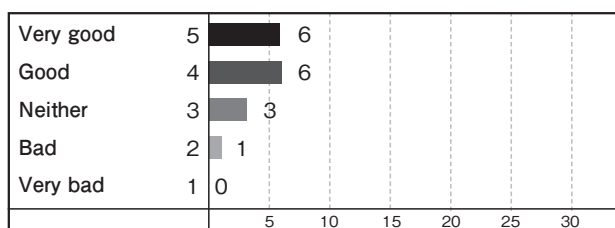
(1) How was your Group Discussion?



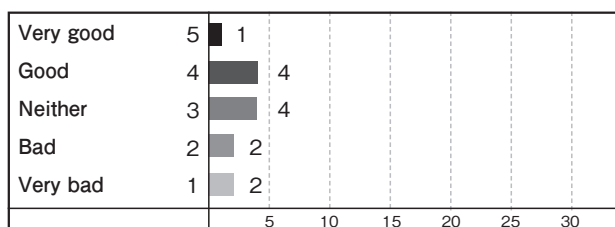
(2)-1 How was the institutional visit to the Agency for Natural Resources and Energy, the Ministry of Economy, Trade and Industry?



(2)-2 How was the institutional visit to SEKISUI CHEMICAL CO., LTD.?

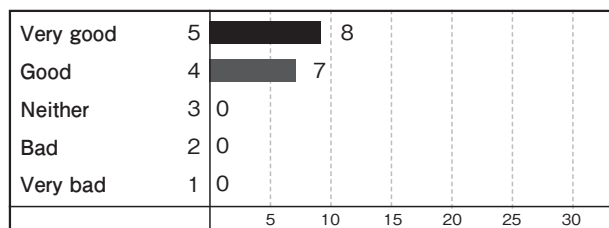


(2)-3 How was the lecture from IBERDROLA RENEWABLES JAPAN CO., LTD.?

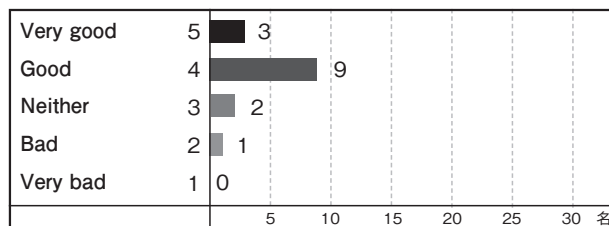


(3)-1 How was the institutional visit to Japan

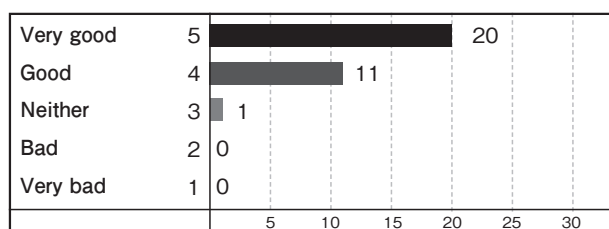
Meteorological Agency?



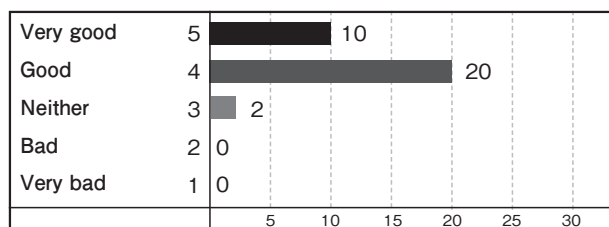
(3)-2 How was the institutional visit to Tokyo Waterworks Historical Museum?



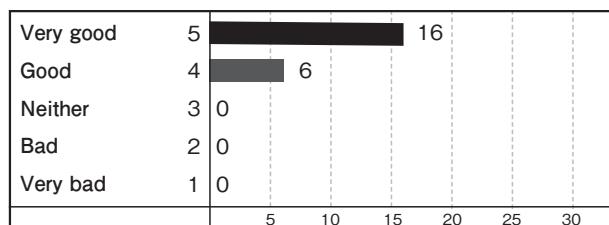
(4) How was the Reception and the Cultural exchange party?



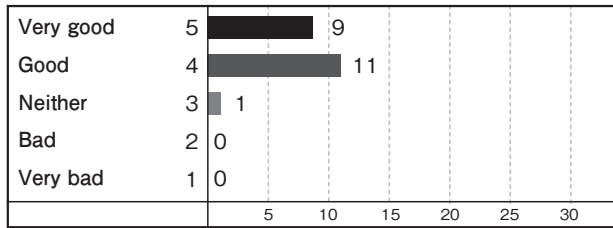
(5) How was the Presentation of Discussion Results?



(6) How was the visit to cultural and historical districts in Tokyo?



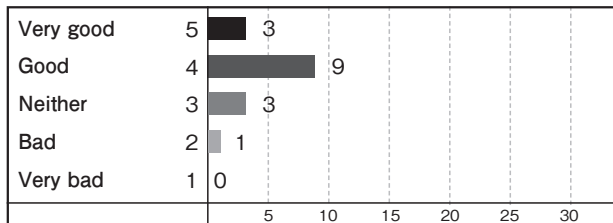
(7) How was the Farewell party?



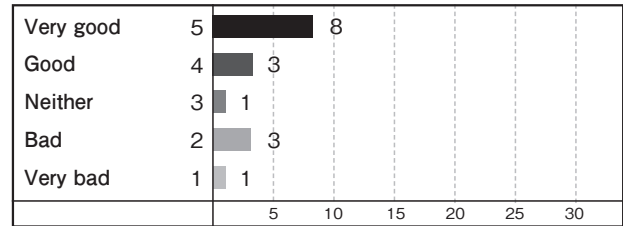
- I thoroughly enjoyed participating in both the Tokyo Program and the International Youth Conference. These experiences have been incredibly enriching, and I am deeply grateful for the opportunities provided. The chance to engage with such diverse perspectives, learn from leading experts, and collaborate with passionate young leaders from around the world has been invaluable. I truly appreciate the platform these programs offered to broaden my understanding of global challenges and inspire meaningful action for the future. Thank you for making this experience possible! (Water and Disasters)
- I would have like to interact more with the other countries from the different theme topic (Spain and Morocco), I'm sure that I could have learn a lot from them. (Water and Disasters)
- It's so interesting we liked so much. (Renewable Energy)
- We should have had more time to prepare the research of the discussions group. (Renewable Energy)

7.Regional Program: Aichi Prefecture (Renewable Energy) 26th-30th Sep.

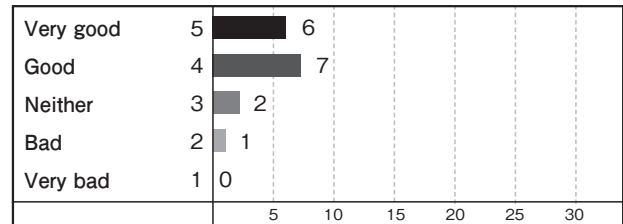
(1) How was the visit to Toyohashi University of Technology and Toyohashi Biomass Solutions Corp. on 26th Sep.?



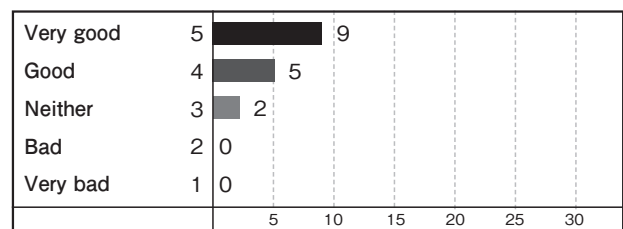
(2) How was the visit to Musashi Seimitsu Industry Co., Ltd. on 26th Sep.?



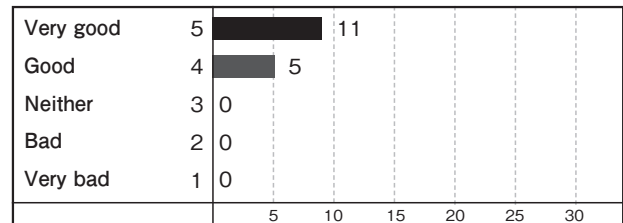
(3) How was the visit to Toyohashi City Biomass Utilization Center on 27th Sep.?



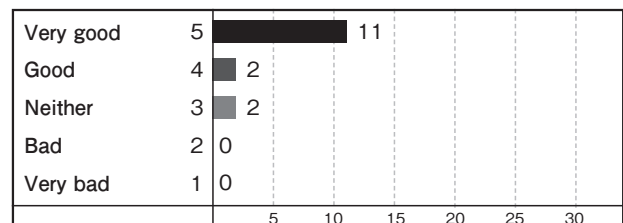
(4) How was the introduction and discussion of city initiatives at Toyohashi City Hall on 27th Sep.?



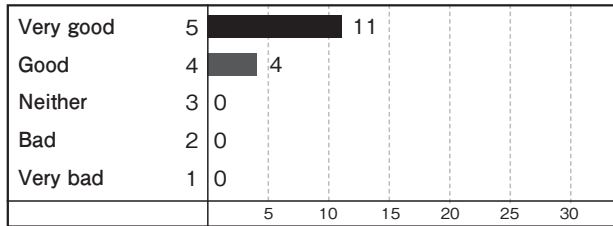
(5) How was the Reception Party on 27th Sep.?



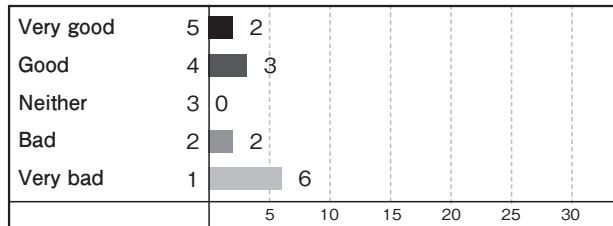
(6) How was the Homestay Program for 2 nights and 3 days from 27th to 29th Sep.?



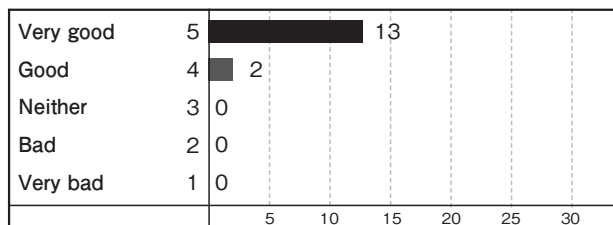
(7) How was the visit to Toyota Commemorative Museum of Industry and Technology on 29th Sep.?



(8) How was the walking at Osu area on 29th Sep.?



(9) How was the visit to Nagoya Castle on 30th Sep.?

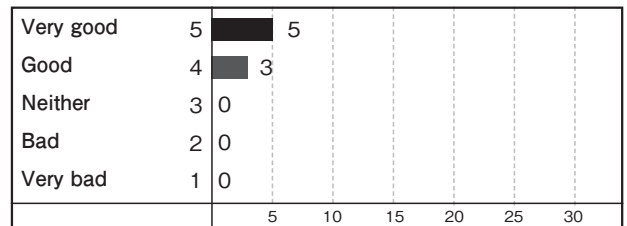


(10) Please write any comments/great points of Regional program (Aichi Prefecture).

- We were touched by the warm welcome we received upon our arrival. However, the program was very intense and demanding, leaving all participants exhausted. Additionally, the youth were very kind and helpful. (Renewable Energy)
- I adore Aichi prefecture more than Tokyo, because I love nature and landscapes more than highest building, also in Aichi we spend time with the host family, we discovered a lot of places, we tried traditional customs. (Renewable Energy)
- A special thank you to the family for hosting me and for making this experience so memorable. I feel so fortunate to have spent the stay surrounded by such kindness and support. (Renewable Energy)

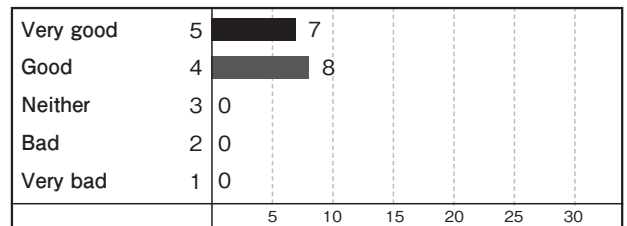
8.Regional Program: Okinawa Prefecture (Water and Disaster) 26th-30th Sep.

(1) How was the free time on 26th Sep.?

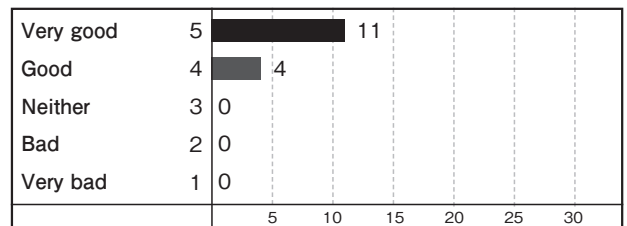


※ Participating youths of Jamaica

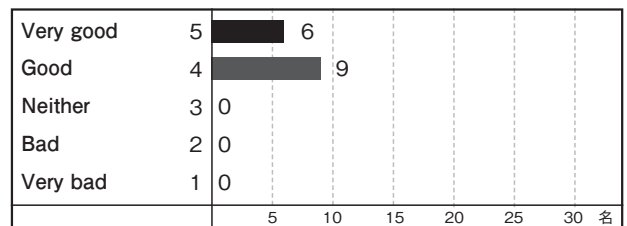
(2) How was the orientation in the bus on 27th Sep.?



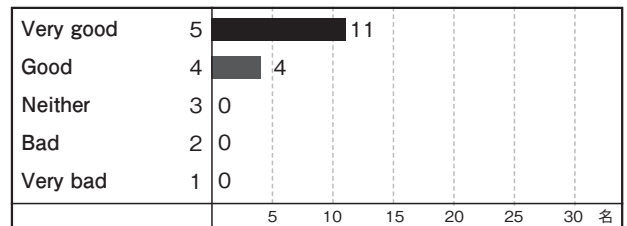
(3) How was the Courtesy Visit to Okinawa Prefectural Office on 27th Sep.?



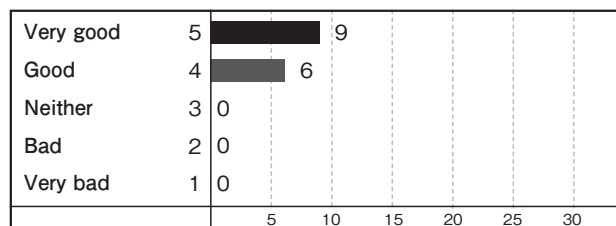
(4) How was the lecture by Disaster Prevention and Crisis Management Division on 27th Sep.?



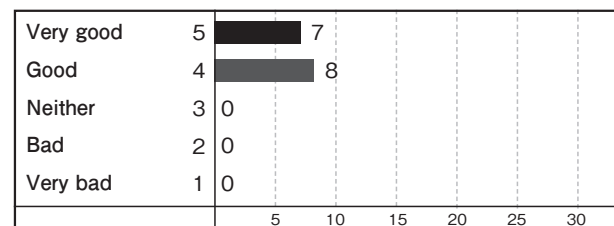
(5) How was the lecture by Professor Castro Juan Jose on 27th Sep.?



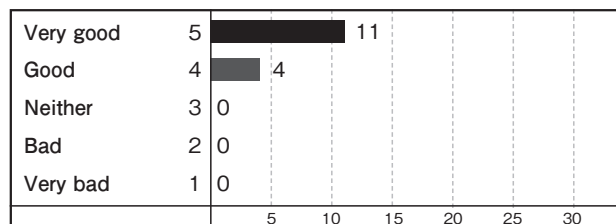
(6) How was the Discussion Program with Local Youth at Ryukyu University on 27th Sep.?



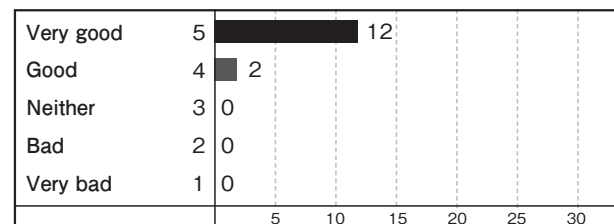
(11) How was the Discussion Program with Local Youth on 29th Sep.?



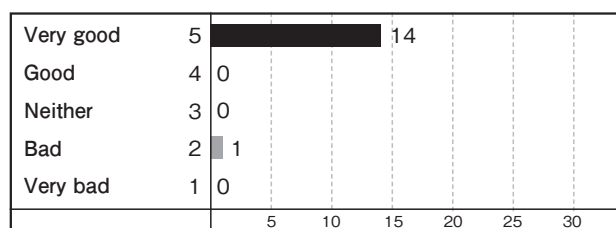
(7) How was the Welcome Reception and Homestay Matching on 27th Sep.?



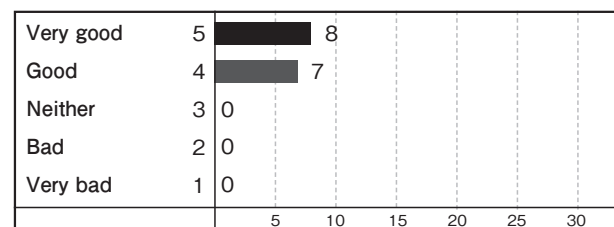
(12) How was the waking around Kokusai-dori with local youths on 29th Sep.?



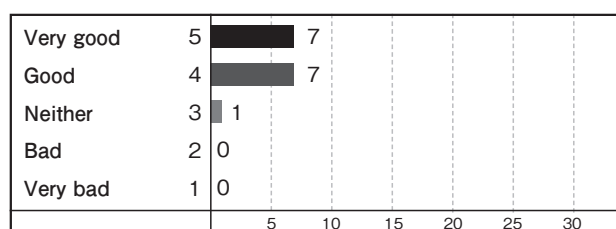
(8) How was the Homestay Program for 2 nights and 3 days from 27th to 29th Sep.?



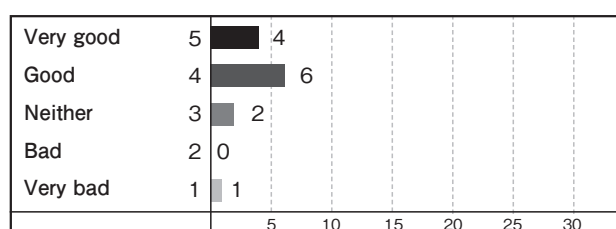
(13) How was the visit to Shurijo Castle on 30th Sep.?



(9) How was the Talking Session with Disaster prevention officer on 29th Sep.?



(10) How was the lecture by the with Disaster prevention camper on 29th Sep.?



(14) Please write any comments/great points of Regional program (Okinawa Prefecture).

- The home stay program is a gem, you should keep doing it in the following editions. Okinawa local youth were lovely, and received us with such positive energy, they were the star of the program. (Water and Disasters)
- The homestay was very good, the host family was very welcoming and warm. Consideration could be given for the homestay period to be longer. The visit to the Governor's office was also great. (Water and Disasters)
- The leaders and residents of Okinawa share a common understanding that typhoons are going to be around for a very long time, and it is not ideal to live in fear, so they are pursuing everything possible to adapt. (Water and Disasters)

9. After face-to-face program in Japan

(1) How would you like to use your experience in this program in the future?

- The connections I made with other participants and local leaders will be invaluable. I plan to nurture these relationships to foster collaboration on future projects, particularly in areas related to youth engagement, environmental initiatives, and community development. (Water and Disasters)
- I would like to, alongside the people I met in this program, create a project that can add value to the world in topics related to sustainability. I think that the networking of this event was the most valuable thing this program offered. (Water and Disasters)
- I would apply what I learned in this program to my professional work and hope to bring this knowledge to the Dominican authorities managing water and disaster programs. (Water and Disasters)
- I will use this experience to continue my studies towards my degree. I hope to write a summary or report about this journey and recommend many others to try to join exchange programs such as this. (Water and Disasters)
- Like the residents of Okinawa, I want to have people within the Caribbean sharing the common understanding that hurricanes are here to stay, and we should pursue all adaptation measures available so that we can live in comfort and instead of fear. (Water and Disasters)
- The connections and knowledge from the program will help me contribute to similar initiatives and encourage others to engage in cross-cultural exchanges. (Renewable Energy)
- In the future, I plan to leverage my experience from this program by applying the knowledge and skills I gained to enhance my research in desalination technologies and renewable energy. The international perspective and collaboration opportunities provided by the program will be valuable in fostering partnerships, driving innovative solutions, and contributing to sustainable development initiatives in my home country. (Renewable Energy)
- I would like to leverage my experience in this program to improve my communication and problem-solving skills. This could involve applying the knowledge gained here to better understand user needs, develop more effective solutions, and

contribute to collaborative projects. Ultimately, the goal would be to continue to improve and adapt. (Renewable Energy)

- I would like to use this experience as the start of a better understanding of Japan and its culture, improving my network and meeting really interesting people. (Renewable Energy)

(2) Please feel free to write any comments/suggestions for the improvement of this program for the future.

- Establishing an alumni network for past participants would be beneficial for ongoing collaboration and support. This network could facilitate knowledge sharing, project collaboration, and continued cultural exchanges beyond the program duration. (Water and Disasters)
- Add more time between sessions and do not make 3 people share a room in the hotel stays. (Water and Disasters)
- Free time spaces are essential for relaxation, networking, and open conversations among participants. With that in mind, I propose a 15-minute break between sessions. (Water and Disasters)
- Organization of Joint Events: Plan inter-program program between the participants of the 2 themes to encourage interaction and collaboration. (Renewable Energy)
- I love this program so much everything it's so organized, but I think that we hadn't a lot of time to visit traditional places, because I think the heritage of a country is his past and his history. And I hope that next time, we can visit more prefectures. Thank you so much, we love Japan so much, people are so kind, so helpful, we feel safe and secure, and Japanese people so respectful and had good manners. (Renewable Energy)
- Thanks for giving me this amazing opportunity, I have managed to learn so much about the topic, know the Japanese culture, meet incredible people and have an unique experience that I will never forget. (Renewable Energy)

Summary Evaluation of the Program

I Purpose

In order to assess the outcomes of this year's program and apply the findings to future ones, a survey was conducted at the conclusion of the program targeting Japanese participating youths. The evaluation criteria for the survey were based on a five-point scale (from 5 to 1, with 5 representing the highest evaluation).

Note:

This report focuses on the evaluation of the "Japanese Youth Goodwill Mission."

For detailed information on the five-point evaluation survey conducted with the participating youths, please refer to the "Supplement".

II Evaluation Results

1. Achievement of Program Objectives

1 Promotion of Mutual Understanding Between Japan and the Partner Countries [1-(7)]

When asked, "Do you think your mutual understanding with the people from the partner countries has deepened through this program?" 77.3% of the Japanese participating youths responded with a score of 4 (agree) or higher on the five-point scale, indicating that nearly 80% of them felt that their mutual understanding had deepened.

2 Promotion of Friendship between Japan and the Partner Countries [1-(8)]

When asked, "Do you think this program has deepened the friendship between you and the people of the partner countries?" 90.9% of the Japanese participating youths responded with a rating of 4 or higher on a 5-point scale (indicating that they felt the friendship had deepened). Over 90% of them overall expressed that the friendship with their counterparts from the partner countries had deepened, reflecting a high level of satisfaction.

3 Willingness to Engage in Social Contribution Activities [1-(9)]

When asked, "Has your participation in this program increased your willingness to start or engage in social contribution activities?" 72.7% of them responded with a rating of 4 or higher on a 5-point scale (indicating a certain level of willingness). This shows a positive level of interest in social contribution activities.

4 Impact of Program Participation on the Future of the Participating Youths [1-(10)-1]

When asked "Do you think this program will be beneficial for your future?" 95.5% of them answered "4" (beneficial) or more on a 5-point scale, which resulted in an extremely high evaluation.

5 Pre-setting and achievement of goals through participation in the program [1-(3)]

When asked, "What was your goal in participating in this program? Were you able to achieve that goal?", 72.7% of the Japanese participating youths gave it a rating of 4 or higher ("huge") out of 5, indicating a certain degree of satisfaction.

III Summary Evaluation

Finally, we summarize the evaluation of this program, including the overall evaluation of the questionnaire.

In response to the question, “How would you rate the entire program? [1-(2)],” 81.1% of the Japanese participating youths and over 80% of the entire participating youths answered 4 or higher (good) on a 5-point scale, resulting in a high overall evaluation. In the free-form comment section that followed, some said that they had been able to learn more about their host country through the series of programs that continued from the pre-training session, that it was a meaningful experience to visit places that are difficult to reach in everyday life, such as government agencies and facilities related to the theme in both Japan and the host countries, and that it was meaningful to meet and learn from the unique Japanese members. On the other hand, some participating youths said that some programs did not provide enough opportunities to deepen their learning about the theme or to interact with overseas youths. Given the above, we would like to keep making improvements in the implementation of the program from next year onwards.

In response to the question “How would you like to make the most of the experience of this program in the future? [5-(1)],” the Japanese participating youths gave many positive comments, such as “I have become more aware of my contribution as a Japanese youth in the global field,” “I would like to exploit the experience of visiting a country that has more advanced efforts on the theme than Japan in my career development,” “I would like to actively engage in nurturing the next generation of young people and activities based on the theme in the alumni association, and play an active role as a leader in that field.”

To sum up the above evaluation results by the Japanese participating youths, it can be said that, overall, through the entire program with a focus on the theme, the Japanese participating youths improved their knowledge as talents who can contribute to solving global social issues. Furthermore, it is highly expected that they will use what they learned in the program to play an active role as leaders and demonstrate leadership in their respective fields in the future. Therefore, it can be concluded that the purpose of this program was fully achieved.

内閣府青年国際交流事業報告書 2024

International Youth Development Exchange Program (INDEX) 2024

国際社会青年育成事業（外国青年招へい）

International Youth Development Exchange Program (INDEX) (Invitation Program)

発行：内閣府

〒100-8914

東京都千代田区永田町1-6-1

TEL: 03-6257-1435

URL: <https://www.cao.go.jp/koryu/>

Published by Cabinet Office, Government of Japan

1-6-1, Nagatacho, Chiyoda-ku, Tokyo,

100-8914, JAPAN

TEL: (+81) 3-6257-1435

URL: <https://www.cao.go.jp/koryu/>

編集：一般財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町2-35-14

東京海苔会館 6 階

TEL: 03-3249-0767

URL: <https://www.centerye.org/>

Edited by Center for International Youth Exchange

Tokyo Nori bldg. 6F, 2-35-14 Ningyocho,

Nihombashi, Chuo-ku, Tokyo,

103-0013, JAPAN

TEL: (+81) 3-3249-0767

URL: <https://www.centerye.org/>

印刷：株式会社 長正社

